

# 南葵音楽文庫

## 紀要



第1号



## 目次 CONTENTS

・南葵音楽文庫の1世紀.....	4
<b>■論文・調査報告</b>	
・南葵音楽文庫の特徴と魅力 ―コレクションの形成から― .....	9
美山良夫	
・ミュージック・ライブラリーの夢 南葵音楽図書館の成立と展開 ―南葵文庫音楽部の頃― .....	19
林淑姫	
・南葵音楽図書館の出版活動 .....	29
篠田大基	
・《通奏低音の演奏を習得するためのいくつかの勘どころ》とヘンデル? .....	41
佐々木勉	
・スナール社の挑戦 ―南葵音楽文庫に眠る室内楽シリーズ― .....	49
近藤秀樹	
<b>■資料紹介</b>	
・ベートーヴェン自筆書簡 .....	58
・カゼッラ自筆書簡 .....	62
・南葵音楽文庫収蔵の《メサイア》楽譜 .....	66
・ルソー『音楽事典』 .....	72
・《グリー、キャッチ集》手写楽譜本 .....	74
・サン＝サーンス《ミューズと詩人》 .....	76
・R. シュトラウス《アルプス交響曲》 ―「演奏権付き楽譜」をめぐる― .....	78
・松山芳野里《5つの日本的な歌》 .....	80
・日本吹奏楽の師・フランス陸軍軍楽隊長ルルーの2つの楽譜 .....	82
・音楽とともに ―徳川頼貞著『蒼庭樂話』『頼貞隨想』― .....	84
<b>■関連歴史資料</b>	
・「故ダブリウ・エイチ・カミング博士文庫」 .....	88
・「カミング音楽文庫競賣残餘図書購入顛末」 .....	89
・資料解題 .....	90
<b>■収蔵貴重資料 目録と紹介</b>	
・和歌山県立博物館保管資料 .....	94

## 南葵音楽文庫の1世紀



①南葵文庫



②南葵楽堂



③『演奏楽曲に就て』(1917)



④大正期の慶應義塾図書館

- 1902 (明治35) 年4月 徳川頼倫による南葵文庫開館…①
- 1913 (大正2) 年9月 徳川頼貞英国留学へ出発 音楽書・楽譜を購入 15年12月帰国
- 1917 (大正6) 年8月 故W.H.カミングス蒐集音楽資料の一部を遺族より購入
- 1918 (大正7) 年10月 南葵楽堂開堂……………②  
楽堂半地下に音楽資料を配架  
第1回音楽会開催……………③
- 1920 (大正9) 年10月 楽譜・音楽書閲覧開始  
カミングス文庫公開
- 1923 (大正12) 年9月 関東大震災により南葵楽堂損壊
- 1924 (大正13) 年7月 音楽資料をのぞき南葵文庫を東京帝国大学に寄贈 建物は無償貸与
- 1924 (大正13) 年10月 南葵楽堂図書部開設  
旧南葵文庫事務所にて公開
- 1925 (大正14) 年10月 南葵音楽事業部設立  
附属の南葵音楽図書館開設
- 1927 (昭和2) 年3月 南葵音楽図書館が「ベートーヴェン百年忌記念會」展示を開催
- 1927 (昭和2) 年 M.フリートレンダー蔵書の一部を受贈 ベルリンで貴重書購入
- 1928 (昭和3) 年 喜多村進が掌書長に就任 この頃 J.ホルマン旧蔵楽譜受け入れ
- 1932 (昭和7) 年11月 南葵音楽図書館閉館
- 1933 (昭和8) 年4月 南葵音楽図書館蔵書、寄託先の慶應義塾図書館で公開……………④
- 1945 (昭和20) 年6月 寄託解約により慶應義塾図書館より搬出
- 1954 (昭和29) 年4月 徳川頼貞逝去

1967 (昭和42) 年3、4月 「南葵音楽文庫特別公開」展……⑤  
東京と大阪で開催

1970 (昭和45) 年5月 東京駒場の日本近代文学館で南葵  
音楽文庫仮公開開始

1977 (昭和52) 年7月 南葵音楽文庫仮公開終了 財団法人  
読売日本交響楽団(以下読響)蔵に

1977 (昭和52) 年9月 新収蔵部分等を東京音楽大学(1992  
～国立音楽大学)に寄託

1999 (平成11) 年11月 寄託先から読響に返還

2006 (平成18) 年6月 読響と慶應義塾大学が資料のデジ  
タル化で合意  
8月から撮影開始……⑥

2009 (平成21) 年10月 資料画像閲覧サイト「デジタル南  
葵楽堂」公開……⑦

2012 (平成24) 年6月 一般社団法人芸術資源マネジメン  
ト研究所がデジタル化を継承

2014 (平成26) 年7月 『蔵書目録 (貴重資料)』掲載写本  
部分のデジタル化完了

2015 (平成27) 年 読響が貴重資料の修復に着手

2016 (平成28) 年6月 和歌山県が一般会計補正予算に南  
葵音楽文庫関係予算を計上し県議  
会で可決

2016 (平成28) 年8月 読響と和歌山県が寄託契約締結

2016 (平成28) 年12月 南葵音楽文庫を和歌山県立図書館  
に移送

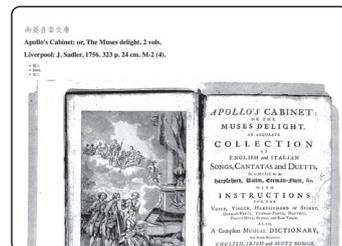
2017 (平成29) 年12月 南葵音楽文庫一部公開……⑧  
和歌山県立博物館で企画展開催



⑤「南葵音楽文庫特別公開」展(1967)



⑥デジタル化作業の様子 (2007)



⑦「デジタル南葵楽堂」画面



⑧一部公開





# 論文・調査報告



## 南葵音楽文庫の特徴と魅力

### —コレクションの形成から—

美山良夫

南葵音楽文庫は、徳川<sup>よりきだ</sup>頼貞（1892～1954年）がその根幹部分を築いた音楽資料コレクションである。蒐集活動は、優れた協力者をえて、1917年から1931年という短期間に、一気呵成におこなわれた。

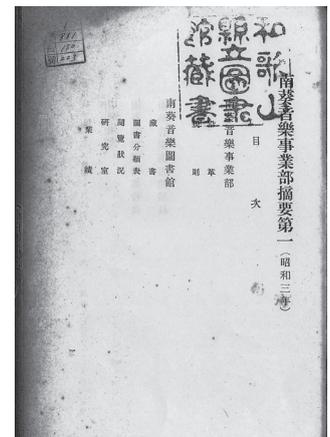
頼貞は、24歳から40歳になるまでにおこなった一大事業について、ほとんど語らなかつた。1943年に公刊した自身の半生記である『<sup>わいていがくわ</sup>蓄庭樂話』のなかで、世界の楽都における体験や高名な音楽家との交友を語り、楽堂の建設やオルガンの導入経緯を紹介しても、みずから深くかかわった音楽資料と音楽図書館については、カミングス文庫入手時と後年ワシントンの米国国会図書館でカミングス文庫の他の部分に接したときの思い出を書き留めたほか、稿を起し、ページを割きはしなかつた<sup>(1)</sup>。

父<sup>よりみち</sup>頼倫（1872～1925年）が設立した南葵文庫の年報である『南葵文庫報告』第9（1917年10月）以降の号には、南葵文庫附属大礼記念館（南葵楽堂）の建築、音楽会の詳細な報告が掲載されているが、音楽資料については点数、閲覧数の簡潔な記載があるのみである。

そのため、今日に至るまで、徳川頼貞を紹介する文章、記事、事典項目には、また彼を紹介する書物にも、この分野の事業やその内容、意義について、正鵠をえた記述はほとんどなかつた。一方で、文庫の所在などについて、二次的な情報をもとにした誤解やその引用が繰り返されてきた。閉鎖から85年あまり、戦争などの外部要因も手伝い、一般のアクセス機会がきわめて限られていた文庫の歴史そのものも、正確で詳細な紹介を妨げてきた一因ではあろう。

しかし頼貞は、繰りかえし音楽資料の所蔵目録を印刷配布し、コレクションの内容を公表していた<sup>(2)</sup>。

関東大震災後に研究者の協力をえて蔵書整理に着手、1925年、南葵音楽事業部を設立すると、その『南葵音楽事業部摘要』第1（1929年）に南葵音楽図書館の蔵書を「目下所蔵の閲覧用整理済のものは音楽書及楽譜合計約三萬冊蓄音機レコード二千五百枚に過ぎないが」と断ったうえで、その概略を紹介している<sup>(3)</sup>。それに先



『南葵音楽事業部摘要』第1 目次

(1) 徳川頼貞『蓄庭樂話』春陽堂，1943，p. 124-127.

(2) 篠田大基『南葵音楽図書館の出版活動』本紀要 p. 29 以下を参照。

(3) 『南葵音楽事業部摘要』第1 南葵音楽図書館，1929，p. 10-18.

だって『南葵音楽図書館所蔵カミングス文庫に就て』（兼常清佐、辻莊一著）を刊行してもいる<sup>(4)</sup>。今日、これら印刷物の多くがデジタル化され、インターネットを通じ閲覧可能である。

印刷刊行された資料とは別に、英文タイプ打ちした購入資料リスト、ホルマン文庫のリスト、所蔵レコード目録（部分）なども残されている。また、時期は限られ、きわめて部分的ではあるとはいえ、国内外への発注書も残存している。ほとんど1世紀前に作成された図書カードが、木製のカードケースごと残されており、南葵音楽文庫とともに和歌山に運ばれている。

購入関連資料と校合し、コレクションの形成について調査する環境が、いまようやく整いはじめた。

なぜこのような調査が重要なのであろうか。それは、南葵音楽文庫と今日よばれている資料群の根幹部分にかかわる基本的な性格、特徴、そしてその魅力は、このコレクションの形成ときわめて密接に関わっているからである。

調査は、端緒についたばかりである。音楽書や楽譜を多数集めた図書館は、いまは大学をはじめとして国内にもいくつかある。それらと南葵音楽文庫を同列にあつかうことはできない。同様の方法で整理することもできない。南葵音楽文庫は、点数や冊数をもって、その規模や価値を語ることを拒んでもいる。

一般図書館の分類整理から逸脱し、冊数をもって規模を言い表せないという点にこそ、日本の音楽資料コレクションのなかで南葵音楽文庫が占める唯一無二の特徴があり、真髓があるという過言ではない。この稀有なコレクションの魅力をさぐり、深耕するため、まずはコレクション形成の出発地に旅してみよう。

### 1. ケンブリッジの徳川頼貞

1915年夏、英国で23歳を迎えようとしていた徳川頼貞は、戦争の影響が英国における生活にも直接及びかねないと考えたためもあり、帰国する考えに傾いていた。父がかつて辿ったように英国に渡り、ケンブリッジで錚々たる教授陣に音楽を学び始めていた。その傍ら、父の許可をえて、いずれ自宅敷地につくることを念頭に音楽堂の設計依頼をおこない、オルガンの発注も済ませていた。

英国へ向けて旅立ってから2年余、若い頼貞は、自



南葵音楽図書館で使用されていたと思われるカードケース

(4) 兼常清佐、辻莊一『南葵音楽図書館所蔵カミングス文庫に就て』南葵音楽図書館、1926。

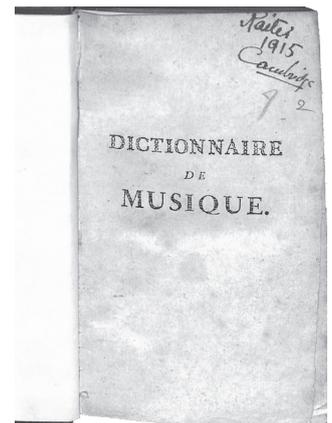
らの体験の豊穡を振り返り、帰国後に予想される生活との差異を想像したであろう。留学に向かう旅路の途中、モスクワで体験した《カルメン》、ケンブリッジからロンドンに出向いて観た《パルジファル》英国初演などの興奮は、日本に戻ってからは望みえない。オペラ鑑賞のために用意した図書や、当日のプログラムなど手許にあった文献に加え、自分自身の今後に資すとおもわれる資料を、日本では、あるいは日本からの注文では入手できないような楽譜や稀少な文献を、また音楽事典などの基本文献類を購入し、持ち帰るか送らせようとするのは至極当然であった。

ケンブリッジを引き払い、小泉信三とともにロンドンに移ったのは、6月18日。頼貞は、それに先だってヘファーズ書店を訪れたにちがいない。1876年に開業した同店は、1900年頃にはケンブリッジ大学との関係をつよめ、各カレッジに稀観本や学術文献を納めたりするばかりでなく、研究者や学生たちにとっても欠かせない、この大学都市の象徴的な書店になっていた<sup>(5)</sup>。

現在南葵音楽文庫には、思想家ジャン＝ジャック・ルソーがひとりで執筆した音楽事典が4種類残されている。そのうちのひとつで、1781年にジュネーヴで出版された版には、1915年にケンブリッジで購入したとする頼貞の署名がある。おそらくヘファーズ書店で購入し、その際に、今後は目録を南葵文庫に送るように依頼したのであろう。大英博物館の音楽写本所蔵目録などが、1920年代には南葵音楽文庫の所蔵となっているのには一驚を禁じ得ないが、これもヘファーズ書店を経由しているのであろうか。

ケンブリッジで学んでいた頃に増加した音楽書や楽譜は、書店で購入するばかりではなく、寄贈された場合もある。メンデルスゾーンのオルガン曲集(ライプツィヒ、ペータース社版)もそのひとつである。これら受贈記載がある資料を蔵書から選びだせば、当時の頼貞の交友がより詳らかになるであろう。

頼貞は、E. ネイラーに和声などを学ぶだけでなく、エマヌエル・カレッジのオルガニストをつとめていた彼の演奏を聴いたであろう。頼貞のオルガン購入にあたって、オルガン製作者に口添えをしている。頼貞の帰国後も、南葵楽堂の開堂のために序曲を委嘱するなど、ネ



ジャン＝ジャック・ルソー『音楽事典』(1781)

内扉に購入場所と購入年の記載がある

(5) ヘファーズ書店は、当初ステーションナリーの店として開業したが、1896年からブックセラーを追加した。大学図書館、研究者、学生が必要とする書籍を英国外からもひろく入手、短期間のうちに「世界が知っている書店」といわれるまでになった。ながく一族による経営がつづいたが、1999年にロンドンの大手書店 Blackwell が買収した。現在も Trinity Street に店を構えている。

イラーとの交友は密であった<sup>(6)</sup>。

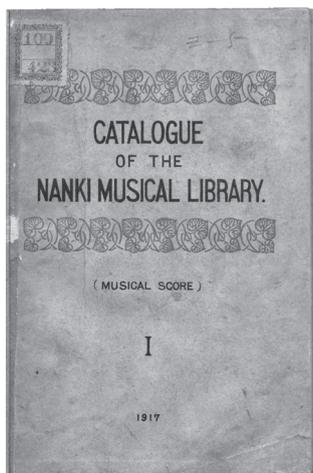
ルソーの音楽事典、メンデルスゾーンのオルガン曲集は、1914年から翌年にかけて頼貞の留学時代にケンブリッジでコレクションに入った。これらは南葵音楽文庫の所蔵資料のうちの2点でしかないともいえるが、ただの2点ではない。ここからは、頼貞の留学生活のシーンにとどまらず、100年前の日本がどのように西洋音楽を受け入れようとしていたか、またそのときの西洋音楽の状況が透けてみえよう。

タイトル、出版年、出版社、サイズ、ページ数といった一般的な書誌情報には収まらない物語や歴史が、南葵音楽文庫の個々の資料のなかには無数に眠っている。ケンブリッジ留学時代に由来する資料にも、すでにその一端は見いだせる。

頼貞が米国経由で帰国してから1年近くを経た1916年秋、英国滞在中に依頼したB. トーマスによる楽堂の設計図が到着した。その案をもとに、W. M. ヴォーリズによる最終設計が進展する時期に、頼貞のもとにある音楽書、楽譜の整理とリストの作成がおこなわれている。1917年、楽堂建築の地鎮祭(3月24日)に引き続いて、同年5月という記載があるタイプ打ち楽譜目録が作成された<sup>(7)</sup>。10月には、Nanki Musical Library名で楽譜の所蔵目録が印刷発行された<sup>(8)</sup>。その巻頭注記には、掲載楽譜は頼貞がヨーロッパ滞在中に蒐集したとの記載が見られる<sup>(9)</sup>。

しかしこの注記は正しくない。目録には、おそらく父頼倫ないし紀州徳川家に贈られた楽譜、徳川家の中で音楽を修得するために用意された練習曲や教則本、オペラの作品解説などとともに、多数の唱歌集が含まれ、記載された購入年は留学以前のものも散見される。

楽譜の目録刊行の翌年には、音楽書の目録も刊行され



*Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Score), I (1917)*

(6) ネイラーと徳川頼貞との交友は、オルガン製作者紹介、南葵楽堂のための作曲、カミングス・コレクション残余の購入など多岐にわたる協力をもたらした。ネイラーからの私的な書簡も残されている。また南葵音楽文庫所蔵のネイラー作品楽譜には、頼貞がその作品を聴いた記録が付記されている。またネイラーの子息により、序曲《徳川頼貞》の楽譜コピーが、東京藝術大学図書館に寄贈されている (A7/N333/T)。

(7) *Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Notes), Second Edition*, 1917.5, 東京大学総合図書館蔵 018.1:O41.

(8) *Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Scores), I*, [Nanki Bunko], 1917.10.

(9) タイプ稿(1917年5月)には記載がないが、出版された目録(同年10月)には以下の記述が注記NOTEと題された序文の最初にみられる。“This booklet comprises the Musical Scores which collected by Hon. Yorisada, Son and Heir of Marquis Tokugawa during his stay in Europa and it arranged in alphabetical order by Composers”。

ている<sup>(10)</sup>。これらの目録によれば、楽譜数は 740、音楽書は 433 である。

ライブラリーという観点からみれば、分類や体系化は手探りの面もあり、さきに引用した音楽事典やオルガン曲集を含むとはいえ、内容は個人コレクションの域を大きく出るものではない。ただ、個人文庫とはいわずに Nanki Musical Library を発行者としているのは、すでに次のステップが構想され、この年には実行に移されていたためである。この点については、次節で触れたい。

1 世紀前の日本の、音楽を学んだ個人ないし家庭が所蔵していた音楽書、楽譜のコレクションを、ここまで正確に記録している、そして記録した資料のほとんどが伝承されている例は稀である。現在の南葵音楽文庫の中から、1917、18 年の目録をもとに楽譜、音楽書を抜き出せば、当時南葵文庫の建物のなかに南葵文庫本体の蔵書とはわけて、南葵音楽資料室 (Nanki Music Room) と呼ばれた部屋に別置されていたときのコレクションの様子を、実際の楽譜、音楽書もって、ほぼ再現できるであろう。

南葵音楽文庫は、85 年前に完結したコレクションでありながら、その形成過程を概ね跡づけることができる。さらに時期によって収書の軸や方法、態勢が変化してもいる。ちなみに、その変化は、細部は省くとして、大きく 3 つの時期に分けられよう。

- 第 1 期 1917 年まで 南葵音楽資料室
- 第 2 期 1917 ~ 1924 年 南葵文庫音楽部
- 第 3 期 1925 ~ 1931 年 南葵音楽事業部音楽図書館

## 2. 音楽図書館への始動 (1917 年)

大きな転機が、若い頼貞に訪れた。1916 年、結婚間もない彼のもとに、B. トーマスから楽堂の設計図が届き、ヴォーリズによる楽堂最終設計が進展した。その半地下に設けられる予定の音楽図書室と、南葵文庫内の音楽資料室にある現有資料との差異が、日々明らかになってきた。

尤も、音楽堂と共に音楽図書館が必要であることは前から考へてみたことで、音楽堂の設計に當つても、その地下室を図書館に用ひようと心を配つてはみたのである。處で、実際に音楽図書館を設備しようと

---

(10) *Catalogue of the Nanki Musical Library (Books on Music), I*, [Nanki Bunko], 1918.10.

THE MUSICAL DEPARTMENT OF THE NANKI BUNKO 14, Robinson Road, Singapore.				
To insert in this list the names of contributors.				
No. of entry	COMPOSER	OPUS AND TITLE	THE DATE WHEN ORDERED	THE DATE WHEN DELIVERED
1.	Wesley, T. W.	A Selection of English Music from the Library of the Nanki Bunko 1916	1916/12/13	1917/1/13
1.	Chapin, M.	Selections from the Nanki Bunko 1916	1916/12/13	1917/1/13
1.	Wesley, T. W.	The Nanki Bunko Selections 1916	1916/12/13	1917/1/13
1.	Wesley, T. W.	An Introduction to the Nanki Bunko and the Nanki Bunko Selections 1916	1916/12/13	1917/1/13
1.	Wesley, T. W.	The Nanki Bunko Selections 1916	1916/12/13	1917/1/13
1.	Wesley, T. W.	The Nanki Bunko Selections 1916	1916/12/13	1917/1/13
1.	Wesley, T. W.	The Nanki Bunko Selections 1916	1916/12/13	1917/1/13
1.	Wesley, T. W.	The Nanki Bunko Selections 1916	1916/12/13	1917/1/13
1.	Wesley, T. W.	The Nanki Bunko Selections 1916	1916/12/13	1917/1/13
1.	Wesley, T. W.	The Nanki Bunko Selections 1916	1916/12/13	1917/1/13

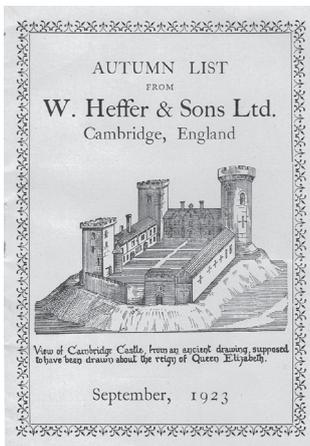
発注リスト (1916年12月から1917  
年末まで残存) の例

このリストはケンブリッジのヘファーズ書店に於て注文を記している

なると、先づ第一に備へるべき圖書の貧困さに思ひ及ばなければならなかつた。残念乍ら、その頃の日本には、音楽上の圖書を蒐集してゐる公の機関は一つもなく、個人の蒐集も甚だ少なかつたのである。随つて、圖書館を設けるには、先づ第一に圖書を蒐集しなければならないことが前提条件であつた。(11)

頼貞自身によるこの記述は、このあとカミングス文庫の入手紹介につながる。一方、南葵楽堂の半地下に設置する図書館の充実をどのようにすすめたのか、その具体的な方法手段は、従来明らかでなかつた。その不明部分に光をあてるのが、南葵文庫音楽部による発注リストである。残存している資料は、1916年末から翌年末までの1年分でしかない。それでも発注内容と発注先の大まかな傾向は看取できる。

- (1) ヘファーズ書店 (ケンブリッジ) 1917年10月13日 図書館学、文献学の文献、図書館の手稿所蔵目録など9点。19世紀初頭に出版された専門性の高い文献やドイツ語の文献も含む。
- (2) チェスター Chester 社 (ロンドン) 1916年12月3日以降 6回 合計33点。シェーンベルク《浄められた夜》など主に新しい室内楽作品。
- (3) ブライトコプフ・ウント・ヘルテル Breitkopf & Härtel 社 (ニューヨーク) 1917年6月2日以降 6回 合計89点 ベートーヴェンのフルスコアとパート譜、R. シュトラウスのフルスコア、ワインガルトナーなどのドイツ音楽。
- (4) デュラン Durand 社 (パリ) 1917年12月25日 計16点 すべてドビュッシーのスコア。
- (5) 共益商社 (東京) 1917年9月20日 4点 シベリウスなど。



南葵文庫に届いていたヘファーズ書店のカタログ

関東大震災が発生した月に発行された号。収蔵図書に挟まれ残されていた

ヘファーズ書店は、ケンブリッジ大学に大陸の学術的書籍を納入し、図書館、研究者や学生に親しまれており、頼貞がルソーの『音楽事典』を購入したと思われる点はすでに述べた。帰国後、音楽以外の、しかし図書館に必要な基本文献はヘファーズ書店に発注している。

注文書を概観して、若干注目すべき点が見いだされる。まず、内容によって発注先は明確に区分けされている。ドイツ音楽は、戦争中のドイツを避けてニューヨークに

(11) 徳川頼貞『菴庭樂話』, p.124

注文している。次に、ベートーヴェンの管弦楽作品等については、スコアとともにパート譜も注文して貰っている。まさに南葵楽堂は建築中であり、楽堂における演奏機会到来を、期待ないし想定していたのであろうか。さらに、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社への注文には、あえて特装版や作曲者自筆稿つきのエディションが含まれている。

### 3. カミングス文庫の到着

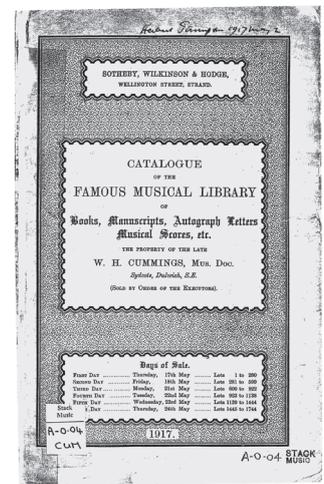
頼貞がケンブリッジを引き払う10日ほど前、1915年6月7日づけの日刊紙ザ・タイムズは、W. H. カミングス博士の死を大きく報じた。頼貞がこの報に接したかは明らかではないが、カミングスの業績は2年間のケンブリッジ留学期間に何度も接したであろうし、その音楽資料コレクションのすばらしさも聞かされていたに違いない。

それからちょうど2年を経て、音楽資料の海外発注を積極的に開始して半年をへた頼貞は、カミングス博士の「有名な音楽ライブラリー」がロンドンで競売に付されるという記事に接する。目の前で建設が進む南葵楽堂。その図書室をカミングス博士のコレクションで満たすことができれば、と考えるのは無理からぬことであろう。

頼貞が競売の記事に接した日付は詳らかではない。「偶々大正六年の夏、倫敦発行の音楽雑誌でカミングス博士の遺した圖書を競賣するという広告を見た。(略)競賣に附された圖書は凡そ三千冊といふことであつた。私は早速倫敦に電報を打つてこの圖書を買ふことを申込んだ」と記してはいるが、これ以上に詳しい経緯は記さず、「私はこの文庫が南葵音楽図書館に備はり、日本の樂壇に多少の役に立つことが出来るやうになつたことを心から喜んだ」と、文章を結んでいる<sup>(12)</sup>。

この競売と頼貞の関わりや入手経緯については、従来根拠のない風説が繰り返されてきた。幸いなことに、南葵音楽文庫関連資料のなかには、その間の顛末を記した資料が残されている。今日までその内容は明らかにされてこなかったが、別項でその全文を紹介しているので、参照ねがいたい<sup>(13)</sup>。

ケンブリッジ時代の師ネイラーの尽力があり、頼貞は454点の資料をカミングスの遺族から入手できた。頼貞のもとに到着してからは、他の音楽資料とは別に扱われ、カミングス文庫の目録と紹介冊子が刊行されている。



*Catalogue of the Famous Musical Library of Books, Manuscripts, Autograph Letters, Musical Scores, etc. The Property of the Late W. H. Cummings, Mus. Doc. Of Sydcote, Dulwich, S. E. (Sold by Order of the Executors) (1917) オークション目録の扉ページ*

(12) 徳川頼貞『蒼庭樂話』, p.125. なお同書の私家版(1941)では、引用文章の冒頭は、「私は箱根宮ノ下にて避暑していた時」となっている。言及している音楽雑誌は、発行から3ヶ月ほど経て頼貞のもとに届いたことがわかる。

(13) 本紀要 p. 88 以下を参照。

爾来、カミングス文庫は今日に至るまで、南葵音楽文庫を代表する蒐集とみなされている。

入手から100年。この間、カミングス文庫もまた歴史の波を受けてきた。その一部分は、今はコレクションから姿を消してもいる。ただ幸いなことに、根幹部分は維持されてきた。詳細を確認するため、早急な調査が欠かせない。その結果は、南葵音楽文庫全体の魅力をよりの確に語ることに通じるであろう。

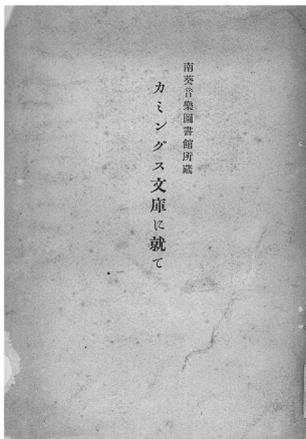
今日、南葵音楽文庫のカミングス文庫に伝えられている図書、楽譜は、旧蔵者である W. H. カミングス自身の、さまざまな側面を反映している。声楽家であり指揮者であった、今も歌われている聖歌の作曲者であった、パーセル協会の会長であった、そのパーセルやヘンデルの研究者であった、そして愛書家でありコレクターであった、そしてヴィクトリア朝の書物文化にも深く結ばれていたカミングス……これらすべてが、南葵音楽文庫のカミングス文庫のなかに、今も息づいている。

ただ頼貞が購入し、南葵音楽文庫に現存する資料をもって、元来のカミングス・コレクションについて語ることはできない。カミングス・コレクション自体その全体がどのような内容、構成、点数であったかは不明である。1917年5月に開催されたオークションのロット数は1744であった。頼貞が入手した点数の約4倍が競売に附されていたわけである。南葵音楽文庫に現存する資料とオークション出品資料との関係も確認する必要があるだろう。

南葵音楽文庫でカミングス文庫の整理にあたったひとりである兼常清佐（1885～1957年）は、『南葵音楽図書館所蔵カミングス文庫に就て』（1926年）の冒頭で、以下のように述べている。

この文庫の意味は、正にそれが一つの博物館であるといふ處に存します。この文庫の價値は、或る博物館の持つ價値であります。この文庫の日本への將來は、要するに私共がこの地にあつては決して見ることの出来ない大英博物館の一部分を、私共に紹介したといふ事であります。それが日本の學界と音樂界に貢獻する處は必ず大なるものであらうと思ひます。(14)

「或る博物館の持つ価値」とその魅力……。この点をさらに深掘りするために、南葵音楽文庫のなかのカミン



『南葵音楽図書館所蔵カミングス文庫に就て』（1926）表紙

(14) 兼常清佐「音樂に関する著書及び器樂の譜について」『南葵音楽図書館所蔵カミングス文庫に就て』南葵音楽図書館，1926，p. 9-10.

グス文庫を、くまなく探訪し、もともとのカミングス・コレクションが何故に famous library と言われたのかを探る旅に出よう。それが南葵音楽文庫の魅力の根源を訪ねることであるから。

**THE MUSICAL DEPARTMENT  
OF THE  
NANKI BUNDO**  
14, Rokuchome Figuramachi, Azabu, Tokyo.

NO. OF COPIES	COMPOSER	OPUS AND TITLE	THE DAY WHICH ORDERED	THE DAY WHICH ARRIVED
Score & 9 Parts.	Jean Sibelius.	The same for mixed voices with accompaniment of wind instrument. S---\$ 1.20 P---\$ 1.80.	Sept 5, '17.	
Parts.	Jean Sibelius.	En Saga. (Emsa Poem). S---\$ 5.00 P---\$10.80.	Sept 5, '17.	Arrived.
Parts.	Jean Sibelius.	Finlandia Symphonic Poem. S---\$ 5.00 P---\$ 6.20.	Sept 5, '17.	Arrived.
Vocal Score.	Weingartner, F.	Genesius. (Oper in 3 aufzugen, in German) Vocal score \$ 10.00	Sept 29, '17.	
Vocal Score.	Weingartner, F.	Malawika. (Eine Komodie in 3 aufzugen, in German.) \$ 5.00	Sept 29, '17.	
Score.	Humperdinck.	Koenigskinder, complete, Opera. Parts. Net \$ 28.00	Dec 18, '17.	Arrived.
Score.	Humperdinck.	Songs of Japan. (with composer's own Autograph.) Net \$ 5.00	Dec 18, '17.	
Score.	Joseph Haydn.	Tagabuch bound in Saffian Leather. Net \$ 7.50	Dec 18, '17.	
Score.	Wagner.	Die Feen, complete Opera. Orchestra score. Net \$ 25.00	Dec 18, '17.	
Score.	Strauss, R.	U. E. 2087a. Strauss studies from symphonie. Vol. 1. \$ 1.50	Dec 18, '17.	Arrived.
Score.	Strauss, R.	U. E. 2087b. Strauss studies from symphonie. Vol. 2. \$ 1.50	Dec 18, '17.	

1917年9月及び12月にニューヨークのブライトコプフ・ウント・ヘルテル社に出した注文のリスト

右端には到着 (arrived) と記載されているものもある。

This edition is the same as the quarto in regard to matter and printed page -  
 but it is enriched by ornamental borders on each page. The magnificent frontispiece,  
 the title page, and folios of dedication also differ. Only a very few copies of the book  
 were issued in this enlarged form, expressly for presentation to Royalty. W.H.B.



カミングスは所蔵した資料に彼の蔵書票を貼り付け、しばしば資料について自らコメントを記載した。これはマルティニ『音楽史』第1巻(フォリオ版)の表紙見返しの記載例である。



チェリストのホルマンは、所有する楽譜、自ら筆写した楽譜や自作に、そのパート譜もふくめ、シルエットをあしらった蔵書票を貼り、丁寧なサインをしている。サン=サーンスのチェロ協奏曲作品 33 はホルマンに献呈された作品である。

## ミュージック・ライブラリーの夢

### 南葵音楽図書館の成立と展開

#### —南葵文庫音楽部の頃—

林 淑 姫

南葵音楽図書館は1925（大正14）年11月、徳川頼貞によって設立されたわが国最初の音楽専門資料館である。一般公開された私立の学術資料館として、出版物ばかりでなく手稿資料の収集、整理にあたる一方、研究部門を置き、その成果を刊行することとした。資料館として考えられる限りの機能を備えた理想的な機関といわねばならない。収書方針、資料整理法、運営システムのいずれも画期的な水準の高さを誇っている。

頼貞はパイプオルガンを備えたわが国最初の本格的音楽ホール「南葵楽堂」の建立と世界的に有名な音楽コレクション「カミングス文庫」の承継者として日本近代音楽史に名を刻んできたが、「カミングス文庫」を擁して設立された「南葵音楽図書館」の図書館自体としての活動について特に言及されては来なかった。頼貞自身の言説にあっても控えめだが、その理由は彼の音楽図書館構想が既存の私立総合図書館——父頼倫が運営していた「南葵文庫」——の活動の上に展開されたことにある。

南葵音楽図書館の前身は「南葵文庫音楽部」であり、図書館としての基礎は理念的にも実践的にもこの頃までに築かれた。「南葵音楽図書館」は南葵文庫庫主徳川頼倫の図書館思想が、子息頼貞によって音楽に特化した機関として発展的に継承されたといってもよいだろう。

南葵音楽図書館の活動を検討するにあたって、先ず南葵文庫とその音楽部について考察する。第1節「徳川頼倫と南葵文庫」、第2節「徳川頼貞の帰朝と南葵文庫音楽部」である。

#### 1. 徳川頼倫と南葵文庫<sup>(1)</sup>

徳川頼倫<sup>よりみち</sup>（1872～1925年）は、田安德川家第8代当主徳川慶頼<sup>よしより</sup>の6男として東京に生れ、7歳で紀州徳川家第14代当主徳川茂承<sup>もちつぐ</sup>の養嗣子として迎えられた。紀州徳川家は明治2年6月17日（1869年7月25日）版籍奉還とともに発せられた行政官達「公卿諸侯ノ稱廢セラレ改テ華族ト稱ス可シ」以来の華族であり、1884（明治17）年7月7日付「華族令」により侯爵を叙爵された。維新後に謳われた「四民平等」の上に立つ「選



徳川頼倫（1872～1925年）

(1)「南葵文庫」の成立、活動の全般については、坪田茉莉子氏の労作『南葵文庫 目学問・耳学問』（東京都教職員互助会，2001.10（4刷2017.2））に詳しい。参照されたい。



ロンドンにて (1896年)  
後列左より 徳川頼倫、鎌田栄吉  
前列 斎藤勇見彦  
鎌田栄吉『歐米漫遊雑記』(博文館、  
明治32)より

ばれた階級」<sup>(2)</sup>としての華族に対して、明治4年10月22日(1871年12月4日)付勅諭は<sup>(3)</sup>、「華族は國民中貴重の地位に居り、衆庶の屬目する所なれば、其履行固り標準となり、一層勤勉の力を致し、率先して之を鼓舞せざるべけんや、其責たるや亦重し」(読点筆者、以下同様)と國民の模範たる自覚を促し、近代社会の担い手としての責任を果たすためには「眼を宇内開化の形勢に著け、有用の業を脩め、或は外國へ留學し、實地の學を講するより要なるはなし」と欧米留學を奨励する。この勅諭は続けて母親としての女子教育の必要性にも言及している。徳川頼倫の活動の軌跡には新しい時代に生きる二代目華族としてこの期待に真摯に応えようとする姿勢が見える。

頼倫は、1896(明治29)年から97年にかけてヨーロッパ旅行に赴いた。目的は英国に於ける修學と各国の視察で、教育係であった鎌田栄吉(1857～1939年。当時衆議院議員、のち慶應義塾塾長)と斎藤勇見彦(のち南葵文庫主幹。1917年没)が随行した。兩人とも和歌山出身である。斎藤勇見彦は外国語学校(現東京外国語大学)でフランス語を修め、陸軍省雇教師として軍楽隊を指導したシャルル・ルルーの秘書兼通訳を務めたという<sup>(4)</sup>。96年3月出航から97年11月帰国に至るおよそ1年半の旅行で欧米各地の図書館や博物館を見学している。彼が見学した図書館や博物館は、随行者鎌田栄吉が記しているだけでもルーヴル美術館、フランス国立図書館、大英博物館および図書館、ライデン国立民族学博物館、アムステルダム国立美術館、モスクワの国立歴史博物館、ワシントンのスミソニアン博物館が挙げられる<sup>(5)</sup>。特に大英博物館図書館には、当時同館東洋部に閲覧のため日参、資料整理の手伝いもしていた南方熊楠(1867～1941年。紀州出身)の案内で訪れ、部長ロバート・ダグラス Sir Robert Kennaway Douglas(1838～1913年)とも会見している<sup>(6)</sup>。

この旅の間に頼倫は南方熊楠の助言もあって<sup>(7)</sup>、図書館の設立を決意したようだ。折々の曝書以外には特段の整理もされぬまま放置されている紀州徳川家伝来の蔵

(2) 小田部雄次『華族 近代日本貴族の虚像と実像』中央公論社、2006.3(中公新書1836)。

(3) 明治大帝徳宣揚會編『明治天皇詔勅集 おほみ心』編者刊、大正9.11, p. 9.

(4) 徳川頼貞『頼貞隨想』徳川頼貞遺稿刊行會編 河出書房、昭和31.6, p. 41.

(5) 鎌田栄吉『歐米漫遊雑記』博文館、明治32.6.

(6) 南方熊楠「日記(1897年5月26日付)」『南方熊楠全集別巻2』平凡社、1975.8.

(7) 南方熊楠「書簡 土宜法龍宛(明治35年5月3日付)」『高山寺藏南方熊楠書翰』奥山直司、雲藤等、神田英昭編 藤原書店、2010.3, p. 301.

書も脳裡をよぎったに違いない。しばしば図書館構想について鎌田や斎藤に語ったという<sup>(8)</sup>。帰国直後から斎藤らに命じて書物の整理に当らせるとともに自邸（麻布区飯倉6丁目14）の一角に建物の建築を開始したのは1898（明治31）年12月のことであった。煉瓦造りの書庫を併設した建物は翌99年12月に落成、旧藩地南海道紀伊国（南紀）に家紋の葵を合して「南葵文庫」と命名された。書物の整理を進めて開庫式が挙行されたのは1902（明治35）年のことで、当初閲覧は家職の子弟および特に希望する者に限られていた。その後一般公開のために新館および書庫の増築が検討され、起工されたのが1905（明治38）年5月、日露戦争の最中であったことや父茂承の死（1906年8月20日）などの難事を乗り越えて落成したのは1908（明治41）年10月のことである。増設された建物には70坪（約231㎡）の閲覧室が設けられていた。文部大臣宛「私立図書館公開開申書」（同年10月10日付）の提出を経て<sup>(9)</sup>、翌月11月3日より一般公開が開始された<sup>(10)</sup>。因みに、この時頼倫33歳、長男頼貞は学習院在学中の15歳である。

一般に公開された私立図書館「南葵文庫」は庫主徳川頼倫、主幹斎藤勇見彦のもとで運営された。公開時の蔵書は徳川家蔵書2万冊に、その後に購入あるいは寄贈寄託を受けた資料を加えて約7万冊を数えた。いうまでもなく主体は和漢籍であり、洋書はおよそ5000冊と主幹斎藤は報告している<sup>(11)</sup>。

これらの資料の整理にあたり、目録はカード記入とし、分類は展開分類法 Expansive Classification に範をとった。展開分類法はチャールズ・カッター Charles Ammi Cutter (1837～1903年) によって考案された図書分類法で当時アメリカの公共図書館の多くが採用していた。主題をA（総記）からZ（図書学）に分類列記するが、図書館の規模にあわせて運用できる点が利点である。南葵文庫は分類法について「図書館の性質、蔵書の種類、書庫の形式、掌書の能力等に従ひ、それぞれ適当なる方法を選はざるへからず、要は搜索並整頓の便に着目、又書籍累加に伴ふ障碍に配慮するを肝要とする」と明快に述べ、カッター分類採用の理由を「最も常識に



南葵文庫

『図書館雑誌』61号（日本図書館協会、大正13.9）より



『南葵文庫概要』第2版

南葵文庫、大正2.9

国立国会図書館蔵

(8) 「南葵文庫」『図書館雑誌』61号（日本図書館協会、大正14.9.1）、p. 290.

(9) 注1参照。

(10) 『南葵文庫蔵書目録』南葵文庫、明治41.10.

(11) 斎藤勇見彦「麻布飯倉徳川家南葵文庫」『図書館雑誌』1号（日本文庫協会、明治40.10.17）、p. 28-30.

副ひ、明瞭にして且つ適用し易く、略ほ理論の整一を保ち得へければなり」とした。但し、この分類法は和漢籍に適用するには極めて不便であることから「調定を施した<sup>(12)</sup>。和漢籍に不便な点とはいうまでもなく主題項目の設定である。主題に関しては明言されていないが、帝国図書館（1897年4月創立）が採用していた八門分類が参考にされたようだ。八門分類は主題を以下の8類に分類する。

第一門（神書、宗教）、第二門（哲学、教育）、第三門（文学、語学）、第四門（歴史、伝記、地理、紀行）、第五門（国家、法律、経済、財政、社会、統計）、第六門（数学、理学、医学）、第七門（工学、兵事、美術、諸芸、産業）、第八門（類書、叢書、随筆、雑書、雑誌、新聞紙）。

南葵文庫分類法はこの8類を簡略化して5類とし、第八門「総記」をカッター分類に添って最初に配置したものである。洋書分類は別に定められており、記号をA～Gとした7類である。総記はFに位置し、Gを図書館関係書、目録類とした。

主分類	細目	八門分類との比較
総記	図書、彙類、叢書、雑書、統計報告	第八門
哲学	神道、宗教、倫理、教育	第一門＋第二門
技術	美術技芸、文学、実業、兵術、政治、経済、家政	第三門＋第五門＋第七門
記事	万国史並外国史、万国地理並外国地理	第四門
科学	数学、理化学、天文並地文学、生物学、医学	第六門

表1 南葵文庫分類表（和漢籍）<sup>(13)</sup>

A Philosophy	AI Philosophy, Logic and Education. AII Religion. AIII Ethic.
B Art	BI Fine Arts, Music and Sports. BII Literature
C Sociology	CI Law. CII Politics. CIII Economics. CIV Sociology. CV Home-Economics.
D History and Geography	DI History. DII Biography. DIII Geography. DIV Souvenir.
E Science	EI Science. EII Navy and Army.
F Miscellaneous	FI Series. FII Dictionary. FIII Year-Book. FIV Periodicals.
G Library Works	GI Library Works. GII Catalogue

表2 南葵文庫分類表（洋書）<sup>(14)</sup>

公開時の建物は煉瓦造りの書庫2棟と、いずれも2階建ての旧館（別館）および閲覧室を含む新館（本館）があり、その間に双方に通じる事務棟が建てられていた。

(12) 『南葵文庫概要』2版 南葵文庫, 大正2.9, p. 14.

(13) 注10参照。

(14) *Catalogue of the Nanki Bunko*. 南葵文庫, 1914.3.

旧館には庫主室、会議室があり、本館には1階に受付、一般閲覧室、新聞雑誌閲覧室および目録室、食堂など、2階に婦人閲覧室および婦人食堂、特別閲覧室、調査室を設けた。稀覯書を収める第1書庫にはガラス戸付檜製書棚30台、薬剤燻蒸装置を置き、第2書庫には櫟製書架48台を設置、書籍運搬用リフトが備え付けられ、どちらにも防火扉が設置されていた。

この庫主室で頼倫は陣頭指揮を執り事務の掌握に努めている。南葵文庫は資料の収集・整理・閲覧の一般図書館業務以外に、年2回の定期講演会や読書会、児童のための展示会や講話会なども開催、毎年11月3日前後には利用者との懇談の場も設けている。婦人閲覧室を設置したことも併せ、社会教育機関としての図書館の役割を最大限に実現しようとしていたといえるであろう。

南葵文庫の出現は当時の図書館界に大きな励ましと刺戟を与えたようだ。頼倫は1913(大正2)年6月に日本図書館協会初代総裁に就任、その直後の全国図書館大会で基調講演を行なった<sup>(15)</sup>。講演は大会が大阪を会場としたことから、先ず当地の歴代の文化人を紹介、特に江戸中期の文人で蔵書家としても知られた木村兼葎堂(1736～1802年)に言及し、彼がこの時代に生きていたら必ずや図書館あるいは博物館を拵えていただろうと述べ、それとの関連で①図書館と同様「実際に品物を観察することのできる」博物館の設立を提唱、そして、②社会教育機関としての図書館は学校教育と同様に重要である、③図書館はまた、それぞれの地域の理解を推進するために郷土資料を収集するべきである、④図書館関係者は人と社会との関係をもよく理解して事業を進めなければならない、⑤図書館員は重要な存在でありその養成に努めなければならない、と次々に論を進める。「人間一生にかかわる図書館事業は實に愉快なる事業」で結ばれたこの講演は頼倫の見識をよく示している。全国規模における博物館設立の提唱、郷土資料収集のすすめ、図書館員の育成など彼の先見性を語って余りある。

頼倫は南方熊楠によれば「甚だ好き人物で、いかにも度量寛弘、気宇闊達の所ろ」があり<sup>(16)</sup>、その研究熱心で誠実な人柄は人望を集めたようだ。1911(明治44)年、彼は和歌山県出身者への奨学金制度「南葵育英会」および「史跡名勝天然紀念物保存協会」も創設している。

(15) 徳川頼倫「第八回大會席上に於る總裁の演説」『圖書館雜誌』19号「大阪大會號」(日本図書館協会,大正3.1.25),p.153-161.

(16) 南方熊楠「書簡 松村任三郎宛(明治44年8月29日付)」『原本翻刻南方二書』南方熊楠顕彰会学術部編 南方熊楠顕彰会,2006.5,p.17.

南葵文庫の開館日は週6日。休館日は祝祭日、夏期2週間、年末年始9日、毎月の清掃日2日、創立記念日5月20日。開館時間は午前8時（冬期は午前9時）～午後5時。利用者には閲覧券を発行、初回閲覧者は紹介状を要した。館外貸出は不可。閲覧料は無料である。

## 2. 徳川頼貞の帰朝と南葵文庫音楽部

南葵文庫蔵書のうち、音楽（美術技芸）に分類されるものは主として雅楽、神楽、笙譜、箏曲譜、謡曲などの江戸期以前の刊本、写本であり、明治期刊本もほぼその範囲である。洋楽関係資料としては洋書1点、楽譜2点にとどまっていた<sup>(17)</sup>。頼貞の留学後、西洋音楽関係書籍、楽譜が一気に広がることになる。

徳川頼貞（1892～1954年）は、幼少時から音楽に関心を寄せ、父頼倫がヨーロッパから持帰った蝋管レコード「カルメン」や、祖父茂承が自邸での園遊会に招いた軍楽隊の演奏に強く惹かれたと回想している<sup>(18)</sup>。10代になると英語学習とともにピアノやヴィオリンのレッスンを始めた。学業に熱心ではなかったようだが、学習院時代に田村寛貞（1883～1934年。のち東京音楽学校教授）や二條厚基（1883～1927年）らとともに「音楽奨励会」を結成（1910年9月）、演奏会を度々主催している<sup>(19)</sup>。

留学のため英国に旅立ったのは1913（大正2）年9月2日のことで、旅には教育係の上田貞次郎（1879～1940年。東京高等商業学校教授、のち一橋大学学長）と1年間の予定で各地の図書館視察を命ぜられた文庫掌書長（主任司書）橋井清五郎が同行した。上田貞次郎は和歌山出身。このとき2度目の訪欧で、最初の留学時に徳川家の援助を受け、帰国後南葵文庫で洋書目録のアルバイトをしたこともある<sup>(20)</sup>。頼貞はケンブリッジでセルウィン・カレッジ Selwyn College の学長であった英国国教会司祭ジョン・マレー John Owen Farquhar Murray（1858～1944年）宅に寄寓、音楽学の勉強を始めた。オルガニストで作曲家のエドワード・ネイラー Edward Woodall Naylor（1867～1934年）にピアノと和声学を、チャールズ・ウッ



ロンドンにて（1913年）  
前列左より 鎌田竹夫（鎌田栄吉長男）、徳川頼貞、鎌田栄吉、小泉信三  
後列左より 橋井清五郎、上田貞次郎、  
山東誠三郎  
『上田貞次郎日記 明治三十八年—  
大正七年』（上田貞次郎日記刊行会、  
1964）より

(17) 注14参照。楽譜2点は頼倫外遊中にシャルル・ルルーから贈られたもの。本紀要 p. 82-83 参照。

(18) 徳川頼貞『薈庭樂話』徳川頼貞刊, 昭和16.11, p. 6-8.

(19) 徳川頼貞『薈庭樂話』春陽堂, 昭和18.3, p. 14-19 および「音楽奨励会の設立」『白樺』1巻6号（明治43.9）, p. 46.

(20) 上田貞次郎『上田貞次郎日記 明治三十八年—大正七年』上田貞次郎日記刊行会, 昭和39.4, p. 30, 407.

ド Charles Wood (1866 ~ 1926 年) に対位法とフーガ、ケンブリッジ大学音楽協会指揮者シリル・ルーサム Cyril Rootham (1875 ~ 1938 年) に管弦楽法、楽曲形式論、分析、作曲家のチャールズ・スタンフォード Sir Charles Villiers Stanford (1852 ~ 1924 年) に作曲法を、音楽史をエドワード・デント Edward Joseph Dent (1876 ~ 1957 年)、音響学をジョン・キャプスティック John Walton Capstick (1858 ~ 没年不明) に学んだ。ケンブリッジ大学の錚々たる教授陣から音楽学全般にわたる講義を受けたことになる。こうした環境にあって頼貞は一時、ケンブリッジ大学に正規に入学することを志し、勤務校の都合で帰国した上田に代わって教育係を務めていた小泉信三 (1888 ~ 1966 年。のち慶應義塾塾長) に相談したこともあったが、結局断念したという<sup>(21)</sup>。留学中にパイプオルガンを備えた音楽ホールの建設を計画、設計を建築家アルフレッド・ブルムウェル・トーマス Sir Alfred Brumwell Thomas (1868 ~ 1948 年)、オルガンをアボット & スミス Abbott and Smith 社に依頼したことはよく知られている。音楽ホールの構想には図書室 (展示室) の併設も含まれていた。

頼貞は 1915 (大正 4) 年 12 月に 2 年間の留学を終えて帰国した。帰国後早々にヨーロッパで買い求めた資料を基礎に国内外の刊行物収集に努め、整理を開始した。音楽資料の整理が進められていた大正 6 (1917) 年春、頼貞は英国の音楽雑誌に掲載された「カミングス・コレクション」の競売広告に目をとめた。パーセルやヘンデルの研究でも知られた音楽家カミングス William H. Cummings (1831 ~ 1915 年) のコレクションは夙に有名で、そのオークションは話題となっていた。頼貞は師ネイラーを通じて早速参加を申し入れた。競売初日 (5 月 11 日) に間に合わなかったものの、8 月になってネイラーより遺族の手許に残っている資料に関する情報がもたらされ、改めて購入の手続きをとった。これが南葵音楽図書館蔵書の中核となった「カミングス文庫」入手の経緯である。この間の経緯については、最近発掘された文書「カミング音楽文庫競賣残餘図書購入顛末」に詳しい。本紀要「資料紹介」(p. 89-91) に掲載した。参照されたい。

西洋音楽資料の目録法は楽譜、楽書ともすべて洋書の目録法に準拠し、著者 (作曲者) 標目基本記入である。分類は文庫の洋書分類表に項目 M (Music) を新



マレー博士と。ケンブリッジにて (1914 年)

前列中央: J.O.F.Murray, 右: 上田貞次郎, 後列: 徳川頼貞

『上田貞次郎日記 明治三十八年—大正七年』(上田貞次郎日記刊行会、1964) より

(21) 前掲書, p. 448, 489.



7) 年に南葵文庫附属大礼記念館（南葵楽堂）<sup>(23)</sup>が落成すると、計画通り楽堂の半地下の一室に移され、整理もそこで行われた。担当者は在職4年目の掌書喜多村進（1888～1958年）である。当時の細かな事情や様子は長く不明であったが、喜多村が書き残した原稿「徳川頼貞侯の横顔」にその頃のことを鮮やかに描写されている。証言として実に得難く興味深い。長くなるが一部引用する<sup>(24)</sup>。

頼貞侯は音楽堂に於て演奏会を開くと共に、一方音楽書並に楽譜の蒐集収蔵を図り、之を閲覧せしめて共に音楽文化向上を図るべき、南葵文庫の一事業とされた。依て頼貞侯の所蔵の以上の図書は全部音楽堂半地下室の書庫に納めることになり、私は選ばれて専らその整理並に閲覧の事務を司ることになった。（略）

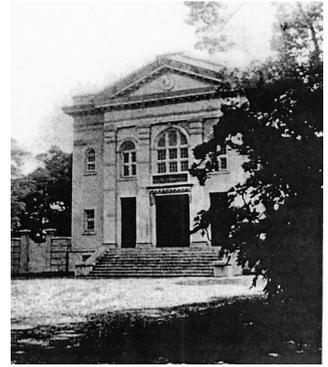
小砂利を踏んで、花崗岩の石段を五六、軽く上ると正面に一枚ガラスの大扉がある。私は鍵穴に鍵をさしこみ、ことごと鍵を外す。ぎいっと扉を開けて、中に吸ひ込まれてゆく。勿論人気はなく、歩む足音が森閑とした空気の中にひびく。私は玄関から左手の方、地下室へ通ずる階段を下りる。事務を執る部屋は段を下りた左手にあつた。（略）  
地下室内の書庫。それは一面閲覧室にもなる設備をしてあつた。書架は三方の壁に取りつけられ、所謂公開式により金網の扉がそれぞれに着けてあつた。（略）

#### （第6章「音楽堂地下室の某日」）

1918（大正7）年10月の楽堂開館後、演奏会、講演会などの行事が増大したこともあり、文庫の組織が改編された。従来特に分掌されていなかった事務を1. 閲覧事務、2. 講演音楽演奏等に関する事務、3. 調査参考部に属する事務、の3課に分けるとともに、「音楽」に関して3課を横断して監督する音楽部（Music Section）を設けた<sup>(25)</sup>。1920（大正9）年8月、楽譜、

(23) 通称「南葵楽堂」は大正天皇の即位を記念して「南葵文庫附属大礼記念館」と命名された。音楽ホールと講堂を兼ねており、欧文名称は“Nanki Auditorium”。

(24) 喜多村進の手記「徳川頼貞侯の横顔」は、南葵音楽図書館の閉鎖が決定し、その準備が進められていた頃に執筆された。14章からなる回想記で400字詰原稿用紙203枚、ペン書。序文に「昭和七年二月」の日付がある。和歌山県立博物館「喜多村進資料」資料番号133。喜多村進については岡本和宜「喜多村進の初期文芸活動」、須山高明「喜多村進考」『和歌山県立博物館紀要』11号（2005.3）参照。

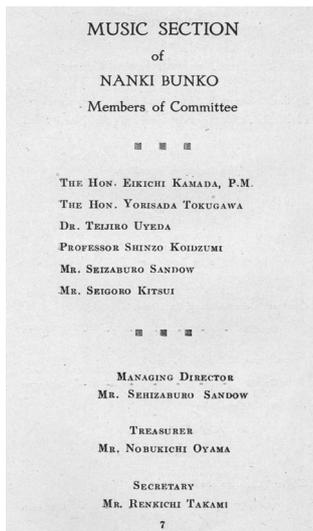


南葵楽堂



喜多村進（1888-1958）

和歌山県出身。1912年青山学院高等科を卒業。同学院図書室勤務を経て、14年南葵文庫に就職。24年に南葵文庫が蔵書を東京帝大に寄贈、閉鎖したあとも、引き続き東京帝大司書として旧南葵文庫蔵書の管理に携わった。28年より南葵音楽図書館掌書長に迎えられたが、32年同館閉鎖により退職。翌年より和歌山県立図書館に勤務、戦後も同館司書として在職し、郷里の文化活動にも尽力した。田山花袋、島崎藤村に師事した小説家でもあり、作品に『靄』（ロゴス社、1922）、『青磁色の春』（福永書店、1927）がある。写真は『青磁色の春』出版記念会の折に撮影。和歌山県立博物館「喜多村進資料」資料番号399。



南葵文庫音楽部役員一覧  
公益財団法人読売日本交響楽団蔵

音楽書の整理を終了し、所蔵目録各第2編を同時に刊行したあと、10月2日から音楽資料の閲覧も他と同様文庫本館閲覧室で行われるようになった。喜多村進は「之れ蓋し、現南葵音楽図書館の権輿である。」という（上記原稿第8章）。蔵書は楽譜およそ1200点、音楽書500点を数えた。9月にはベートーヴェン生誕150年記念企画の一環として、音楽部編纂によるベートーヴェン書誌 *Works of Beethoven (Beethoveniana)* が刊行され、12月11日に「ベートーヴェン・フェスティバル」が開催された<sup>(26)</sup>。前月11月22日および23、24日には、注文から6年を経て漸く到着したパイプオルガンの設置工事が苦勞の末に完了、披露演奏会が大々的に催されている（中田章、エドワード・ガントレット Edward Gauntlett によりオルガン披露演奏）。待望のカミングス文庫454点も既に到着し、本格的な整理の開始を待っている。南葵文庫音楽部はこのまま順調な歩みを進めて行くものと誰もが思っていたに違いない。

(25) 当初“Music Department”という名称が用いられていた痕跡もあるが、正式には“Music Section”と定められた。1919年12月14日の演奏会プログラムとともに保存されていた印刷文書 Music Section of Nanki Bunko. Members of Committee がある（図版参照）。

(26) *Works of Beethoven* はベートーヴェンの作品表（英文）と文献を収める。“Nanki Beethoven Festival”の演奏曲目は《エグモント序曲》《交響曲第3番》《ピアノ協奏曲第3番ハ短調》など。演奏は長坂好子独唱、小倉末ピアノ独奏、クローン Gustav Kron 指揮、東京音楽学校、海軍軍楽隊による。

## 南葵音楽図書館の出版活動

篠田大基

一般に公開された日本で初めての音楽専門資料館であった南葵音楽図書館は、所蔵資料や設備の充実、併設された南葵楽堂における演奏会の開催のみならず、研究・出版活動にも力を入れていた。この小論では、南葵音楽図書館がその前身の南葵文庫音楽部として活動を開始した1917（大正6）年から閉鎖される1932（昭和7）年までの16年間の出版活動史を、1. 1917～1923（大正6～12）年、2. 1924～1932（大正13～昭和7）年の2期に区分して概観し、その出版物のドキュメンテーションを行う。なお、本論中で書名の後に付す「資料番号」は、後掲の「南葵音楽図書館出版物目録」の番号を指す。

### 1. 1917～1923（大正6～12）年

南葵音楽図書館は当初、徳川頼貞の父頼倫が設立した南葵文庫の「音楽部（Music Section）」として活動していた。その時期を南葵音楽図書館の出版活動の第1期とする。すなわちカミングス文庫の購入から関東大震災による南葵文庫閉館までである。この時期の出版物の発行所名には「南葵文庫／Nanki Bunko」ないし「南葵文庫音楽部」<sup>(1)</sup>が使われているが、奥付のない出版物も多い。

南葵音楽図書館の前身である南葵文庫音楽部の出版活動は、蔵書目録の編纂に始まる。最初に出版された音楽関連文献目録 *Catalogue of the Nanki Musical Library* は、楽譜編（資料番号3）と音楽書編（資料番号4）の2巻からなり、楽譜編の序文には1917年10月、音楽書編の序文には1918年5月の日付が記されている。楽譜編に関しては第1版編纂の過程で作成されたと考えられるタイプ稿 *Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Notes), Second Edition* が現在、東京大学総合図書館に所蔵されている<sup>(2)</sup>。この資料には1917年5月という日付が記されており、楽譜目録の編纂作業がカミングス文庫の購入とほぼ同時期に開始されていたことが分かる。上記の楽譜と音

(1) 南葵文庫音楽部の英語名である Nanki Music Section に関しては、これを編者名として使った出版物は確認されるが、発行者名として使った書物は確認されていない。

(2) *Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Notes), Second Edition*, 1917.5, 東京大学総合図書館蔵 018.1:O41.

楽書の2編の目録は、公開に向けた蔵書整理が完了した1920年8月に改訂され、南葵文庫音楽部は同年10月2日から閲覧業務を開始した<sup>(3)</sup>。蔵書目録の改訂を終えた南葵文庫音楽部は、間をおかずに、南葵楽堂に会場するコンサート客や一般の音楽愛好家に向けた冊子の制作・出版に取り掛かっている。同年9月にはベートーヴェン関連の所蔵資料などをまとめた *Works of Beethoven (Beethoveniana)* (資料番号5) が作られ、また1923年には、西洋音楽に対する深い理解を促す目的で、音楽入門的な内容の『南葵音楽叢書』3巻(資料番号6～8)が発刊された。これらの冊子は、南葵音楽図書館が活動の初期から、日本における西洋音楽の普及というミッションに対して積極的に取り組んでいたことの証左と言える。しかしこれらの出版物が、南葵文庫の事業報告書『南葵文庫報告』(資料番号1)や、施設紹介『南葵文庫概要』(資料番号2)に記載されることはなかった。南葵文庫の事業全体のなかでは、音楽研究や音楽書の出版活動の占める比重は軽かったのかもしれない。これらの活動が重視され、出版物が充実してゆくのは次の第2期である。

## 2. 1924～1932 (大正13～昭和7)年

第2期は、南葵文庫が閉鎖されて南葵音楽図書館が専門図書館として独立した時期にあたる。すなわち関東大震災後の南葵音楽事業部の発足から徳川家の財政難による閉鎖までである。この時期の出版物の発行者名には「南葵音楽図書館／Nanki Music Library」が使われている。

この第2期において、南葵音楽図書館は研究・出版活動を事業の中核に据えたと考えられる。1925(大正14)年に制定された「南葵音楽事業部規則」においては、事業目的を記した第2条の第1項に「音楽ニ關スル研究、調査著作等ヲ助成シ、斯道ノ普及發達ヲ奨励スルコト」、第2項に「専門家ニ委嘱シテ特殊ノ研究、調査ヲ爲シ又ハ有益ナル文献ヲ出版スルコト」と謳われている。これらの2項が音楽会・講演会の開催(第3項)や音楽資料の収集・公開(第4項)よりも先に掲げられた点は興味深い<sup>(4)</sup>。実際、第2期には多くの研究書が出版されている。それらは兼常清佐、辻莊一、遠藤宏など、南葵音楽事業部の評議員を務め、当時第一線で活躍していた音楽学者たちの業績であった。なかでも、辻莊一編『ヘンデル グロリア パトリ 總譜表』(資料番号13)は、

---

(3) 『南葵文庫報告』第12 南葵文庫, 大正9.10, p. 5-6 参照。

(4) 『南葵音楽事業部摘要』第1 南葵音楽図書館, 昭和4.4, p. 3.

校訂報告を伴う出版楽譜としては本邦最初期のもののひとつであり、現在消失してしまったこの曲の筆写譜の内容を知る唯一の資料として特に注目される。また紀州徳川家伝来の楽器や楽譜資料を活用し、宮内省雅楽課の協力を得て制作された『日本音楽集成』（資料番号 17）も意義深い研究と言えよう。蔵書目録の中で特筆すべきは、兼常・辻両名の編纂によるカミングス文庫の目録 *Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library*（資料番号 10）、およびその解題『南葵音楽図書館所蔵カミングス文庫に就て』（資料番号 11）であり、戦中戦後の混乱のなかで一部散逸してしまったカミングス文庫の本来の姿を知ることができる重要資料である。他方、ホルマン文庫、フリートレンダー文庫、小山作之助文庫（現存せず）といった他の貴重資料コレクションの目録は、現在に至るまで作成されておらず、その全容を把握することは困難な状況である。

南葵音楽図書館は 1932（昭和 7）年に閉館した後も、1945（昭和 20）年まで慶應義塾大学において蔵書の公開を続けていたが、この時期に出版活動は行われていない。短い活動期間のなかで、南葵音楽図書館は多くの出版物を世に送り出してきた。しかし、発行者自身の手で編まれた出版物の書誌は『南葵音楽事業部摘要』第 1（資料番号 14）所収の業績表のみであり、それすらも 1923（大正 12）年から 1929（昭和 4）年までの出版物に限定されたリストである<sup>(5)</sup>。また同書によると、出版が計画されながら実現に至らなかった研究も少なくなかった<sup>(6)</sup>。後掲の「南葵音楽図書館出版物目録」には、南葵音楽図書館およびその前身の南葵文庫音楽部による出版物を採録し、同時に未出版の文献についてもまとめた。本稿が、近代日本における洋楽受容に重要な役割を果たしたこの図書館の活動を理解するための一助となることを願う。

---

(5) 前掲書, p. 36-40.

(6) 前掲書, p. 38-39 参照。

## 南葵音楽図書館出版物目録

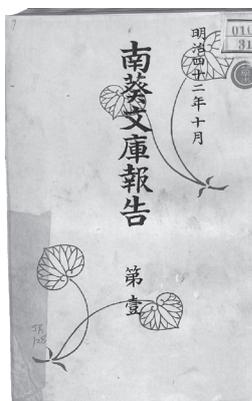
### 凡例

- 採録対象は南葵音楽図書館発行の文献とし、1917（大正6）年から1923（大正12）年までについては南葵音楽図書館の前身にあたる南葵文庫の出版物のうちで音楽部に関わると判断した文献を収録した。演奏会プログラム等のエフェメラ、図書館員の作業用ないし館内閲覧用と考えられる資料は除外した。またII. 未出版文献として、出版が計画されたものの実現に至らなかった文献をまとめた。
- 各出版物は発行年月日順に排列した。
- 書名・叢書注記は可能なかぎり原文どおりの字体とし、編著者名・出版事項については新字体に統一した。
- 本目録をまとめるにあたり、以下の文献を参考にした。
  - ◎『南葵音楽事業部摘要』第1 南葵音楽図書館，昭和4.
  - ◎兼常清佐，辻莊一『催馬樂』（『日本音楽集成』第1編 雅楽 第1輯）南葵音楽図書館，昭和5.
  - ◎遠藤宏「南葵文庫」音楽史話『音楽』3巻5号（アポロ出版，昭和23.6），p. 31-37, 45.
  - ◎有田芳子，後藤多恵子「南葵音楽文庫」（Document Series 1）『塔』18号（1978.6），p. 2-76.
  - ◎正木光江「南葵音楽図書館の成立過程」音楽図書館協議会編『音楽情報と図書館』大空社，1995.6，p. 145-160.

### I. 出版物

#### 1. 『南葵文庫報告』全15 南葵文庫 22cm 非売品

- |     |                   |      |
|-----|-------------------|------|
| 第1  | 奥付なし〔1909（明治42）年〕 | 39p. |
| 第2  | 奥付なし〔1910（明治43）年〕 | 48p. |
| 第3  | 1911（明治44）年11月3日  | 50p. |
| 第4  | 奥付なし〔1912（大正元）年〕  | 66p. |
| 第5  | 1913（大正2）年10月15日  | 37p. |
| 第6  | 1914（大正3）年10月25日  | 36p. |
| 第7  | 1915（大正4）年10月31日  | 37p. |
| 第8  | 1916（大正5）年10月10日  | 38p. |
| 第9  | 1917（大正6）年10月10日  | 35p. |
| 第10 | 1918（大正7）年12月14日  | 32p. |
| 第11 | 1919（大正8）年11月7日   | 78p. |



『南葵文庫報告』第1  
和歌山県立図書館蔵

- 第12 1920 (大正9)年11月8日 47p.
- 第13 1921 (大正10)年10月3日 37p.
- 第14 1922 (大正11)年10月3日 35p.
- 第15 1923 (大正12)年12月29日 2,30p.

関東大震災による閉館までの南葵文庫の蔵書数と閲覧状況、および款話会、演奏会などの活動報告。第10に大札記念館(南葵楽堂)落成およびカミングス文庫購入の記事がある。1918(大正7)年に南葵文庫の事務は第1部(書籍保存整理閲覧)、第2部(音楽・講演)、第3部(調査参考)に分掌され、これに伴い第11からは「第二部報告」欄が設けられ、音楽会や講演会の内容が報告された。音楽書に関しては第11、12では「第一部報告」に記されているが、第13以降は「第二部報告」に移されている。

## 2. 『南葵文庫概要』 南葵文庫 22cm 非売品

- 第1版 奥付なし〔1908(明治41)年〕19p.
- 第2版 1913(大正2)年9月17日 24p.
- 第3版 1920(大正9)年11月12日 34p.  
(第3版の復刻:『増訂 南葵文庫蔵書目録』1巻(『国書目録叢書』21) 大空社, 1998.5, p. 1-48)

南葵文庫の施設紹介。第1版は「沿革概要」「蔵書概要」「建築概要」の3章で構成され、第2版からは利用者向けに、おもに蔵書に関する部分を拡充して「目録」「挿架」「閲覧」「閲覧人との連絡」「紀念會講話會其他」「文庫員」「文庫規則」の章が加えられた。第3版では大札記念館(南葵楽堂)についても記載されている。

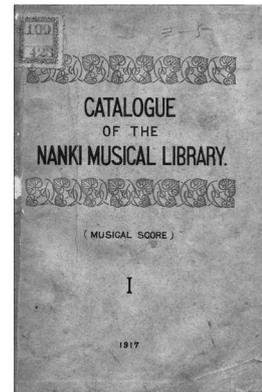


『南葵文庫概要』第1版  
和歌山県立図書館蔵

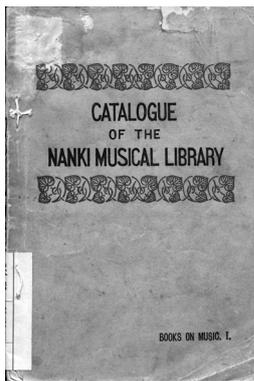
## 3. *Catalogue of the Nanki Music Library (Musical Scores)* [Nanki Bunko] 18cm

- 第1版 奥付なし〔1917(大正6)年10月〕36p.
- 第2版 奥付なし〔1920(大正9)年8月〕iii, 104p.

徳川頼貞が主としてヨーロッパ滞在中(1914~1915年)に収集した楽譜の目録。第1版では書名は *Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Score)* (扉には *Composer Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Score)* と記載)。



*Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Scores)* 第1版  
国立国会図書館蔵

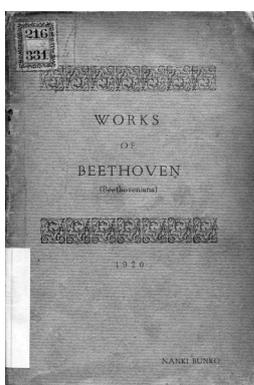


Catalogue of the Nanki Musical Library (Books on Music) 第1版  
国立国会図書館蔵

4. *Catalogue of the Nanki Music Library (Books on Music)* [Nanki Bunko] 18cm

第1版 奥付なし〔1918（大正7）年5月〕38p.  
第2版 奥付なし〔1920（大正9）年8月〕ii, 69p.

徳川頼貞が主としてヨーロッパ滞在中（1914-1915年）に収集した音楽書の目録。第1版では書名は *Catalogue of the Nanki Musical Library (Books on Music)* (扉記載の書名も同じ)。



Works of Beethoven (Beethoveniana) 国立国会図書館蔵

5. Nanki Music Section 編 *Works of Beethoven (Beethoveniana)* 奥付なし [Nanki Bunko 1920 (大正9) 年9月] 36p. 20cm

南葵文庫所蔵のベートーヴェン関連文献100点のリスト、ベートーヴェンの肖像画リスト、作品リスト、ピアノ・ソナタの難易度表から成る小冊子。南葵楽堂で開催された「ベートーヴェン百五十年記念音楽会」(1920（大正9）年12月11日)において配布。

6. Schneider, Hans 『音楽の感得』 門馬直衛訳 (喜多村進編『南葵音楽叢書』I) 南葵文庫音楽部 岩波書店発売 1923 (大正12) 年9月1日 / 1923 (大正12) 年12月20日 2, 3, 29p. 19cm 25銭

原著: "The Enjoyment of Music". *Musical Quarterly*, vol. 7, no. 1 (1921), p. 218-225.

西洋音楽への深い理解を促そうとして発刊されたシリーズ。3巻(資料番号6~8)が刊行され、いずれも1923(大正12)年9月1日発行本と同年12月20日発行本(第2刷? 奥付の発行日以外は9月1日発行本と同一)とがある。3巻とも音楽入門的な内容の英語雑誌記事の翻訳であるが、3巻共通で記載された「はしがき」によると、この叢書では翻訳のみならずオリジナルの論文の刊行も構想されていた。しかし3巻の後には続かなかった。



『音楽の感得』(『南葵音楽叢書』I)  
和歌山県立図書館蔵

7. Praeger, Ferdinand Christian 『音楽形式論』 門馬直衛訳 (喜多村進編『南葵音楽叢書』II) 南葵文庫音楽部 岩波書店発売 1923 (大正12) 年9月1日 / 1923 (大正12) 年12月20日 2, 2, 29p. 19cm 25銭

原著: "Form". *Proceedings of the Musical Association*, 10th Sess. (1883-84), p. 57-72.



『音楽形式論』(『南葵音楽叢書』II)  
和歌山県立図書館蔵

8. Stanford, Charles Villiers 『作曲の最近傾向を論ず』  
門馬直衛訳 (喜多村進編 『南葵音楽叢書』 III) 南葵文  
庫音楽部 岩波書店発売 1923 (大正 12) 年 9 月 1  
日 / 1923 (大正 12) 年 12 月 20 日 2, 2, 43p. 19cm  
35 銭

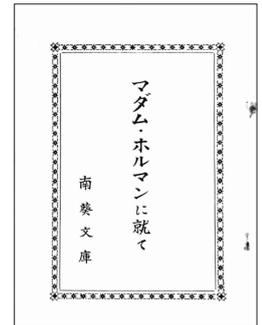
原著: "On Some Recent Tendencies in  
Composition". *Proceedings of the Musical  
Association*, 47th Sess. (1920-1921), p. 39-53.



『作曲の最近傾向を論ず』(『南葵音楽叢書』 III) 和歌山県立図書館蔵

9. 『マダム・ホルマンに就て』 奥付なし〔南葵文庫音  
楽部 1923 (大正 12) 年〕 11p. 15cm

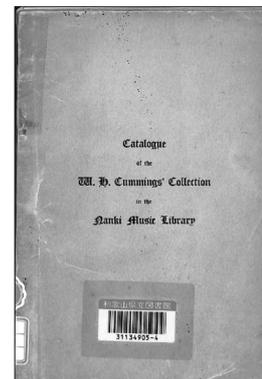
1923 (大正 12) 年に徳川頼貞の招聘で来日したチェ  
リスト、ヨゼフ・ホルマンが愛用したチェロ「マダム・  
ホルマン」の紹介。「マダム・ホルマン」が久邇宮朝  
融王に献上された際に作成された。徳川頼貞『菴庭樂  
話』私家版 (昭和 16 (1941).11), p. 265-269 に  
再録。同書普及版 (春陽堂書店, 昭和 18 (1943).3),  
p. 227-230 では「マダム・ホルマン」が久邇宮朝融  
王に献上された記述を削除して再録している。



『マダム・ホルマンに就て』  
日本近代音楽館遠藤宏文庫蔵

10. [兼常清佐, 辻莊一編] *Catalogue of the W.  
H. Cummings' Collection in the Nanki Music  
Library* Nanki Music Library 1925 (大正 14) 年  
12 月 iii, 70p. 23cm

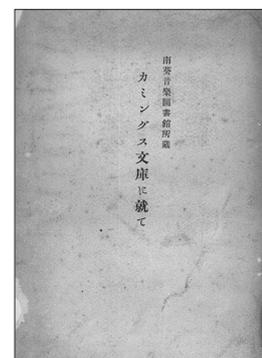
書中に編者の記載はないが、『南葵音楽事業部摘要』  
第 1 に兼常、辻の両名による編纂と記されている。「是  
は過ぐる大正七年南葵文庫音楽図書部時代 (略) Dr.  
William Hayman Cummings の遺愛の蒐集書の中  
約五百冊を購入して南葵音楽図書館に收藏して置いた  
ものを文学博士兼常清佐文学士辻莊一の両氏専ら研究  
室に在つて調査整理をされ著者目録を編纂したもので  
ある。」(『南葵音楽事業部摘要』第 1, p. 36)



*Catalogue of the W. H. Cummings'  
Collection in the Nanki Music Library*  
和歌山県立図書館蔵

11. 兼常清佐, 辻莊一 『南葵音楽図書館所蔵カミングス  
文庫に就て』 南葵音楽図書館 1926 (大正 15) 年 1  
月 1 日 80, 83p. 23cm 非売品

「該書は前記目録編纂に續いて該文庫の詳細なる邦文  
解説で兼常氏は「音楽に関する著書及び器樂の譜に就  
て」を書かれ辻氏は「聲樂曲譜に就て」を書かれてあ  
る。」(『南葵音楽事業部摘要』第 1, p. 37)  
国会図書館所蔵本は奥付の発行日を 1 月 15 日に訂正  
する書き入れがある。



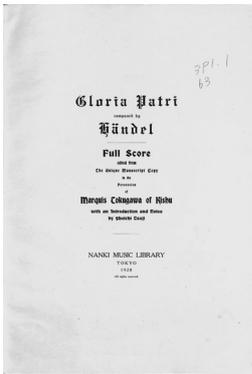
『南葵音楽図書館所蔵カミングス文庫  
に就て』和歌山県立図書館蔵



『ベートーヴェン百年忌記念會圖書陳列目錄』

12. 『ベートーヴェン百年忌記念會圖書陳列目錄』 奥付なし〔南葵音楽図書館 1927 (昭和 2) 年〕 25p. 23cm

ベートーヴェン百年忌記念会 (1927 (昭和 2) 年 3 月 26 日・27 日) の出品目録。ベートーヴェンの自筆書簡 (収蔵番号 L-1) の全文を掲載している。



ヘンデル『グロリアパトリ 總譜表』  
和歌山県立図書館蔵

13. 辻莊一編『ヘンデル グロリア パトリ 總譜表』 南葵音楽図書館 岩波書店発売 1928 (昭和 3) 年 12 月 10 日 7, 15, 8p. 40cm 2 円 50 銭 限定 1,000 部

英語版: *Handel Gloria Patri* / 英語版別題: *Gloria Patri composed by Handel. Full Score Edited from the Unique Manuscript Copy in the Possession of Marquis Tokugawa of Kishu with an introduction and notes by Shoichi Tsuji*

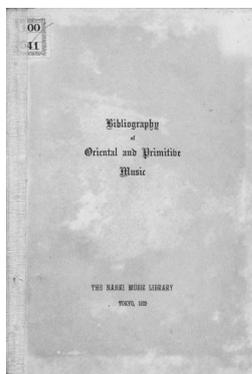
「この楽曲は (略) その總譜に至つてはヘンデル全集中にも缺けてゐる。然るに本圖書館所蔵の前記カミングス文庫中に世界唯一の寫譜原稿 (大型十六行五線紙十二頁) を發見し書誤り或は不明の點を調査研究して辻莊一氏の手によつて完全なる總譜を作り上げるに至つたのである。」(『南葵音楽事業部摘要』第 1, p. 37) 日本語と英語の 2 種の版がある。本書の詳細は、渡辺恵一郎「ヘンデルの〈Gloria Patri〉の失われた筆写譜 (旧南葵音楽文庫 o.52.3) について」『桐朋学園大学研究紀要』3 号 (1977.6), p. 42-66 参照。



『南葵音楽事業部摘要』第 1  
和歌山県立図書館蔵

14. 『南葵音楽事業部摘要』第 1 南葵音楽図書館 1929 (昭和 4) 年 4 月 20 日 58p. 23cm 非売品

南葵音楽図書館の蔵書、研究活動などの紹介。南葵音楽図書館の刊行物や過去の演奏会の記録などもまとめられている。第 2 以降は刊行されていない。



*Bibliography of Oriental and Primitive Music* 国立国会図書館蔵

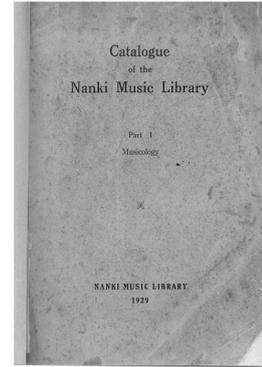
15. 遠藤宏編 *Bibliography of Oriental and Primitive Music* 南葵音楽図書館 岩波書店発売 1929 (昭和 4) 年 5 月 5 日 62p. 23cm 1 円

「文學士遠藤宏氏の調査されしもので表題の示せる如く東洋及原始音楽に關する圖書並に論文等の文献を研究且つ蒐集されたもので此の種研究家にとりては大なる參考資料となるべきを信じる。」(『南葵音楽事業部摘要』第 1, p. 37)

「外國文で書かれた東洋音楽關係圖書論文楽譜を私が調査して英文で一九二九年に出版し、主として海外研究者の便をはかつた。」(遠藤宏「『南葵文庫』音楽史話」, p. 37)

16. *Catalogue of the Nanki Music Library: Part I Musicology* 奥付なし〔Nanki Music Library 1929 (昭和4)年9月〕 372, 25p. 23cm

1928年までに収集された音楽書の目録。カミングス文庫に関しては別に目録が刊行されていたため除外された。



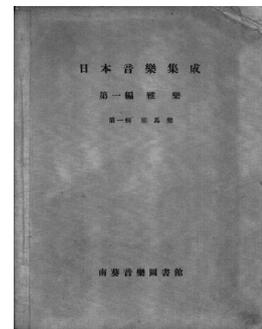
*Catalogue of the Nanki Music Library: Part I Musicology*  
和歌山県立図書館蔵

17. 兼常清佐, 辻荘一『催馬樂』(『日本音楽集成』第1編 雅楽 第1輯) 南葵音楽図書館 岩波書店発売 1930 (昭和5)年7月25日 16, 33, 10p. 30cm 2円50銭

別題: *Saibara*. (*Die geschichtlichen Denkmaler der japanischen Tonkunst*. Abteilung I Hofmusik, 1. Heft)

『南葵音楽事業部摘要』第1に報告されている「雅楽に関する文献の調査並にその樂器を基とせる科學的研究」(p. 39)の成果。

「元來徳川家には立派な雅樂々器の多數と文献があつた。(略)それで雅樂關係文献樂譜を基礎として調査をやり出し、兼常、辻兩君が研究に當り、宮内省から山井基清氏を主とし、他の伶人達も參加して、雅樂曲の五線譜作製をはじめた。作譜は山井氏が主として當つた。かくして催馬樂六曲が先づ完成して出版され、和獨兩文で解説し、世界各國の音樂圖書館、研究所、大學等に寄贈した。日本音楽集成第一卷としたのであつたが、その後は伶人達の都合や經濟上の問題などで出版が續かなかつたのは残念であつた。」(遠藤宏「南葵文庫」音楽史話, p. 37)



『催馬樂』(『日本音楽集成』第1編 雅楽 第1輯) 国立国会図書館蔵

## II. 未出版文献

『南葵音楽事業部摘要』第1(前節資料番号13)には「未だ出版等の運びには至らざるも研究室に於て調査されたる報告」として以下の5点が記載されている(記載順)。

◎遠藤宏編 *Joseph Hollman's Song "She Is Sleeping Sweet" (Posthumous Work)*

◎遠藤宏編 *Joseph Hollman "Reproche à Elsa de l'Opera Lohengrin de R. Wagner" arrangé pour Violoncelle et Piano (Oeuvre Posthume)*

「〔上記〕二曲は本図書館に所蔵するチエルロ大家故ジョセフ・ホルマン氏の遺書中に発見されたる自筆草稿を基礎として遠藤宏氏の編纂せるものである。」(『南葵音楽事業部摘要』第1, p. 38)

◎遠藤宏編 『Franz Schubert 作品年譜』

「本年度〔1928年度〕は恰もシューベルト百年忌に當りしを以てその記念事業の一として遠藤宏氏の研究編纂せるシューベルトの作品年譜である。」(『南葵音楽事業部摘要』第1, p. 37-38)

「シューベルト全作品年表を日本人にも外國人にも讀めるようにして私が作製したものは、シューベルト百年忌の記念に出版する豫定であつたが、そのまゝとなつて私の手許に残つている。」(遠藤宏「南葵文庫音楽史話」, p. 37)

◎遠藤宏 『南葵音楽図書館所蔵の貴重書を主題とせる書誌學的、音楽理論的、傳記的、研究』

草稿：日本近代音楽館遠藤宏文庫蔵 EN 555

◎遠藤宏 『Prof. Dr. Max Friedlaender 本に就て』

「〔上記2冊は〕本図書館所蔵の貴重書並に最近購入したるフリードレンデル博士蒐集書に對する調査及考證を記せる解説にして共に遠藤氏の調査に基づくものである。」(『南葵音楽事業部摘要』第1, p. 38)

また『南葵音楽事業部摘要』第1に南葵音楽図書館研究室の業績として記載されている下記文献は、独立した出版物としては存在を確認できない。

◎〔辻莊一〕 『ヘンデルのグロリア・パトリに就て』

「Gloria Patri を編するに當り調査されたる報告の出版である。」(『南葵音楽事業部摘要』第1, p. 37)

『日本音楽集成』第1編は以下の構成が計画され、同書第1輯『催馬楽』（前節資料番号17）では第2輯『朗詠』と第3輯『久米歌』が「近刊」と予告されている。

◎兼常清佐, 辻莊一 『朗詠』（『日本音楽集成』第1編 雅楽第2輯）

別題：Rōei (*Alte Lieder*). (*Die geschichtlichen Denkmäler der japanischen Tonkunst*. Abteilung I Hofmusik, 2. Heft)

◎兼常清佐, 辻莊一 『久米歌』（『日本音楽集成』第1編 雅楽第3輯）

別題：Kume-Uta (*Altjapanische Kriegs-[Tanz-]lieder*). (*Die geschichtlichen Denkmäler der japanischen Tonkunst*. Abteilung I Hofmusik, 3. Heft)

◎兼常清佐, 辻莊一 『東遊, 神楽』（『日本音楽集成』第1編 雅楽第4輯）

別題：Aduma-Asobi, Kagura (*Kultgesänge*). (*Die geschichtlichen Denkmäler der japanischen Tonkunst*. Abteilung I Hofmusik, 4. Heft)

◎兼常清佐, 辻莊一 『東遊, 神楽』（『日本音楽集成』第1編 雅楽第5輯）

別題：Aduma-Asobi, Kagura (*Kultgesänge*). (*Die geschichtlichen Denkmäler der japanischen Tonkunst*. Abteilung I Hofmusik, 5. Heft)

◎兼常清佐, 辻莊一 『唐楽』（『日本音楽集成』第1編 雅楽第6輯）

別題：Chinesische Orchestermusik. (*Die geschichtlichen Denkmäler der japanischen Tonkunst*. Abteilung I Hofmusik, 6. Heft)

◎兼常清佐, 辻莊一 『高麗楽』（『日本音楽集成』第1編 雅楽第7輯）

別題：Koreanische Orchestermusik. (*Die geschichtlichen Denkmäler der japanischen Tonkunst*. Abteilung I Hofmusik, 7. Heft)

## 付録 戦後の南葵音楽文庫に関する文献

以下には付録として、戦後に「南葵音楽文庫」として、南葵音楽図書館の旧蔵書を継承した団体による出版物をまとめる。

南葵音楽図書館の旧蔵書は、1967（昭和42）年に開催された読売新聞社主催の展覧会『南葵音楽文庫特別公開』（東京上野松坂屋、1967年3月14～22日／大阪天満橋松坂屋、同年4月18～22日）を端緒に調査がなされ、展覧会カタログが作られたほか、1970～77（昭和45～52）年に日本近代文学館で公開された際には蔵書の新たな買い足しも行われ、新蔵書の情報も加えた3冊の蔵書目録が作成された。また、発行年や部数、作成の経緯などは不明であるものの、文庫所蔵のベートーヴェンの自筆楽譜のファクシミリ版の出版も確認されている。日本近代文学館時代の出版物の発行者名は、最初に刊行された音楽書の目録では「南葵音楽文庫」とされていたが、1970（昭和45）年10月31日に財団法人東京音楽文化センターの設立許可が下りて以降は、「東京音楽文化センター」に書き換えられている。1977（昭和52）年4月18日、財団法人東京音楽文化センターの解散に伴い、南葵音楽文庫は同年7月20日をもって日本近代文学館における公開に終止符を打ち、出版活動も休止した。

- ◎『南葵音楽文庫特別公開』読売新聞社 1967（昭和42）年 159p. 29cm
- ◎南葵音楽文庫編『蔵書目録（音楽書）』南葵音楽文庫 1970（昭和45）年4月20日 159p. 26cm 非売品。
- ◎大木コレクション・南葵音楽文庫編『蔵書目録（貴重資料）』東京音楽文化センター 1970（昭和45）年11月30日 60p. 26cm 非売品  
別題：*Catalogue of Rare Books and Notes*
- ◎大木コレクション・南葵音楽文庫編『逐次刊行物目録』1970年10月現在 東京音楽文化センター 1970（昭和45）年11月30日 13p. 26cm 非売品。
- ◎大木コレクション・南葵音楽文庫編『南葵音楽文庫所蔵ベートーヴェンの自筆楽譜《ロシア民謡の編曲》』東京音楽文化センター 発行年不明〔1970（昭和45）年以後〕 1 sheet 22×31cm

## 《通奏低音の演奏を習得するためのいくつかの勘どころ》とヘンデル？

佐々木勉

南葵音楽文庫には、およそ 20 センチメートル四方の紙 1 枚の表裏に記された《通奏低音の演奏を習得するためのいくつかの勘どころ》<sup>(1)</sup>と題された書付けが収蔵されている。それは、通奏低音演奏の要点（表面）を簡潔にまとめ、裏面に実例を付したもので、近年修復されたが、元々は金色に彩色された木製の枠に両面からガラスで挟むように固定されていた（図版参照）。裏面下方の余白には、「ハーモニーの規則についての指導として、ダービーシャー、アシュボーン近郊、スタッフォードシャー、コールウィッチ・アビーのグランヴィル伯爵殿に進呈されたジョージ・フレデリク・ヘンデルの手稿 M[anu]s[cript] of Geo[rge] Fred[erick] Handel given to Count Granville Esqr. of Calwich Abby Staffordshire n[ear] Ashbourne Derbyshire as instruction on the rules of harmony.」（〔 〕は筆者による補足）<sup>(2)</sup>、さらに「これはヘンデル自身の手書きによる This is in Handel's own handwriting」と記されている。この書き込みは後世のもので、その筆跡は、明らかに本文とは異なっている。また書き込んだ人物も明らかではない。果たして、この書付けの作者、そして筆写者は、書き込みの通りにヘンデル自身なのであろうか。

---

(1) 原題は "Some Golden Rules for the attaining to play Through Bass" である。1967 年に開催された南葵音楽文庫特別公開展の出展カタログ（読売新聞社, 1967, p. 57）では、これを《通奏低音奏法のための黄金律》と訳記した。しかし「黄金律」は、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（マタイによる福音書第 7 章第 12 節、新共同訳聖書）というキリスト教倫理の原理を指して "the golden rule" と定冠詞を伴って単数形で表記された場合に相応しい訳語であり、それに準じて単一の重要な規則を指して使われることもあるが、ここでは "some golden rules" と複数形で書かれていることから「重要なことがら」「要点」というより広い意味と解して「いくつかの勘どころ」と訳出した。

(2) "Count Granville Esqr." の "Count" は、「Count 伯爵」とも「Court コート」（人名）とも読める。ここでは、前者の読みを採用した。なお、後述するマクリーンは、これを "Court" と読み、「コート・グランヴィル」という名の実在する 2 人の人物を挙げたが、両者ともに該当しないと結論づけている。両人物の音楽的素養が、この書付けの内容に相応しいと考えられないためである。Hugh McLean, "Granville, Handel and 'Some Golden Rules'", *The Musical Times*, vol. 126, no. 1713 (Nov., 1985), p. 665.

今日、ジョージ・フレデリク・ヘンデル George Frederick Handel (1685 ~ 1759 年) が一般に広く知られているのは、《メサイア Messiah》をはじめとするオラトリオや数々のオペラ、さらにはコンチェルトや器楽曲を残した作曲家としてであり、教程を著すような理論家、あるいは教師としてではない。しかし実際には、ヘンデルは、1724 年から 30 年代中頃にかけて国王ジョージ 2 世の子供たち、すなわちアン王女、キャロライン・エリザベス王女、アメリア・ソフィア王女、ルイーズ王女の音楽教師を務め、彼らを指導するために多くの実例を含む通奏低音の演奏法についての教程<sup>(3)</sup>を残している。したがって、ヘンデルがこの通奏低音の演奏についての書付けを残したとしても、何ら不思議はない。

この書付けの真贋については、これまで異なる報告が行われてきた。大英博物館の司書でヘンデルの研究で知られたウィリアム C. スミスは、ヘンデルについての論考を集めた論集 (1954 年刊行) に作品目録を寄稿し、書付けについて、書かれた年代は不明としながらもヘンデルの自筆とし、上記の書き込みに従って、後述するようにヘンデルと親交のあった (バーナード・) グランヴィル (Bernard) Granville (1698/99 ~ 1775 年) に進呈されたものであると記した。またスミスは、書付けは、W. H. カミングス William Hayman Cummings (1831 ~ 1915 年) の蔵書が、その死後 1917 年に競売に付された際に競売番号 133 号として出品されたものである、と付け加えた<sup>(4)</sup>。なお、南葵音楽文庫の収蔵書の中核をなすのは、この時競売に付されたカミングスの蔵書の一部である。スミスは、書付けについて同じ内容の記述を別のヘンデル作品目録 (1956 年刊行) で

---

(3) ヘンデルの自筆による通奏低音についての教程が、ケンブリッジのフィッツウィリアム博物館に所蔵されている。以下を参照。

Alfred Mann, "Eine Kompositionslehre von Handel", *Handel-Jahrbuch* 10/11, 1964/65, Georg-Friedrich-Handel-Gesellschaft.

Alfred Mann, *Georg Friedlich Handel : Composition Lessons from the Autograph Collection in the Fitzwilliam Museum, Cambridge*, Hallische Handel-Ausgabe, Supplement, vol. 1, (Kassel, 1978).

Alfred Mann, *Theory and Practice: The Great Composer as Student and Teacher* (New York, 1987).

David Ledbetter, *Continuo playing according to Handel, Hid figured bass exercises*, Early Music Series 12, (Oxford, 1990).

(4) "Date? Auto. Cummings Sale Catalogue, No. 133, 1917. An MS. note says that it was given to (Bernard) Granvill." William C. Smith, *Catalogue of Works, Handel. A Symposium*, ed. Gerald Abraham, (London, 1954), p. 309.

も繰り返している<sup>(5)</sup>。

一方、ヘンデルの作品の学術的な校訂楽譜全集である、いわゆるハレ版の補巻（1978年刊行、アメリカの音楽学者アルフレッド・マンの編纂による）では、おそらく写真を用いて鑑定を行ったのであろうが、それをヘンデルの自筆ではなく、内容もヘンデルによって書かれたものではないと報告し、それを贈られた人物についてはまったく議論していない<sup>(6)</sup>。なお、マンには、後述するように1960年と65年の2度にわたって来日し、実際に南葵音楽文庫、特にカミングスの旧蔵書を調査したヒュー・マククリーンから1971年に書付けについての情報が届けられていた<sup>(7)</sup>。

1967年に東京と大阪で南葵音楽文庫特別展が開催された際には、この書付けも展示、紹介されている。おそらく裏面の書き込みに従ったのであろうが、それは、ヘンデルの「自筆楽譜」として展示された。そして展示目録には、書付けを贈られた人物についておそらくスミスの報告（1954年あるいは56年）を参照したのであろうが、「(バーナード?)・グランヴィル伯爵に与えられたものと考えられる」と記載された<sup>(8)</sup>。

南葵音楽文庫特別展の数年前のこと、17、18世紀の音楽を研究するカナダの音楽学者ヒュー・マククリーンは、当時大木九兵衛によって管理されていた同文庫を調査するために来日した<sup>(9)</sup>。そして、マククリーンはその結果をふまえて、1985年に発表した論文で「ヘンデル自身の手書き」という書き込みの信憑性を否定し、書付けをヘンデルの自筆によるものではないと結論づけた。しかし一方では、書付けの作者がヘンデルである可能性まで

---

(5) William C. Smith, "Verzeichnis der Werke Georg Friedrich Handels", *Handel-Jahrbuch* 1956 (2), p. 165. この目録に続いて出版された A. クレイグ・ベルによるヘンデルの成立年代順作品目録では、書付けを「ヘンデルの作とはされるが、疑わしい作品」として立項しているが、《調律法についての諸規則 Rules for Tunings》というヘンデルの他の著作と混同しており、記述内容が混乱している。A. Craig Bell, *Handel Chronological Thematic Catalogue*, (Darley, 1972), p. 405.

(6) *Hallsche Handel-Ausgabe, Supplement*, vol. I (Kassel, 1978), ed. Alfred Mann, p. 22. マンは、ここで書付けが南葵音楽文庫に所蔵されていることを付け加えている。

(7) Hugh McLean, 前掲書, p. 665.

(8) 『南葵音楽文庫特別公開』, p. 57 及び p. 149. 注 5 参照。

(9) "Hugh McLean", *Historica Canada*, <http://www.thecanadianencyclopedia.ca/en/article/hugh-mclean-emc/> (2017年8月14日閲覧)。この時、マククリーンは、南葵音楽文庫の他の資料も調査しており、Hugh McLean, "Blow and Purcell in Japan", *The Musical Times*, vol. 104, no. 1448 (Oct., 1963), p. 702-705 において、調査に至った経緯を含めてその結果を報告している。

は否定しなかった。それどころか、書付けとそれを贈られたとされるグランヴィル伯爵家との関わりについても肯定的な推論を展開した。そしてさらに、それが南葵音楽文庫に収蔵されることになった経緯についても言及した<sup>(10)</sup>。

それによると、ヘンデルとグランヴィル家との親交は、1710年にヘンデルが初めてロンドンを訪れた際に、当時10歳のメアリー・グランヴィル Mary Granville (1700～88年)、すなわち後にヘンデルの有力な支援者となるデラニー夫人 Delany に出会ったことに始まる。メアリーを介して兄のバーナード・グランヴィルとも生涯にわたる親交を結び、それは、バーナードからヘンデルにレンブラントの絵画が贈られるほどだった<sup>(11)</sup>。一方のヘンデルは、自作を含む様々な楽譜を贈呈したり、1756年にはバーナードが購入するオルガンの選定に関わった。また、グランヴィル家の子どもたちに音楽の指導を行った。マクリーンは、こうした関係の中で、書付けが作られた可能性があることを示唆している。そして経緯は明らかではないが、それは、歴史的な手写楽譜や印刷本を収集していたカミングスの手に渡ることになった。19世紀中頃からグランヴィル家は、財政的な困難から数回にわたって財産を競売に付している。そこにはヘンデルからバーナードに贈られた数々の楽譜も含まれており、おそらく書付けもその中にあったと推測される。しかし、その存在は競売カタログからは確認できない<sup>(12)</sup>。早い段階で書付けは、グランヴィル家から他の人の手に渡っていたのかもしれない。その後、書付けは、それを含むカミングスの蔵書を購入した徳川頼貞によって南葵音楽文庫に収蔵されることになった。

《通奏低音の演奏を習得するためのいくつかの勘どころ》の内容は、左右の手が連続して反行することを避け、6度の連続や5度を時々織り交ぜる点で18世紀の特徴を備えている。

以下に、《通奏低音の演奏を習得するためのいくつかの勘どころ》の画像と、その本文、並びに邦訳を対訳の形で示す。〔 〕は原文において判読できない箇所、訳文においてはその部分が訳者による補足であることを表している。

(10) Hugh McLean, "Granville, Handel and 'Some Golden Rules'", 前掲書, p. 662-665.

(11) Hugh McLean, "Bernard Granville, Handel and the Rembrandts", *The Musical Times*, vol. 126, no. 1712 (Oct., 1985), p. 593-601 及び Hugh McLean, "Granville, Handel and 'Some Golden Rules'", 前掲書, p. 662-665.

(12) Hugh McLean, "Granville, Handel and 'Some Golden Rules'", 前掲書, p. 665.



Some Golden Rules for the attaining to play Through Bass.

Through Bass is playing chords with the Righthand to the bass note of the left which chords are counted from the bass note, which said note is always counted ones, thus C D E. E is the 3rd to C.

1st. The common chord is the Third, fifth and Eight[h], which may be took three ways viz 358, [538], 583 the first is the best. This chord is allways plays where no figure is marked over. The Bass note any one of the common chord figured, or two of them or a ♭ or a # or a ♯ signifies the common chord.

2nd. The chord of the 6 is the common chord of the third below or (which is the same) the common chord will make the chord of the 6th [above] to the 3rd above.

3rd. The chord of the 7th i[s] the common chord the eight [ ] made a 7th or being added to the common chord.

4th The 2/4 is the common chord to the note above.

5th The 5/4 is the common chord the 3rd being made a 4th.

#### 【オモテ面】

通奏低音の演奏を習得するためのいくつかの勘どころ

通奏低音は、左手の低音にその低音から数えた [度数の] 和音を右手で演奏する。その音は、ド、レ、ミというふうに、つねに [その音自体を入れて] 1つずつ数える。[したがって] ミはドに対して3度である。

第1項 三和音は3度、5度、8度 [の音の積み重ね] であり、3通りの形がある。すなわち [それぞれ低音から] 3度5度8度、[5度3度8度]、5度8度3度であり、最初のものが最良である。[低音の音符] の上に数字が記されていない場合は、これらの三和音 [のどれか] がつねに演奏される。いずれの三和音であれ、低音には数字が [1つ]、あるいは2つまた ♭ や # や ♯ が書かれるが、[その場合も] 三和音を意味する。

第2項 6の和音は、3度下の三和音であり、あるいは (同じことだが) この三和音では、6度の音を3度の音の上に加えることになる。

第3項 7度の和音は、[本来は] 8度の音を7度にした、あるいは7度の音を加えた三和音である。

第4項 2/4は、低音の上に [2度と4度の音を加えた] 三和音である。

第5項 5/4は、3度の音を4度にした三和音である。

第6項 6/4は、5度下の三和音である。

6th The 6/4 is the common chord to the 5th below.

第7項 9度は、8度の音を9度の音にした三和音である。

7th The 9th is the common chord the 8th being made a 9.

第8項 6/5は、三和音に6度の音を加えた三和音である。

8th The 6/5 is the common chord the 6th being added to it.

十分に慣れるまでは、低音 [の進行] と反対に和音を動かすことについては注意しなさい。もしあなたの低音が上行したら、伴奏も高くし始めなさい。もしあなたの低音が下行したら、あなたの低音に近づくように伴奏を低くしなさい。そうすることによって、あなたは、5度の音や8度の音を2つ重ねてしまうことを避けることができるでしょう。

Observe to take the chords as much as convenient contrary to the Bass [i ] if your Bass ascends, begin accompan[iments] high. If your Bass descends begin accompaniments low that is near your Bass by which you will avoid taking two fifth or Eights together.

【ウラ面】

実例

Example

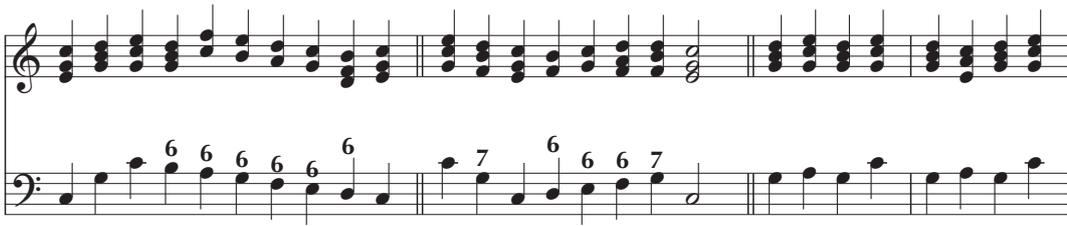
The image shows a musical example with two staves. The top staff is a treble clef with a series of chords. The bottom staff is a bass clef with a melodic line and figured bass notation. The figures are: 6, 6, 6, 6 5, 6, 6, 2/4, 6, 6, 6, 6, 6 5, 6 4, 7 3.

これらの三和音はみな、この低音とは反対に動いている。

These common chords together must be took contrary to this Bass.

6については [どの6でも]、もしあなたの3度音がああなたの低音の次 [の音] だったら、あなたの伴奏が高くなりすぎたり、低くなりすぎたりしない限りは、低音に従ってあなたは上行、あるいは下行してもよい。8度の音は使わないように。

Sixes, if your third is next your Bass you may rise or fall as it does providing your accompa[-niments] don't [ ] too high or too low. Ceasing out y[our] eight.



another Example to play full. This [ ] Bass has through fifth in the accompa[niments] also three 8th to the Bass.

十分に演奏するためのもう1つの実例。この低音は、終始、伴奏に5度をもっている。また低音に対して3つの8度をもっている。



when your Bass moves thus you will be oblidged to make a skipt with your right hand on purpose to take the chords contrary to your Bass.

あなたの低音がこのように動く時は、あなたは右手をスキップせざるを得ないでしょう。あなたの低音 [の動き] に反して和音を演奏するために。

## スナール社の挑戦

### —南葵音楽文庫に眠る室内楽シリーズ—

近藤秀樹

南葵音楽文庫には、フランスの音楽出版社スナール Senart から刊行された「室内楽シリーズ」が収められている。日本ではその存在すらほとんど知られていないが、この室内楽シリーズは、近代フランス音楽の知られざる宝庫であるとともに、両大戦間のフランスにおける古楽復興の流れをたどるうえでも重要な資料である。また、後述するように、同シリーズは年2回発行の定期刊行物の形で出版されたものであり、南葵音楽文庫には、このようなユニークな刊行形態の全体像がつかめるような形で、シリーズが保管されているのである。本稿では、このスナール社の室内楽シリーズについて、現時点までの調査で判明したことを整理する。

#### 1. 南葵音楽文庫における「室内楽シリーズ」

南葵音楽文庫がスナールの室内楽シリーズを購入した経緯については、不明な部分が多い。逐次刊行物を順次購入したのか、ある時点で一括して購入したのかも、現時点でははっきりしない。いずれにしても、1921年の第1回刊行から27年の刊行分まで、シリーズ刊行の意図・形態〔後述〕がわかるような形で保存されている。

初期のカード（南葵文庫音楽部時代、1925～32年頃に作成）には、スナールの室内楽シリーズについての記載はない。駒場時代に作成された『南葵・図書原簿（旧楽譜）』の最後の方に室内楽シリーズの記載があるが（受入登録番号005761～006183）、曲名の誤記など、若干の不備が見られる。また、後述するように、室内楽シリーズには、毎号、演奏会評、各号に収録された作品の紹介、作曲家についての論考などを掲載した冊子が付録として附くが、この付録が南葵音楽文庫にはいくつか欠けている。

#### 2. スナールについて

スナール Senart はフランスの音楽出版社である。1908年にモーリス・スナール Maurice Senart（1878～1962年）とルダネ B. Roudanez（生没年不明）により設立。当初は、主にヴァンサン・ダンディ<sup>(1)</sup>なら

---

(1) 第一次大戦前、スナールはダンディの監修下に Nouvelle Edition française de la musique classique を刊行していた。

びにスコラ・カントルムに拠る作曲家たちのオルガン曲<sup>(2)</sup>を出版していたが、1920年代に入ると、同時代の若い作曲家たち——フランス六人組やエコール・ド・パリ——の作品の刊行に力を注いだ。とりわけオネゲル Arthur Honegger (1892～1955年) が同社から受けた恩恵は大きい。また、グディメル、ジャヌカン、ラッサスをはじめとするルネサンス期の声楽曲の出版 (*Monuments de la Musique Française au Temps de la Renaissance* 1924–29, 10 volumes) も、同社の業績として特筆に値する。1941年にフランスの音楽出版社サラベール Salabert に売却。スナールから出していた多くの楽譜は、現在、サラベールから出版されている。

### 3. 室内楽シリーズ 刊行の意図と形態

室内楽シリーズの刊行意図は、同社の広告からうかがうことができる<sup>(3)</sup>。室内楽シリーズの広告では、まず、室内楽の現状と問題点が指摘される。すなわち、プロ、アマともに室内楽のニーズが拡大しているにもかかわらず、新作の楽譜が高価で、普及を阻害しており、室内楽のレパートリーの固定化を招いている、というのである。この状況を改善するためには、さまざまな作品を幅広く収めた、室内楽の楽譜の叢書 *bibliothèque* が必要である。この叢書を定期刊行物の形で提供するのがスナール社の室内楽シリーズである。このシリーズを順次購入していけば、室内楽の楽譜の一大コレクションが出来上がる、というわけである。広告には「コスト面でも定期購読が断然お得」と書かれている<sup>(4)</sup>。

刊行の形態は、以下のとおり。

a. 刊行は年2回(5月／11月)。予約制。配本は各号、大判で550ページ。

b. シリーズは、次の5つのカテゴリーを含む。①ピアノ(連弾曲を含む)、②歌曲、③ヴァイオリン、④チェロ、⑤アンサンブル(弦楽四重奏曲やピアノ五重奏曲)。歌

---

(2) *Les Maîtres contemporains de la orgue (275 pièces pour orgue ou harmonium)*.

(3) 1923年のスナール社の広告。Gallica で閲覧。

(4) 予約を募って、楽譜を定期刊行物の形で出版するという商法を、スナールは第一次大戦前から採用していた。同社の *Musique contemporaine* シリーズは、年単位で予約、楽譜は毎月刊行、予約にあたっては「ピアノ」「歌とピアノ」「ヴァイオリンとピアノ」の3つのカテゴリーを自由に選択し組み合わせることが可能であった。これが1921年にスタートする室内楽シリーズの直接の前身であろう。

曲が室内楽の一カテゴリーと位置づけられているのは意外だが、ここで言う室内楽 (musique de chambre) は、小編成で演奏可能な作品を幅広く含むものと考えてよい。楽譜は1作品ごとに製本されているが、カテゴリーごとに厚紙表紙 Cartonnage にまとめられている。個々のカテゴリーのみの購入も可能。

c. それぞれのカテゴリーが、同時代の音楽 (Musique moderne) と、19世紀以前の音楽 (Musique ancienne) の双方を含む。両者はおおよそ 3:1 の割合。

d. 毎号、付録 (Supplément littéraire et critique) が付き、その号に収録された作品とその作曲家についての解説のほか、演奏会評、特定の作曲家についての論考が含まれる。作品解説はアンリ・コレ、演奏会評はロベール・デザルノー、論考はロラン・マニュエルやカルヴォコレッシらが担当。いずれも当代随一の音楽学者、音楽評論家である。このため、定期刊行物としての室内楽シリーズには、音楽雑誌としての性格が備わることになる。

なお、シリーズ全体の監修者はポール・レオン Paul Léon(1874～1962年)。アカデミー会員で、ボザール(美術学校)の院長を務めた。専門は建築、特に歴史的建造物であるが、ガブリエル・フォーレの親しい友人であった。1921年5月19日には、レオン臨席のもと、スナール社から刊行されたばかりの作品を集めてコンサートが開かれている(会場は旧音楽院のホール)。

1927年に至って室内楽シリーズは方向転換を行う。それまでは自社から出版された楽譜のみでシリーズを構成していたが、デュラン、ルアール・ルロル、エノック社の楽譜も室内楽シリーズに含めることにしたのである。こうすることで、より幅広い、バランスの取れたラインナップを提供することができる、と同社広告には書かれている(『ルヴュ・ミュージカル』1927年10掲載)。実際、この方向転換により、室内楽シリーズは初めてラヴェルの作品を含むことができた(《ヴァイオリン・ソナタ》、デュラン社より刊行)。

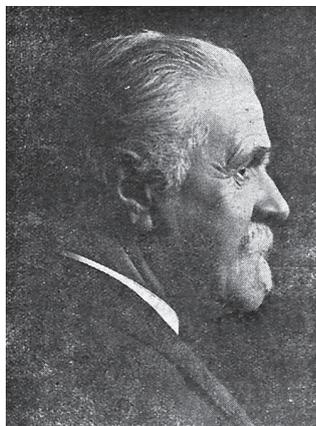
なお、南葵音楽文庫に収蔵されているのは、この1927年度刊行分までである。これがシリーズの最終巻だったのか、本国ではその後も継続して発刊されたのか、等々については、現時点では不明であり、今後の調査が望まれる。



室内楽シリーズ1923年第2期の付録

#### 4. 登場する作曲家の顔ぶれ

南葵音楽文庫に収められたスナール室内楽シリーズの楽譜は全部で423点。シリーズに登場する作曲家は、同時代と19世紀以前を併せると200名以上に登る。同時代の作曲家で最年長はヴァンサン・ダンディ Vincent d'Indy(1851～1931年)、最年少の作曲家はジャン・フランセ Jean Françaix (1912～97年)である。



ヴァンサン・ダンディ  
室内楽シリーズ1925年・第1期付録より



ジャン・フランセ  
室内楽シリーズ1923年・第2期付録より

ダンディはセザール・フランクの高弟で、国民音楽協会の会長を務め、私立の音楽学校、スコラ・カントルムを設立するなど、フランス音楽史に大きな足跡を残した人物であるが、そのダンディ晩年のピアノ五重奏曲(1924年)が、1925年・第1期の「アンサンブル」編の一環として刊行されている。同シリーズがオネゲルやタンスマンなど、時代の最先端を行く作曲家の作品を数多く含んでいることを考えると、この老大家のシリーズへの登場は少々意外に思われるが、すでに述べたように、もともとスナールはスコラ・カントルムの音楽家たちとつながりの深い出版社であり、またダンディ自身、古楽の復興に熱心であった。

とはいえ、スナールが若手作曲家の作品の紹介と普及に精力的であったことも事実である。1923年・第2期の「ピアノ」編には、ジャン・フランセの《ジャックリーヌに *Pour Jacqueline*》が含まれている。フランセは1912年生まれで、10歳で作曲の名教師ナディア・ブーランジェの弟子となったが、この曲はその前年の作で、5曲からなる小品集である。タイトルの「ジャックリーヌ」は作曲者の従姉妹の名前<sup>(5)</sup>。同じ第2期の「ピアノ」編には、やはり作曲家でピアニストであった、ジャンの父アルフレッド Alfred Françaix (生没年不明)の作品が含まれているので、この機会に息子の習作も刊行されたものであろう。フランセはフランス六人組の作曲家たちと親しく、作風の上でも共通点が少なくない。スナールが当初ダンディと縁が深かったこと、後年、六人組やエコール・ド・パリの作品の普及と紹介に努めたことを考えると、現役作曲家の最年長がダンディで最年少がフランセであるのは、むしろスナールらしいことかもしれない。

次に、作曲家の国籍という観点から見てみると、同シ

(5) 作曲者自身はこの作品を習作と考えたのであろう。フランセの作品リストでは、最初のピアノ曲は《スケルツォ》(1932年)である。なお、《ジャックリーヌに》は以下のCDで聴くことができる。Jean Françaix *The music for solo piano, duo & duet*, Martin Jones etc., Ninbus Records, NI 5880/2, 2002.

リーズにはフランスの作曲家だけでなく、イタリア(マリピエロ)、スペイン(モンポウ、ブランカフォルト、ジェラルド)、ポーランド(タンスマン)、ロシア(N. チェレプニン)など、実にさまざまな国の作曲家が含まれていることがわかる<sup>(6)</sup>。1923年・第1期の「付録」では、音楽評論家のアンリ・コレ Henri Collet(1885～1951年)が「国外の様々な作曲家が含まれることがシリーズの特徴」であり、「これはドイツの音楽出版社には見られないことである」と述べている。もっとも、そのドイツ語圏の作曲家の作品が同シリーズ中に少ないことも、公平を期するために指摘しておかねばなるまい。なお、コレは「フランス六人組」Les Six の名付け親として知られる音楽学者だが、スペイン音楽に造詣が深く<sup>(7)</sup>、スナール社とスペインの若手作曲家たちとを仲介する役割を果たしたのではないかと思われる。コレ自身、作曲家でもあり、室内楽シリーズにはコレの作品もいくつか含まれている(1925年・第1期、「ヴァイオリン」編の《カスティージャ狂詩曲》など)。

一方、19世紀以前の音楽のほうもなかなか多彩である。選曲の傾向については、同時期のフランスにおける古楽復興運動との関連も視野に入れつつ、さらに調査する必要があるが、室内楽シリーズの広告によれば、「知られざる傑作」をマニュスクリプトや初版楽譜に基づいて刊行する、というのがその基本方針であったようだ。実際、Musique ancienne には、リュリ、ヴィヴァルディ、C. Ph. E. バッハなどと並んで、ルイージ・ロッシ Luigi Rossi (1597～1653年)、ニコラ・シェドヴィル Nicolas Chédeville (1705～1782年)、ピエール・ガヴィニエス Pierre Gaviniès (1728～1800年)のように、一般的にはそれほど知られていない作曲家たちの名も見える。ただし、ピリオド楽器による演奏は想定されておらず、モダン楽器(1920年代当時の)での演奏を前提として編曲が行われている。

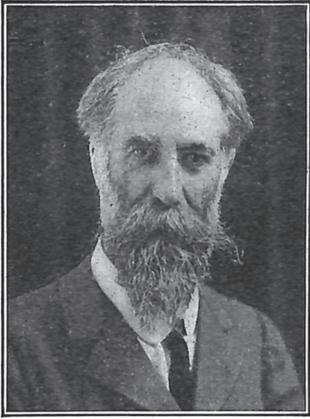
なお、Musique ancienne 中の声楽曲に関しては、アンリ・エクスペール Henri Expert(1863～1952年)が全体の監修を行っている。エクスペールはニーデルメイエル音楽学校で学び、パリ音楽院の図書館司書を務めた。古楽、特に16世紀の音楽の研究と復興に力を注ぎ、自ら Chanterie de la Renaissance なる演奏団体

---

(6) ひとつだけだが、日本人の作品も含まれている。Yoshinori Matsuyama: *Cinq chansons caractéristiques japonaises* (松村芳野里『5つの日本的な歌』)。

(7) 音楽学者としての仕事に『16世紀におけるスペイン音楽の神秘主義 *Mysticisme musical espagnol au XVIe siècle*』がある。

を立ち上げ、演奏会を行った。1930年代にはクレマン・ジャヌカンの有名なシャンソン《鳥の歌》の録音も行っている。演奏慣習の研究が長足の進歩を遂げた今日の耳で聞くと、さすがに時代の限界が感じられるが、当時の『ルヴュ・ミュージカル』誌の演奏会評では Chanterie の演奏会は高く評価されている。



シャルル・ケ克蘭  
室内楽シリーズ1923年・第1期付録より

### 5. スナールを代表する作曲家 シャールル・ケ克蘭

最後に、スナールの室内楽シリーズの傾向をよく示す作品として、ケ克蘭の《ヴァイオリン・ソナタ》を取り上げる。シャルル・ケ克蘭 Charles Koechlin(1867～1950年)はフォーレ門下の作曲家。ラヴェルとともに独立音楽協会を設立。評論家、音楽学者として『ルヴュ・ミュージカル』誌などに健筆を振るった。『和声の変遷』『対位法』『管弦楽法』などの著述もある。教育者としても優れ、ミヨー、プーランク、ソーゲらを育てた。時流を追わない独立独歩の姿勢が災いして、第二次大戦後は忘却されたが、20世紀の終り頃から再評価が進み、演奏、録音の機会も増えてきている。そのケ克蘭の室内楽の分野での代表作ともいえるべき《ヴァイオリン・ソナタ》作品64が、スナールの室内楽シリーズ1922年・第1期の「ヴァイオリン」編の一環として刊行されている。これは、ケ克蘭が「自分の本質が表現された作品」と考え、師フォーレに献呈した作品である。

作品の刊行は1922年であるが、作曲自体は1916年に遡る。実は、ケ克蘭は当初、自分の室内楽曲やピアノ曲の出版をデュラン社に打診したのだが(1916年12月18日付、ジャック・デュラン宛書簡)、翌年の5月に独立音楽協会の演奏会でソナタの初演を聞いたデュランは、「奇妙な曲」で「売れそうにない」として、その出版を拒んだ(1917年5月19日付、ケ克蘭宛書簡)。書簡の内容から見て、デュランは、この作品を構成する4つの楽章が緩-急-緩-急という配置をとること、終楽章が長大であることなどに戸惑いを覚えたようである。また、第3楽章の大胆な和声法(多調性)も、デュランにこの曲の出版をためらわせた可能性がある。実際、ケ克蘭は、のちに『和声の変遷』で、多調性の一例としてこの楽章を引いている<sup>(8)</sup>。もちろん、戦時中で新作の刊行自体が困難であったことも、背景として指摘されるべきであろう。デュランに出版を拒まれたことでケ克蘭は落胆したが、一方では、個性的な表現の

(8) ケ克蘭『和声の変遷』清水脩訳、音楽之友社、昭和37(1962).9, p.175.

ゆえにこの曲が「売れそうにない」ことも、半ば予測していたようである(1917年5月20日付、デュラン宛書簡)。

詳しい経緯は不明だが、結局この作品は、スナールから室内楽シリーズの一環として刊行されることになった。ケクランは師フォーレに宛てた書簡(1921年6月15日付)で、フォーレがこの作品の献呈を受け入れてくれたことに感謝の意を表するとともに、デュランへの不満を滲ませつつ、年末にはスナールからこのソナタが出版される予定であると書いている。予約制の定期刊行物であったがゆえに出版できたという面もあったろうが、デュランが難色を示した作品の出版を敢えて手がけたところに、スナールのチャレンジングな姿勢を認めるべきであろう。

ところで、スナールが刊行したケクランの作品は、《ヴァイオリン・ソナタ》だけではなかった。実は、ケクランの1920年代の作品の大半は、スナールから刊行されているのである。デュランと異なり、スナールはケクランの作品を「売れそうにない」とは考えていなかったようである。実際、1923年・第1期の「付録」でアンリ・コレは、ケクランの《チェロ・ソナタ》作品66に関して、ケクランを「この時代のもっとも靈感豊かな作曲家」と評している。コレは1924年・第1期の「付録」でも、ケクランの《弦楽四重奏曲》第3番に触れて、ケクランを「シリーズ購読者に最も人気のある作曲家の一人」と位置づけている。ケクランの作品はスナール室内楽シリーズの予約購読者からは一定の支持を得ていたのであろう。

また、1924年・第1期の「付録」には、カルヴォコレッシ Michel Dimitri Calvocoressi (1877～1944年) が本格的なケクラン論を執筆している。カルヴォコレッシは高名な音楽評論家で、ラヴェルと親しく、また、ロシア・バレエ団の初期の公演においてディアギレフの相談役をつとめた。カルヴォコレッシの論考は、先行研究を踏まえつつ、スナールの室内楽シリーズに収録された作品はもとより、他社から刊行された作品も視野に入れて、ケクランの作品の様式、作曲技法、作曲家としての個性を論じたもの。ケクランの《ヴァイオリン・ソナタ》《チェロ・ソナタ》《フルート・ソナタ》、ピアノ曲集《風景と海景》などを比較しながら、ケクランにおいては標題音楽と絶対音楽との間に深い関連があって、両者の線引きが難しいこと、さまざまな作品に共通ないし類似のモチーフが存在すること、にもかかわらず、それが表現するものは曲ごとに大きく異なること、などを指摘し

**室内楽シリーズに含まれる  
ケクランの作品**

**ピアノ編**

《12の小品》(1921年・第1期)  
《エスキス》(1921年・第2期)  
《パストラル》(1923年・第2期)  
《四つの新しいソナチネ》  
(1926年・第1期)

**ヴァイオリン編**

《ヴァイオリン・ソナタ》  
(1922年・第1期)

**チェロ編**

《チェロ・ソナタ》  
(1923年・第1期)

**アンサンブル編**

《弦楽四重奏曲》第1番  
(1921年・第1期)  
《弦楽四重奏曲》第3番  
(1924年・第1期)

ている<sup>(9)</sup>。今日なお興味深く読むことのできる内容であり、「音楽雑誌」としての室内楽シリーズの質の高さを示すものと言える。

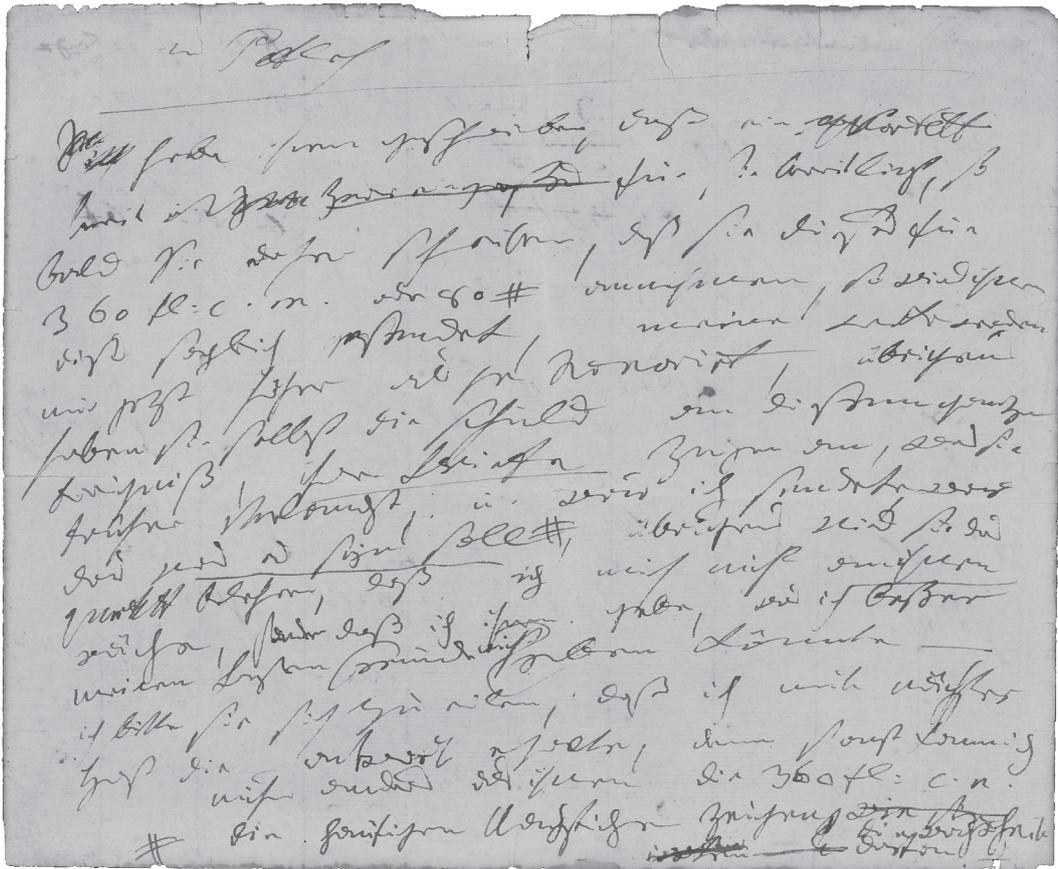
こうしたことからケクランは、スナール室内楽シリーズを代表する作曲家の一人であったと考えられる。このことは、ケクランがフランス近代音楽史に占める位置とも無関係ではない。ケクランはドビュッシーやラヴェルと同世代の作曲家であり、ミヨーやプーランクに大きな影響を及ぼした。つまり、彼は新旧の世代をリンクする位置にいたのである。そしてそれは、まさにスナール室内楽シリーズの *Musique moderne* の部門がカバーする領域——ダンディからフランセまで——と重なっていた。

---

(9) この比較検討は、のちにロバート・オーリッジも参照している。Robert Orledge, *Charles Koechlin (1867-1950) His Life and Works*, Harwood Academic Publishers, 1989, p.109.



## 資料紹介



### ベートーヴェン自筆書簡

Beethoven, Ludwig van. Letter [n.d., Vienna] to C. F. Peters.  
2p. on 1 1. 22 × 26cm. Autograph unsigned (収蔵番号 L-1)

南葵音楽図書館が活動した大正時代に、最も人気の高かったクラシック音楽の作曲家とは、間違いなくルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827年)であった。ベートーヴェンはおそらく当時の日本で最も多く作品が演奏された作曲家であっただろうし、南葵楽堂の演奏会でも最も頻繁に取り上げられていた。徳川頼貞はベートーヴェンにまつわる資料を積極的に蒐集している。そのなかの最重要資料のひとつが、ベートーヴェンの自筆書簡(収蔵番号L-1)である。

この書簡はライプツィヒの音楽出版社C. F. ペーターズに宛てた内容で、日付や

署名のない下書きである。約1世紀の間日本にあったためか、世界のベートーヴェン研究のなかでは忘れられてしまったようで、1906～08年に刊行されたA. C. カリシャー編『ベートーヴェン書簡全集』(南葵音楽文庫も全5巻を所蔵)においては1024番という番号で収録されていたものの<sup>(1)</sup>、現在のベートーヴェン研究で定本とされるS. ブランデンブルク編『ベートーヴェン全往復書簡』<sup>(2)</sup>においては言及がない。実際に送られた書簡は1825年11月25日付けで、作曲家の甥にあたるカールが清書し、作曲家は文末に署名のみしている。この清書は、現在ボンのベートーヴェ

(1) Alfred Christlieb Kalischer, ed., *Beethovens sämtliche Briefe* (Berlin: Schuster & Löffler, 1908), vol. 5, p. 48-49, no. 1024. 併せて以下の文献も参照。『ベートーヴェン百年忌記念會圖書陳列目録』南葵音楽図書館, 昭和2, p. 19. 遠藤宏「南葵文庫」音楽史話『音楽』3巻5号(アポロ出版, 昭和23.6), p. 36.

(2) Sieghard Brandenburg, ed., *Ludwig van Beethoven: Briefwechsel Gesamtausgabe* (Munich: G. Henle, 1996-).

ン・ハウスが所蔵しており、ブランデンブルク編『ベートーヴェン全往復書簡』には2093番として掲載されている<sup>(3)</sup>。

ベートーヴェンは、1822年にペータース社から作曲の依頼を受けた。同年7月6日付けのペータース社宛ての書簡において、ベートーヴェンはピアノ独奏用のバガテル数曲と弦楽四重奏曲について言及、報酬額を提案し、その報酬のなかには若干の歌曲や行進曲も含まれようとして記している<sup>(4)</sup>。この書簡のなかで、ベートーヴェンは実際の作曲がどの程度まで進んでいるかは明言していないものの、最晩年の1826年に出版される5曲の弦楽四重奏曲のひとつ(第12番 変ホ長調 作品127か)に着手していることを示している点で興味深い。

同年8月、ペータース社から360フロリンの報酬前渡しがおこなわれた。その時点で前渡し金は、3曲の歌曲、4曲の行進曲、4曲のピアノのためのバガテルの報酬ということになっていた。しかし翌年2月にペータース社は、ベートーヴェンが届けた作品は受け入れがたいとして返却、別の作品を求めた。1824年12月12日付けのペータース社宛ての書簡のなかで、ベートーヴェンは他の作品を示唆しており<sup>(5)</sup>、実際に同時期のスケッチ帳には、「ペータース社のための四重奏曲」というメモ書きとともにハ長調の作品の断片が書き付けられている<sup>(6)</sup>。ただしこの楽句が後に用いられることはなかった。

その後ベートーヴェンは、ペータース社に対して弦楽四重奏曲の出版を何度ももちかけ、それをもって前渡し報酬に見合うものとしようとした。その試みの最後となったのが、1825年11月25日に清書が送られたこの書簡であった。

私が四重奏曲を提示したとき、あなたの同僚からのお返事は明確ではありませんでした。貴殿の最近の2通の書簡もまたそうです。貴殿が私に提供された360フロリンの代価として新作の四重奏曲を受領すると約束すれば、すぐに1曲を受け取るでしょう。(清書された書簡より)

ベートーヴェンは、長い間前渡し金の手元にあるままなので、直ちに弦楽四重奏曲を手に入れるか、返金するかを選ぶようにとペータース社に伝えたのである。ここで「新作の四重奏曲」といっているのは、同年作曲の弦楽四重奏曲 第13番 変ロ長調 作品130(なおその終楽章は後に作品133として切り分けられる《大フーガ》であった)を指している。

実際に送られた書簡には書かれていないが、南葵音楽文庫所蔵の下書きによれば、このときベートーヴェンは他の弦楽四重奏曲も完成させており、連作の「最後の曲」(第15番 イ短調 作品132を指すのであろう)を提案すべきか迷っている。また言い回しを考えるとともに、出来映えに対する自負心や、自作への報酬が高額になっているとするアピールも文章に織り込もうとしていた。それとともに、売れそうな作品しか受け取ろうとしない出版社への苛立ちも——ここだけフランス語で——書き付けている。清書された簡潔で事務的な文面に至る前の作曲者の思いが、南葵音楽文庫に残る下書きからは読み取ることができよう。

しかし、ベートーヴェンの心中とは裏腹に、ペータース社の態度は、弦楽四重奏曲に全く興味を示さない点では一貫していた。ベートーヴェンの最後の提案も結局は拒まれて、彼は翌12月に前渡し報酬を返金したのだった。結果として、ベートーヴェンの生涯を通じてペータース社からの作品

(3) 前掲書, vol. 6, p. 187-188, no. 2093.

(4) 前掲書, vol. 4, p. 508-509, no. 1478.

(5) 前掲書, vol. 5, p. 394-395, no. 1910. この自筆書簡は武蔵野音楽大学が所蔵している(A-E-4)。

(6) Berlin: Staatsbibliothek, Artaria 205, 4, S. 28f.

出版は一度もなく、ペーターズ社の他社にないベートーヴェン関連の出版物は、同社に宛てたベートーヴェンの書簡集<sup>(7)</sup>のみであった。

ところで、南葵音楽文庫所蔵のベートーヴェンの書簡の下書きについて、ベートーヴェンの真筆であるとの鑑定や、その入手についての情報が記されていたと思われる文書があった。この下書きに付されていたはずの「レオ・リープマンズの意見」である。

“With opinion of Leo Liepmanns”  
このような記載が、1970年発行の『蔵書目録（貴重資料）』に見られる<sup>(8)</sup>。「レオ・リープマンズの意見」なる文書が、目録の原稿作成時点で存在したことは疑いない。しかし現在の南葵音楽文庫からは散失してしまったらしく、1970年代に作成されたマイクロフィルムを見ても、書簡本体はガラスに挟まれて額装され、「意見」はマイクロフィルムに残っていない。そのため、現在この「意見」がどのような内容であったかは確認できない。

1967年に開催された「特別公開 南葵音楽文庫」展の図録は、資料の解説本文中に「意見」についての言及はないものの、巻末に掲載されている欧文の展示資料リストには、以下の記載が見いだせる。  
“Beigefügte Gutachtung durch Leo Liepmannssohn, Antiquariat, Berlin (14 VII 1926)”<sup>(9)</sup> ここから、「レオ・リー

プマンズの意見」とは、正しくは「ベルリンの古書肆レオ・リープマンズゾーンによる添付鑑定書」であったと分かる。

レオ・リープマンズゾーン（1840～1915年）は、ベルリンで古書店を営み、愛書家の間ではとくに音楽関係の稀覯書、学術書や楽譜の初版本、自筆や筆写楽譜によって注目を浴びる存在で、1893年からベルリンのベルンブルガー通り14番地に店舗をかまえていた。彼の没後は同店で働いていたオットー・ハース（1874～1955年）がリープマンズゾーンの名前を残して経営を引き継ぎ、古書販売目録を次々に発行した。ベルンブルガー通りの店を引き払う1935年までに、販売目録は238号を数え、ほかにも多数のオークション目録を発行したという。とくに第一次大戦後は自筆資料の販売に注力するとともに、その販売目録を学術的に極めて信頼おける水準にまで高めた。その陰には、ゲオルグ・キンスキーやヨハネス・ヴォルフといった当時の優れた音楽学者の協力があつた<sup>(10)</sup>。

南葵音楽文庫に残された書簡下書きに付されていたのは、オットー・ハース時代の鑑定書となる。その文面を確認できないのは残念であるが、学術的な信頼性は高いといえるであろう。鑑定書の日付は、1926年7月14日である。南葵音楽文庫関連資料のなかには、タイプ打ちの『南葵音楽図書館所蔵 1926～27年ドイツで購入し

(7) L. van Beethoven: Seine an den Verlag von Hoffmeister und Kühnel, später C. F. Peters, Leipzig, gerichteten Briefe. Verzeichnis seiner in der Edition Peters erschienenen Werke (Leipzig: C. F. Peters, [n. d.]).

(8) 大木コレクション・南葵音楽文庫編『蔵書目録（貴重資料）』東京音楽文化センター, 1970.11, p. 1.

(9) 『南葵音楽文庫特別公開』読売新聞社, 1967, p. 154.

(10) リープマンズゾーンと音楽学者たちとの協力関係については、文献上は確認しにくい。しかし刊行された販売目録における資料記述は詳細をきわめる。ゲオルグ・キンスキー（1882～1951年）はベルリンの楽譜店や古書店で働いた後、1908年にプロイセン国立図書館の助手となり、翌年から27年まではケルンのハイヤー音楽史博物館に学芸員として勤務した。晩年に編纂したベートーヴェンの作品主題目録で知られる。ヨハネス・ヴォルフは（1869～1947年）は中世音楽の研究で多大な業績をあげ、プロイセン国立図書館で1915年から古楽部門部長、27年から音楽部門全体の部長となった。南葵音楽文庫には本稿で扱っているベートーヴェンの自筆書簡（収蔵番号 L-1）のほか、プロイセン国立図書館の便箋に書かれたこの書簡の読み下し（収蔵番号 L-2）が所蔵されており、この資料を作った人物がヨハネス・ヴォルフであったことは、南葵音楽図書館の『ベートーヴェン百年忌記念会 圖書陳列目録』の記述（p. 19）から明らかである。1927年に開催されたこの「記念会」ではベートーヴェンのこの自筆書簡が国内で初めて展示され、出品目録には書簡の読み下し文も掲載されている。

(11) *Catalogue of the Rare Books in the Nanki Music Library Bought in Germany 1926-27*. 日本近代音楽館遠藤宏文庫蔵 EN555.

た稀観書目録』が残されている<sup>(11)</sup>。そこに手書きで付された独文タイトルは、購入地をドイツではなくベルリンと特定している。1927年には当地で、ドイツ出張中であつた田村寛貞<sup>(12)</sup>を介し、南葵音楽図書館は音楽学者マックス・フリートレンダーの貴重な蔵書を受け入れてもいる。この一連の、ベルリンにまでミッションを送った積極的な蒐集活動によって、この書簡下書

きはコレクションに加わつたものと思われる。徳川頼貞の意を受け、田村寛貞がベルリンのフリートレンダーのもとを訪問した前後に、ポツダム広場に近いベルンブルガー通りのリープマンズゾーンの店の奥で、オットー・ハースの鑑定書とともに、この自筆書簡は田村へ受け渡されたのであろう。(美山良夫・篠田大基)

### 資料全訳

弦楽四重奏曲 1 曲が貴殿のために用意できております。この作品を 360 フロリン C.M.<sup>(13)</sup>あるいは 80 ドゥカーテンで引き取るという書簡をいただければ、即座にお送りいたします。現在私の作品には今までにない高額の報酬が支払われるようになっております。ちなみにこの一連の出来事の原因は貴殿ご自身にあります。貴殿の書簡を読めば、貴殿が以前何を求めていたか、そして私がお送りした物が求められていた通り<sup>(14)</sup>のものだったことが分かります。ちなみに私が貴殿に対して取り繕いをしているのではないことを、この弦楽四重奏曲が教えてくれることでしょう。それどころか、これは私の最も親しい友人に渡すほどの作品なのです——

どうかお急ぎくださるようお願いいたします。そうしないと、私には 360 フロリン C.M. を返金するほかありません。

# いくつもの手直しが語っている——真実です——

そうでなくとも、私が新たに完成させた作品を色々な方がほしがっているのが困惑しているのです。ですが、この曲単独ではないほうが良いとも言われています。どこにでもやはり礼儀はあるものです。本当にこれは、長い間待っていただいた貴殿に対する配慮によるものなのです。ですが、私がこの瞬間、すでに完成している連作から、この弦楽四重奏曲だけを切り離すのかは、貴殿の決断によるのです。(ここで最後の曲を提供した方が良いでしょうか?) (もちろん素晴らしい、とても素晴らしい)

えげつない商売人め。<sup>(15)</sup>

ちなみに、私が借入れのカタを付けるような代物を送るのではないかという不信は無用です。私の芸術の名誉にかけて、もし私にふさわしい芸術作品を手になければ、私のことを恥知らずとけなしていただいてかまいません——

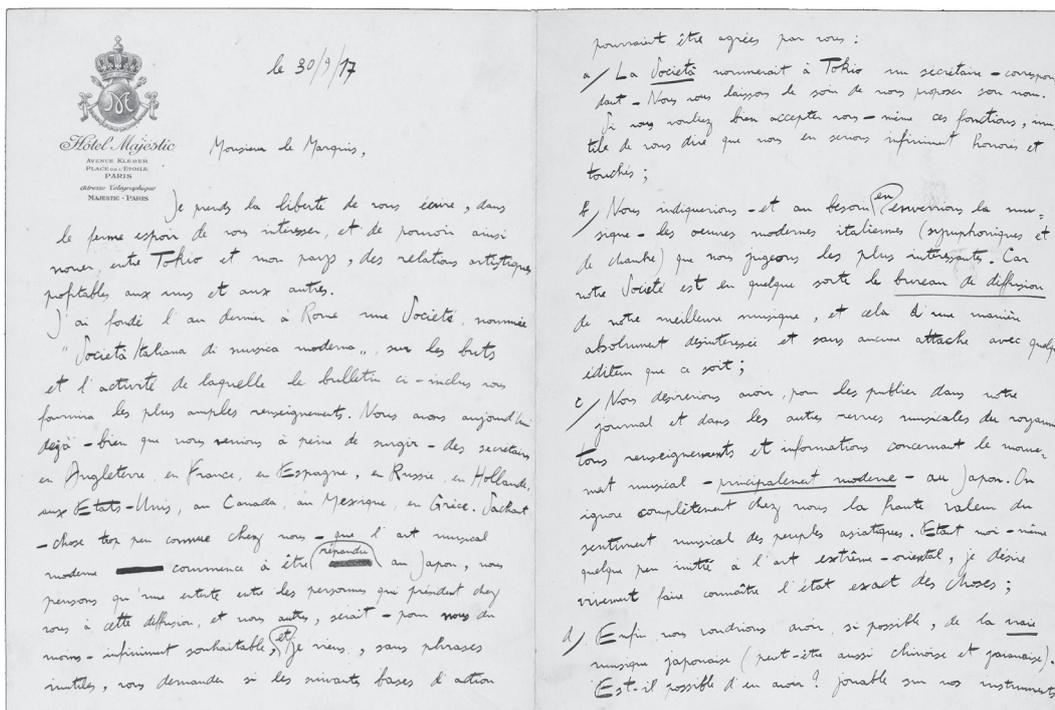
(本訳は、2013 年に読売日本交響楽団が作成した訳文に未定部分を補つたものである。)

(12) 田村寛貞 (1883 ~ 1934 年) は 1916 年から東京音楽学校教授を務め、1926・27 年には語学教育視察と音楽視察のためドイツに出張した。南葵音楽事業部の評議員でもあつた。

(13) C.M. は協定通貨 Conventionsmünze の意。当時のオーストリアでは同じフロリンという単位で、協定通貨 (C.M.) とウィーン通貨 Wiener Währung (W.W.) という 2 種類の通貨が流通していた。

(14) 傍点は原文では下線で強調されている箇所。以下同様。

(15) この部分のみフランス語。



## カゼッラ自筆書簡

Casella, Alfredo. Letter, 17 Sept. 30, Paris, to "Monsieur le Marquis".

4p. on 1 l. 18 × 14cm. Holograph signed (収蔵番号 L-3)

ベートーヴェンの自筆書簡に代表される南葵音楽文庫の書簡コレクションに、徳川頼貞と同時代の音楽家の書簡はほとんど含まれていない。頼貞は海外の多くの著名な音楽家と親交を結んでいたが、彼ら——たとえばニキシュ、プッチーニ、ヘンリー・ウッドら——からの書簡は図書館資料には組み入れられず、頼貞の手許に残されたという<sup>(1)</sup>。近現代の音楽家で唯一、自筆書簡が南葵音楽文庫に収められたのが、イタリアの作曲家でピアニスト、指揮者、評論家としても活躍したアルフレード・カゼッラ (1883～1947年) であった。カゼッラの名は、頼貞の『薈庭樂話』『頼貞隨想』などの著作には登場しない。書簡の文面からも窺えるように、恐らく頼貞とカゼッラ

に直接の面識はなく、それゆえ彼の書簡は頼貞の個人コレクションではなく、図書館の所有になったと想像される。

カゼッラの書簡 (所蔵番号 L-3) はフランス語で、パリのマジェスティック・ホテル Hôtel Majestic<sup>(2)</sup> の便箋に4ページにわたって書かれている。書簡に記された日付は1917年9月30日。文面から、カゼッラがロンドンからローマに戻る途上でパリに立ち寄り、宿泊したホテルでこの書簡をしたためたことが推察される。当時、カゼッラはローマのサンタ・チェチーリア音楽院 (この書簡への返信の宛先に指定されている) のピアノ科教員を務めており、1917年にはマリピエロやレスピーギ、ピツェッティといった同年代のイタリア人

(1) 遠藤宏「『南葵文庫』音楽史話」『音楽』3巻5号 (アポロ出版, 昭和23.6), p. 36。

(2) 便箋には "Hôtel Majestic / Avenue Kléber / Place d'Etoile / PARIS" とある。マジェスティック・ホテル (今日のペンシユラパリ) は1908年にオープンしたパリの高級ホテルで、ブルースト、ジェームズ・ジョイス、ピカソ等が宿泊したことと知られる。1928年にガーシュウィンが『パリのアメリカ人』を作曲したのも、このホテルにおいてであった。

作曲家と協力して「全国音楽協会 Società Nazionale di Musica」を創設している。この組織はすぐに改称されて、書簡中に登場する「イタリア現代音楽協会 Società Italiana di Musica Moderna」(SIMM)となり、ラヴェルやストラヴィンスキー等、同時代の先進的な音楽をイタリアに紹介するとともに、イタリアの現代音楽を国内外に発信する活動を続けた。

紀州徳川家に送られたカゼッラの書簡は、このSIMMの活動と連動している。書簡のなかでカゼッラは、SIMMの東京支部の設置を希望し、イタリアの最新の芸術音楽を発信しようとするとともに、日本やアジアの音楽についても情報を得ようとしている。だがこの書簡の最大の眼目は、追伸として書かれているSIMMの活動自体の広報にあったと考えてよい。この書簡は、近代イタリア音楽を世界に向けて発信しようとするイタリア現代音楽協会とそのオーガナイザーであるカゼッラの精力的な活動の一端を伝える資料と言えよう。

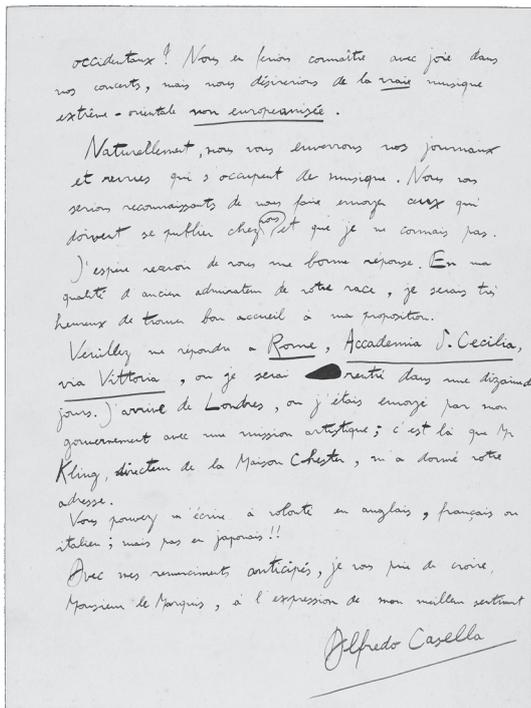
書簡の文面によれば、この手紙にはSIMMの機関紙『アルス・ノヴァ *Ars Nova*』<sup>(3)</sup>が同封されていたらしい。現在この書簡を入れていた封筒や同封されていたはずの『アルス・ノヴァ』は失われており、同紙第2号以降についても南葵音楽文庫に所蔵を確認することはできない。この書簡に対して徳川頼貞が、あるいは南葵文庫がどのような返信を送ったのかもまた明らかではない。ただ、南葵音楽文庫の旧蔵書にはイタリアの音楽雑誌がいくつか含まれており、それらがこの書簡をきっかけにSIMMから送られた雑誌であった可能性はある。

SIMMは資金難などの理由から1919年に一旦消滅したものの、カゼッラは1923年に改めて「イタリア新音楽協会 *Corporazione delle Nuove Musiche*」を立ち上げる。これが後の「国際現代音楽協会」イタリア支部へと発展してゆくことになる。(近藤秀樹・篠田大基)

---

(3) SIMMの機関紙『アルス・ノヴァ』(「新芸術」の意)は1917年7月創刊。カゼッラが書簡に同封したのはこの号であったと考えられる。同紙第2号の刊行は1917年12月1日であった。

(4) 1917年時点で紀州徳川家の侯爵位にあったのは頼貞の父の頼倫であるが、書簡の内容は明らかに当時侯爵世子であった頼貞に向けて書かれている。カゼッラに紀州徳川邸の住所を教えたチェスター社のクリング(注5、6参照)と交流があったのも頼倫ではなく頼貞であっただろう。



## 資料全訳

1917年9月30日

侯爵様<sup>(4)</sup>

失礼を顧みずお手紙を差し上げることにいたしましたのは、このお手紙が貴方の関心と呼び覚まして、東京と私の国との間に、双方にとって有益な芸術上の関係を結ぶことにつながると固く信じているからです。

昨年、私はローマで「イタリア現代音楽協会」なる団体を立ち上げました。この協会の目的ならびに活動の詳細については、同封した協会の機関紙をご覧ください。私たちは今日、すでに——できたばかりの協会ではありますが——イギリス、フランス、スペイン、ロシア、オランダ、アメリカ合衆国、カナダ、メキシコ、ギリシャに支部を置いております。私たちの間ではごく僅かのことしか知られておりませんが、日本においても近代的な音楽芸術が広がりはじめていると伺いまして、こうした普及の動きをリードしてお

られる方々と私どもとの間に協調関係を持つことができれば、——少なくとも私たちにとっては——たいへん望ましいことだと考えた次第です。そこで私としては、次のような基本的な活動を貴方に受け入れていただけるものかどうか、率直にお伺いしたく思います。

a. 協会は東京に支部長、特派員を置きたいと思いますが、どなたかよい方がおられるようでしたらお報せください。もし貴方ご自身にこの役職をお引き受けいただけるなら、もちろん私たちにとってたいへんな栄誉であり、深く感謝いたします。

b. 私たちは、もっとも興味深いと判断したイタリアの現代の作品（交響的作品や室内楽）をお報せし、必要があれば楽譜をお送りします。といいますのも私たちの協会は、私たちの国の最良の音楽を普及させる一種の「広報課」だからですが、ただ、この活動は完全に非営利的なもので、特定の出版社とは関係がありません。

c. 私たちは、日本における音楽の運動——原則として現代の——に関するあらゆる知識、情報を得て、これを協会の機関紙や、我が国の他の音楽雑誌のなかで公表したいと考えています。アジアの人々の音楽的感情の真価 la haute valeur については、私たちの間ではまったく何も知られていません。私自身、極東の芸術については僅かしか知らず、ぜひとも正確なところを人々に知らせたいと願っております。

d. 最後に、私たちは、もし可能であれば、真の日本音楽（恐らくは中国やジャワの音楽もまた）を手に入れたいと望んでおります。私たち西洋人の楽器で演奏可能なものがありますでしょうか？ もしあれば、私たちは喜んで、私たちのコンサートでそれらを紹介いたします。ただし、私たちが欲しているのは真の極東の音楽であって、西洋化されていないものです。

当然のことながら、私たちは、音楽を扱った我が国の新聞や雑誌を、貴方にお送りいたします。貴国で出版されることになっている雑誌で、私の知らないものをお送りいただければさいわいです。

きっとよいお返事をいただけるものと期待しております。私の提案を快く受け入れていただけるなら、あなた方日本人に対して以前から尊敬の念を抱いている私としては、喜びこれに勝るものではありません。

お返事は、ローマ、ヴィットーリア通りのサンタ・チェチーリア音楽院にお願いいたします。10日ほどのうちにそこへ戻ります。私はロンドンに行ってきたところで、イタリア政府から芸術上の任務で派遣されておりましたが、当地でチェスター社<sup>(5)</sup>のクリング氏<sup>(6)</sup>から貴方の住所を伺いました。

お返事は、英語でもフランス語でも、あるいはイタリア語でも結構です。ただし日本語だけはご勘弁ください！

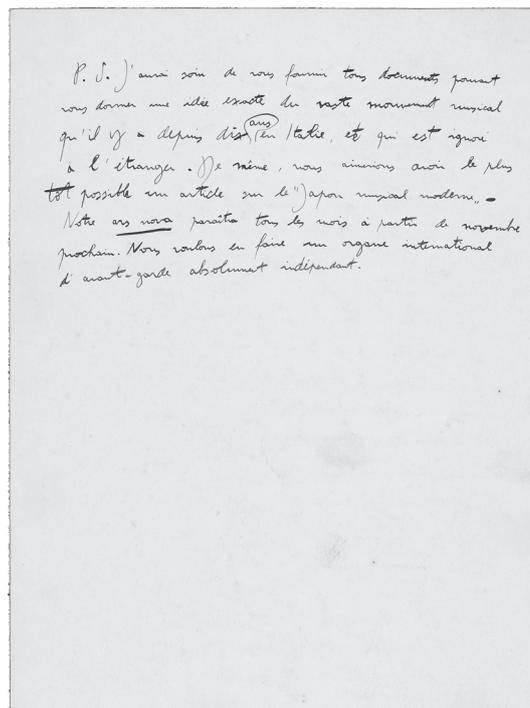
お返事にあらかじめ感謝いたします。

敬具。

アルフレード・カゼッラ

追伸：この10年間、私たちがイタリアで行ってきた音楽活動は、他国にはあまり知られておりませんので、これを正しく理解していただくのに役立つような参考資料はすべてお送りするようにします。また、できるだけ早いうちに「日本音楽の今」についての記事を入手したいと思います。私たちの機関紙『アルス・ノヴァ』は、今年の11月から毎月刊行される予定です。私たちはこれを、完全に独立した、前衛芸術の国際的機関にしたいと考えております。

(近藤秀樹 訳)



(5) イギリスの音楽出版社。ストラヴィンスキー（スイス時代の作品）、プーランク、ファリャなど、同時代の作曲家の作品を多数出版した。1915年にカゼッラの歌曲《人生への別れ *L'Adieu à la vie*》（タゴール詩、ジッド仏訳）を、1918年にピアノ曲《2つのコントラスト *Deux Contrastes*》を出版している。南葵文庫音楽部は、現存する発注リストによると、1916年12月3日から翌年末までの間に少なくとも6回、合計33点の楽譜をチェスター社に注文していた。

(6) オットー・マリウス・クリング Otto Marius Kling (1866～1924年)。第一次世界大戦前にチェスター社を買収した。

## 南葵音楽文庫収蔵の《メサイア》楽譜

南葵音楽文庫の蔵書の中核をなすのは、ウィリアム H. カミングス (1831 ~ 1915 年) が収集した楽譜や書籍である。それらは、多方面に及んでおり、一見しただけでは、何らかの方針に従って収集されたようには見えない。しかしその収集には、明らかにカミングスの音楽史家、演奏家としての関心や活動が反映されており、一定の方向性や軸となっているジャンル、あるいは作品を確認することができる。例えば、ヘンリー・パーセル (1659 ~ 95 年) やジョージ・フレデリク・ヘンデル (1685 ~ 1759 年) といったイギリス出身の音楽家やイギリスと深い関わりをもった音楽家たちの作品の楽譜は、他の音楽家たちの作品と比較して楽譜の収蔵数や種類が驚くほど多い。

ここでは、そうした楽譜の中からカミングスがとりわけ強い関心をもって収集したと考えられる、ヘンデルのオラトリオ《メサイア》(1741 年作曲) の印刷楽譜 11 点について紹介しよう<sup>(1)</sup>。南葵音楽文庫に収蔵されている楽譜の中でひとつの作品の楽譜として最も数が多いのは、ヘンデルの《メサイア》である<sup>(2)</sup>。

カミングスが収集した《メサイア》の楽譜 11 点は、3 つのタイプに分類することができる。すなわち【1】オリジナル版スコア、【2】モーツァルト加筆版スコア、【3】ヴォーカル・スコア、及び家庭用編曲版である。オリジナル版スコアは、基本的にヘンデル自身の楽譜に従った版であり、モー

ツァルト版スコアは W. A. モーツァルト (1756 ~ 91 年) が加筆した版<sup>(3)</sup>である。ヴォーカル・スコアは、管弦楽の部分をピアノなどの鍵盤楽器で演奏できるようにまとめたもので、しばしば独唱や合唱などの歌の練習に使われる。また家庭用編曲版とは、家庭などで個人的に楽しむためにチェンバロ独奏用に編曲したり、そこに歌を重ねることができるようにしたものである(楽譜によっては、ヴォーカル・スコアと家庭用編曲版の機能が組み合わされているため、ここでは両者を区別せずに扱うことにする)。

### 【1】オリジナル版スコア

**Messiah, a Sacred Oratorio in score with all the Additional Alterations Composed in the Year 1741. By G. F. Handel. Dr. Arnold's Edition. 219p. 29x39cm. 図版 1 ~ 2 (収蔵番号 N-4/3)**

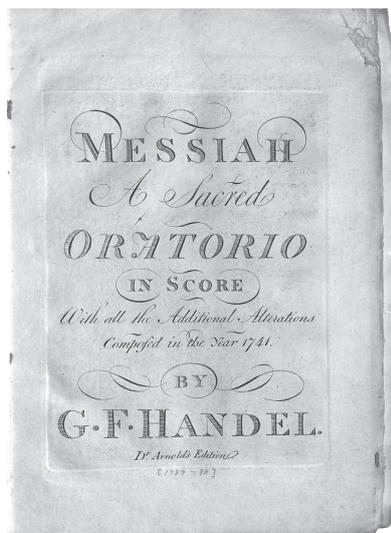
1741 年に作曲された際の楽譜に従ったオリジナル版スコア (1787 ~ 88 年出版) であるが、ヘンデルが初演 (1742 年) 以降の演奏に際して用いたヴァージョンも収録されている。歌詞は英語。1780 年頃出版。校訂者はイギリスで主にオペラ作曲家として活躍したサミュエル・アーノルド (1740 ~ 1802 年)。

**Messiah an Oratorio in Score, As it was Originally Performed composed by G. F. Handel, to which are added His Additional Alterations 1784.**

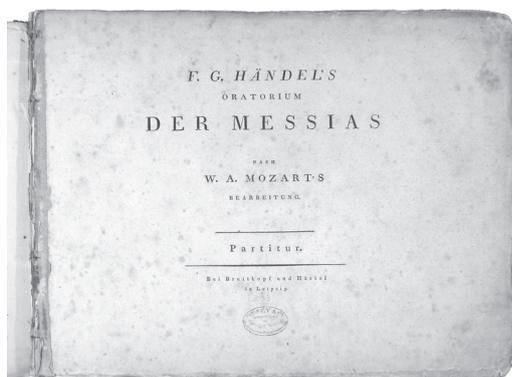
(1) 南葵音楽文庫には、《メサイア》のこれらの印刷楽譜以外にヘンデルの写譜者だったジョン・クリストファー・スミス (1712 ~ 95 年) によって書かれた "Handel's Songs, Ms. Copy by J. C. Smith & belonged to William Sackson of Exeter" (収蔵番号 N-3/3) と題された手写楽譜集が収蔵されている。

(2) 《メサイア》をはじめ、ヘンデルの印刷楽譜の全体像については、*The Catalogue of Printed Music in the British Library to 1980* (London, 1981-1987) のヘンデルの項を参照。また《メサイア》の楽譜の種類については、John Tobin, *Handel's Messiah* (London, 1969), p. 11-34 を参照。

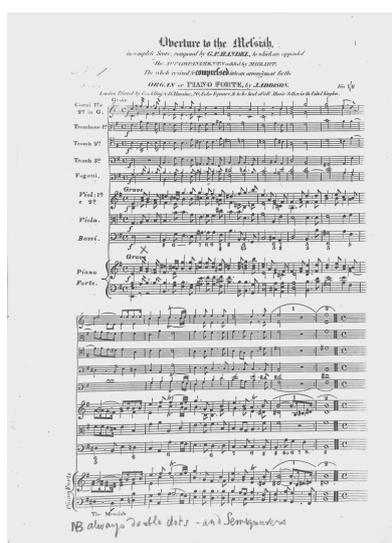
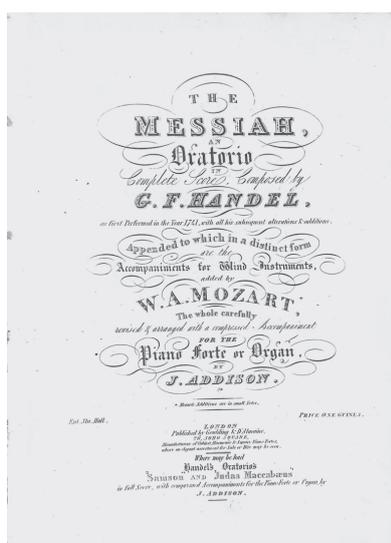
(3) ヘンデルに強い関心をもっていたウィーン宮廷図書館の館長ヴァン・スヴィーテン男爵が、1789 年に私的な音楽サークルのためにモーツァルトに依頼して行われた編曲。歌詞のドイツ語訳は男爵によって準備され、モーツァルトはヘンデルの原曲に管楽器を加え、さらに部分的な改作を行った。なお後述するように、モーツァルト版《メサイア》のイギリスにおける初演は、1805 年開催のバーミンガム音楽祭においてである。



[1] オリジナル版スコア (1780年頃出版)  
 (左)[図版1]タイトル・ページ (右)[図版2]序曲の冒頭



[2] モーツァルト加筆版スコア (1803年出版)  
 (左)[図版3]タイトル・ページ (右)[図版4]序曲の冒頭



[2] モーツァルト加筆版スコア (1835年頃出版)  
 (左)[図版5]タイトル・ページ (右)[図版6]序曲の冒頭

**188p. 33x25cm. (収蔵番号 N-4/7)**

1742年に初演された際のオリジナル版スコアであるが、ヘンデルが初演（1742年）以降の演奏に際して用いたヴァージョンも収録されている。1784年出版（1767年版の第2版）。

**【2】モーツァルト編曲版スコア**

<sup>[sic]</sup>  
**F. G. Handel's Oratorium Der Messias nach W. A. Mozart's Bearbeitung. Partitur. Leipzig 1803. 108, 95, 48p. 28x37cm. 図版 3～4 (収蔵番号 N-4/5)**

モーツァルト加筆版のスコア。通奏低音のリアリゼーションは記載されていない。歌詞はドイツ語のみ。1803年出版。モーツァルト編曲版《メサイア》の最初の出版楽譜。

**Der Messias. Oratorium von G. F. Handel. Unter Zugrundelegung der Mozart'schen Partitur mit den nothigen Ergänzungen, herausgegeben von Robert Franz. Leipzig, 1884. v, 334p. 34x26cm. (収蔵番号 N-4/6)**

モーツァルト加筆版スコア。歌詞は、ドイツ語と英語が併記されている。1884年出版。カミングスは、このロベルト・フランツ Robert Franz（1815～92年）による校訂版について、誤りが多いことを主な理由に強く批判している<sup>(4)</sup>。

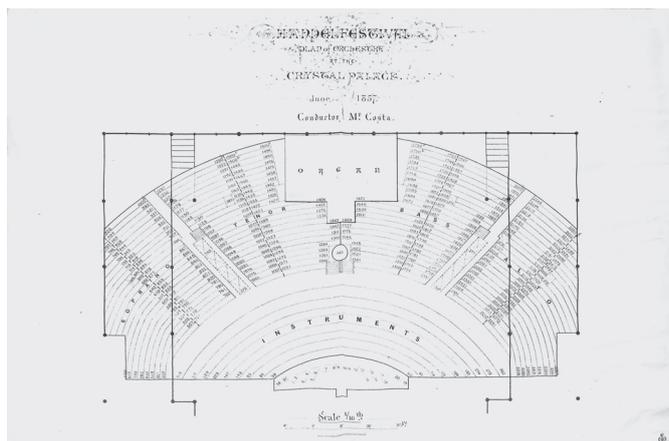
**The Messiah, Oratorio, Complete Score, Composed by G. F. Handel, as first Performed in the Year 1741, with all his subsequent**

**alterations & Additions. Appended whitch in a distinct form are the Accompaniments for Wind Instruments, added by W. A. Mozart, revised & arranged with a compressed. Accompaniment for the Piano Forte or organ, by J. Addison. London. 3, 343p. 38x27cm. 図版 5～7 (収蔵番号 N-4/1)**

モーツァルトが管楽器を加筆した《メサイア》のスコアであるが、弦楽器ための声部をジョン・アディソン John Addison（1766頃～1844年）がピアノ、あるいはオルガン用に書き換えたピアノ伴奏譜が加えられているため、ヴォーカル・スコアとしても使用することができる。モーツァルト加筆版の歌詞は本来の歌詞をドイツ語訳したものであったが、ここでは英語の歌詞が付されている。モーツァルトによる加筆部分は、小さく印刷されている（図版6）。出版年は不明。なお、表紙裏には、「宗教音楽協会 Sacred Harmonic Society」<sup>(5)</sup>が1859年6月15～19日にクリスタル・パレス Crystal Palaceで行った「大ヘンデル祭 The Great Handel Festival」についての新聞記事の切り抜きが、また中表紙には1846年8月1日付け *The Musical Times* 紙の《メサイア》のついでの記事、そして1857年6月に宗教音楽協会がクリスタル・パレスで「ヘンデル祭 Handel Festival」を開催した際のオーケストラと合唱の着席表が貼付されている。さらに裏中表紙にも日付は不明であるが、1858年の新聞記事が糊付けされている。

(4) 南英音楽文庫の収蔵資料《ヘンデルの生涯 Life of Handel》（収蔵番号 M-3/22。通称「スクラップブック」と呼ばれている。ヘンデルに関する新聞の切り抜きなどが集められた雑集）に含まれる、カミングスによる記事のおそらく下刷り（William H. Cummings, Handel's "Messiah"、及び William H. Cummings, "Mr. Prout and His Critics"。両者ともに掲載先など不明）。なお、同スクラップブックには、エベニーザー・ブラウトによるロベルト・フランツの校訂楽譜に対する記事（Ebenezer Prout, "Robert Fran's Edition of the Messiah", *Monthly Musical Record*, Vol. XXI, no. 244, 1891 及び Ebenezer Prout, "Robert Franz and His Critics", *Monthly Musical Record*, vol. XXI, no. 245, 1891）も含まれている。

(5) 「宗教音楽協会 Sacred Harmonic Society」は、ロンドンで1832年から88年に活動した音楽愛好家による団体で、主にオラトリオをレパートリーとした。カミングスは82年からその合唱団の指導、85年からは指揮者を務めた。



[図版7]クリスタル・パレスにおける  
オーケストラと合唱団の配置図

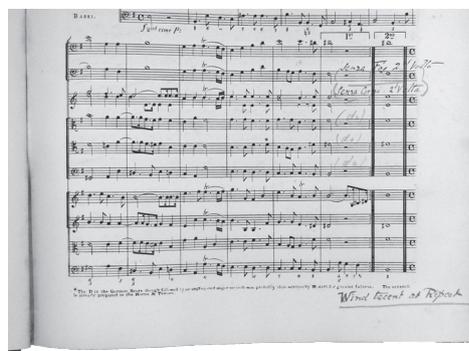
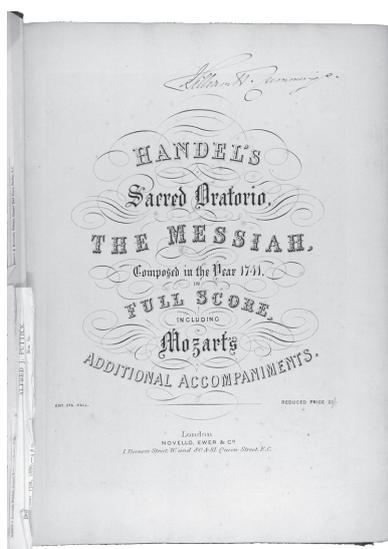
**Handel's Sacred Oratorio, The Messiah in full Score, including Mozarts Additional accompaniments. London, Edited and the Additional Accompaniments largely re-written, by Ebenezer Prout. iv, 297p. 39x29cm. 図版8～9 (収蔵番号 N-4/2)**

モーツァルト加筆版スコアであるが、さらにエベニーザー・プラウト Ebenexer Prout (1835～1909年) による加筆、修正が行われている。歌詞は英語のみ。表紙裏側から数ページにわたって、それぞれ1884年12月19日金曜日、1885年12月18日金曜日、1886年12月17日金曜日、1887年12月22日木曜日に行われた宗教音楽協会によるメサイア演奏

会、そしてカミングスの指揮による《メサイア》の演奏会の予告チラシが糊付けされている。また、カミングスが指揮に使用する際に用いたことを示す書き込みが多数見られる（例えば、序曲の前半繰り返しには「Wind tacet at Repeat 繰り返し後、管楽器は休止」という書き込み）。出版年はおそらく1902年。

**The Works of Handel. The Handel Society. The Messiah. 2v. 593p. 39x29cm. (収蔵番号 N-4/8, N-4/9)**

ピアノ・リダクション付きモーツァルト編曲版スコア。モーツァルトによる加筆部分は、ヘンデルのオリジナル部分の上に若干小さい音符を用いて記譜されている。1850年出版。ヘンデル協会による出版で、ヘンデルの研究を行っていたエドワード・フランシス・リンボルト (1816～76年) による1850年5月30日付の序文が付されている。

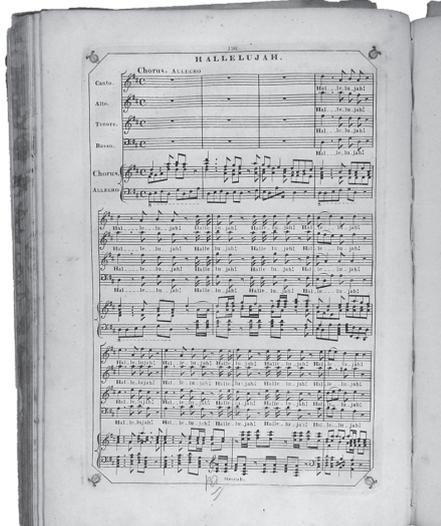
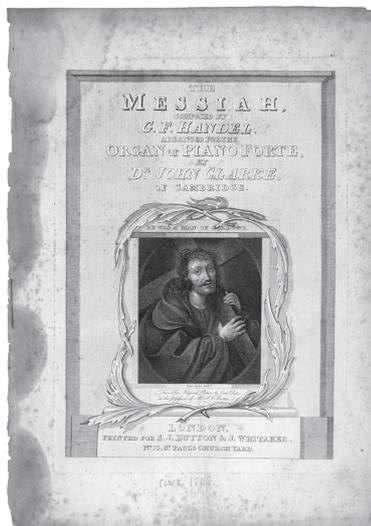


[2] モーツァルト加筆版スコア (プラウト校訂。1902年出版)

(左)[図版8]タイトル・ページ (右)[図版9]序曲におけるカミングスの書き込み

**【3】ヴォーカル・スコアと家庭用編曲版**  
**The Messiah composed by G.F. Handel, arranged for the Organ or Pianoforte, Dr. John Clarke of Cambridge. London. 213p. 37x28cm. 図版10~11(収蔵番号 N-4/4)**

ヴォーカル・スコア。ピアノあるいはオルガンによる伴奏は、新たに作曲されたものではなく、弦楽器の声部をそのまま鍵盤に置き換えたものである。歌詞は英語のみ。1808年頃出版。オルガン、あるいはピアノのための伴奏譜は、ジョン・クラーク(1770～1836年)による。



**【3】ヴォーカル・スコア**  
**(1808年出版)**  
**(左)[図版10]タイトル・ページ**  
**(右)[図版11]ハレルヤ・コーラスの冒頭**

**The Overture and Songs in the Messiah for the Harpsichord or Pianoforte composed by MR. Handel. London 及び Eight Grand Chorusses from Mr. Handel's Oratorio of the Messiah Adapted for the Organ or Harpsichord and Voice. London の合本 24p. 34x24cm. 図版 12 (収蔵番号 N-6/41)**

されている。チェンバロ左手は、数字付き通奏低音の声部となっているが、オリジナル版にはなかった数字が書き加えられている。出版年は不明。



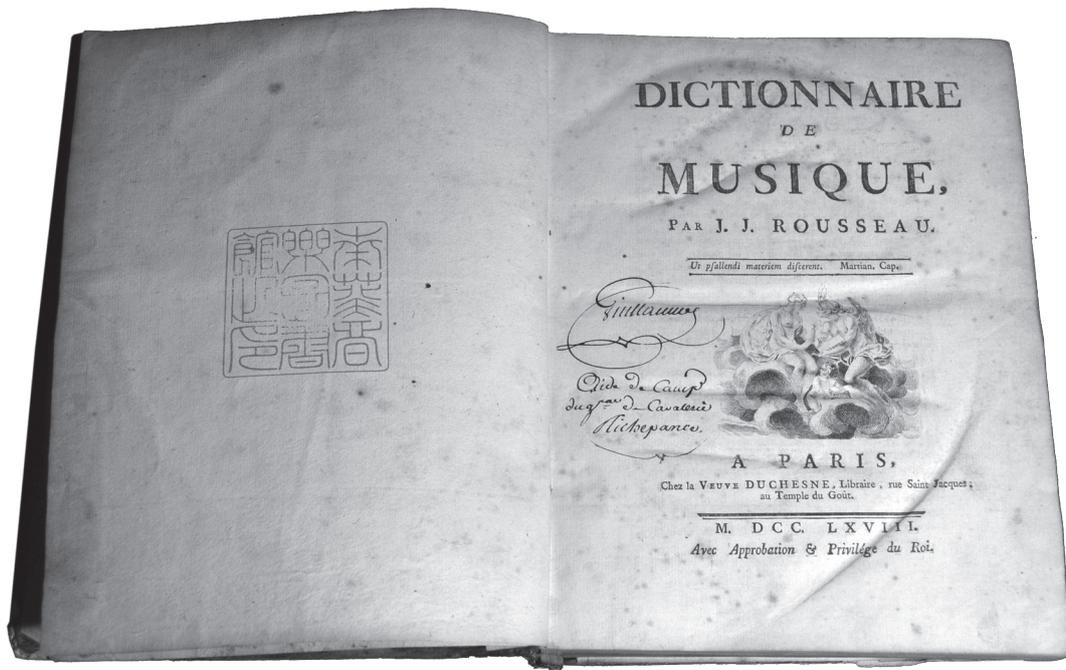
**[図版12]《メサイアの序曲とアリア集》からハレルヤ・コーラス**

《メサイアの序曲とアリア集》。前半は《メサイア》から序曲とアリア19曲を、後半は《メサイア》から代表的な合唱曲9曲をチェンバロ独奏用に編曲し、歌詞を付した選集。家庭などでの演奏を想定したものだろう。合唱では、チェンバロ独奏に合わせて主旋律を歌うことができるように工夫

**The Messiah, an Oratorio composed by Mr. Handel, for the Voices, Harpsichord, and Violin with the Chorusses in Score. London, 1784. 88p. 25x35cm. 図版 13～14 (収蔵番号 N-6/42)**

アリアはチェンバロ独奏で演奏できるように編曲されており、上声部に歌を重ねることもできるようになっている。合唱は通奏低音伴奏付きのヴォーカル・スコアであるが、通奏低音のリアリゼーションは行われていない。序曲は鍵盤楽器独奏用の編曲





[A] クアトロ版

## ルソー『音楽事典』

1929年に刊行された『南葵音楽事業部摘要』第1は、所蔵資料を紹介する部分の冒頭にジャン＝ジャック・ルソー（1712～78年）の『音楽事典』をあげ、「特にルッソーの『音楽事典』は巴里版の原版を初めゼネヴァ版等四種類も所蔵してある」と記している（p.11）。これらの版は、すべて現在も南葵音楽文庫に蔵されている（以下出版順に記載）。

- [A] 1768年、パリ、Duchesne刊 ix, 548p. in-4° 収蔵番号 M-6/73
- [B] 1781年、ジュネーヴ、2巻 in-12° 収蔵番号 M-1/1
- [C] 1782年、Deux-Ponts, Sanson刊、2巻 in-12° 収蔵番号 M-1/4
- [D] 1793年、パリ、3巻 in-16° 収蔵番号 M-2/1

徳川頼貞は、しばしば資料の扉ページに、購入した場所と年を記している。[B]には、"Raitei 1915 Cambridge"という記載があり、英国留学中に入手していたことがわかる。[A]は、南葵音楽図書館が作成したタイプ打ちの *Catalogue of the rare books in the Nanki Music Library bought in Germany 1926-27* に掲載されており、ベルリンで購入していた。[C]および[D]について、収蔵時期、方法は、

今のところ明らかでない。両者とも、ルソー著作全集として出版されたうちの一部である。

ルソーの『告白』には、多くの音楽への言及があり、彼の音楽への関心や情熱が、人並みはずれた広がりや深さをもっていた事実に驚かされる。自ら作曲した作品、音楽論など音楽への関与は、海老沢敏氏の長期間にわたる探究によって紹介され、氏の数々の論考は『ジャン・ジャック・ルソーと音楽』（2012年）に集成された。『音楽事典』を主題とする章こそないが、同書のなかでもしばしば言及されている。

ルソーは、1749年、ダランベールの依頼により『百科全書』のために音楽関連の項目を執筆することになった。それから約10年間にわたり執筆した項目をもとにしたのが、『音楽事典』である。この間に、ルソーは《村の占師》作曲と初演（1752年）、『フランス音楽に関する手紙』（1753年）という、彼の音楽分野における代表作を生み出している。フランス音楽とイタリア音楽の違いや優劣が議論された、いわゆるブフォン論争とも時代が重なる。

『音楽事典』は、もともとが『百科全書』にむけた執筆であるため、各項目に関する

知見を集約することを第一義としているかのようである。数百ページにも及ぶ項目を独力で執筆したこの事典の項目や記述内容は、今日の音楽事典類とは些か様相が異なる。

一例をあげれば「王立音楽アカデミー Academie Royale de Musique」については「今日においてもまだパリ・オペラ座をあらわす名称。私はこの有名な施設について、王国や世界のすべてのアカデミーは騒音を生み出すものだという以外、何も語らない」と書くにとどめている。「バロック Baroque」の項は、「和声が混乱し、転調と不協和音、硬直した歌唱に満ち、不自然さ、困難なイントネーション、ぎこちない動きの音楽である」と記されている。

このような価値判断を明記していなくても、「重唱」、「アンサンブル」、「転調」など音楽の表情に関連した項目、「旋律の一体性」といった自身の作曲経験に由来する項目、そして「アクセント」、「才能」のように彼の言語研究とつながる項目には、詳細な論述が見られる。他方、「音律」、「旋法」など理論的な事項に関しては、従来の理論的な著作に多くを負っていると思われる。

ルソーの『音楽事典』は、このように彼の時代の、彼が身をおいた立場、なかでも彼の思想や音楽観、音楽経験を色濃く反映している。

1751年に出版された『百科全書』第1巻に、ルソーは19項目執筆した。しかし準備期間がきわめて短く、内容に満足できなかった彼は、出版後ただちに改訂や加筆を始めている。その作業は1764年12月まで続いた。前年の1763年にルソーは『音楽事典』出版をパリの書肆デュシェーヌにもちかけ、脱稿すると直ちに原稿を渡している。

したがって、この『音楽事典』はルソーの音楽観や思想を、『百科全書』以上に克明に映しているし、『百科全書』のテクス

トと比較すれば、ルソーの音楽観などの形成過程を照射できるのではないと思われる。しかし、ルソー研究の膨大な集積のなかでも、また音楽学研究の側からも、このテーマを深耕した研究には、寡聞にしていままで接したことがなかった。

あらためて南葵音楽文庫所蔵の4種を比較すると、巻頭に正誤表を綴り込んだ[A]が、判型が異なる後の刊本でも踏襲されている。[A]こそ、ルソー自身の原稿から版を組んだ唯一の出版である。その表紙見返しには、ベルリンで購入した本書が到着してから1932年の南葵音楽図書館閉鎖までの5年間に作成されたであろうメモが貼り付けられている。『音楽事典』の初期刊本リストに丸印が4つあり、横には「○印は当館に有り」と付記されている。

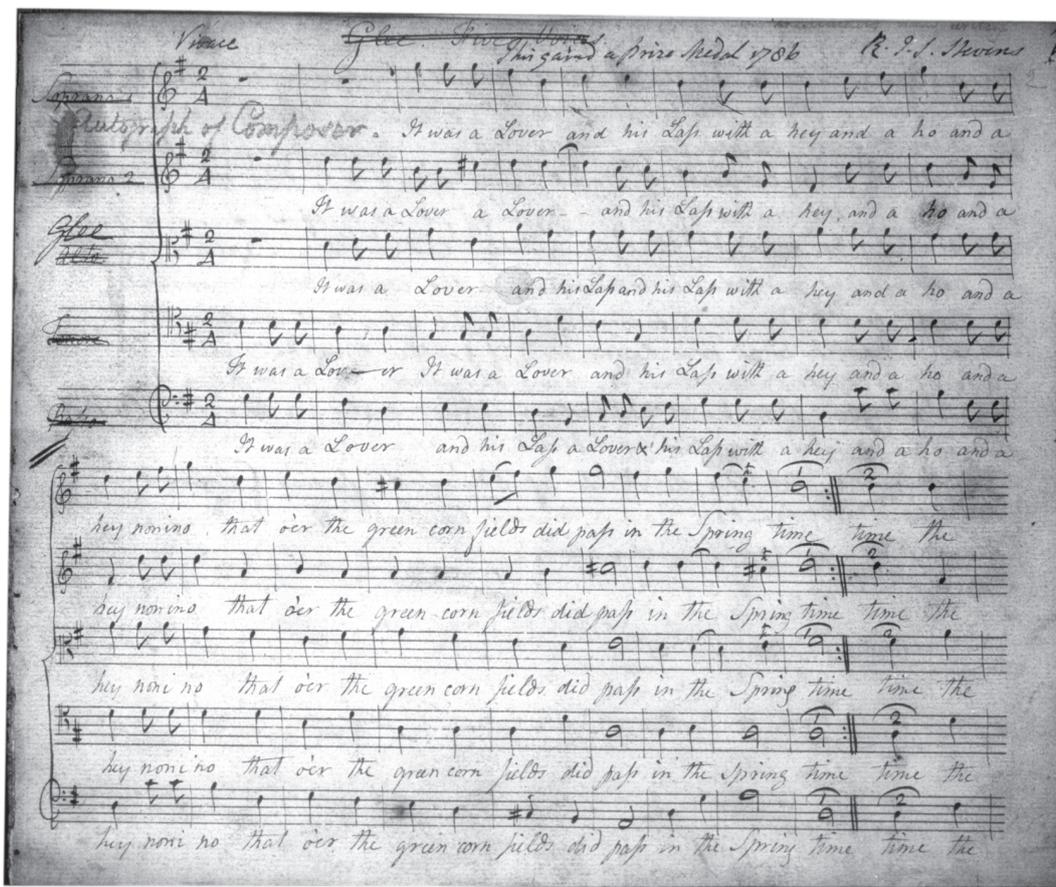
長く等閑視されてきた『音楽事典』に、10年前、ようやく光があたりはじめた。2007年、仏アルルの出版社 Actes Sud が1768年版のファクシミリ版を出版、2008年には詳細な注記付きの校訂版が Peter Lang 社から刊行された。ともに、モントリオール（カナダ）のケベック大学教授であるクロード・ドーファンが中心になった成果である。

校訂版の底本になったのは、むろん[A]であるが、その校訂報告には、実は[A]には2通りの刊本があり、表紙にはともに出版が1768年としてあるという。2つは大きさが異なり、クアトロ (in-4°) の版は前年から頒布がはじまっていたという。もうひとつは半分のオッターヴォ版で、校訂の底本となったのはクアトロの方である。南葵音楽文庫に入ったのは、クアトロの版であり、『音楽事典』初版のなかでも、先に世に出た版である。この版がどの程度残存しているかは、ドーファンの校訂報告にも記述がない。ちなみに、今回調べた限りでは、我が国では南葵本が唯一のようである。 (美山良夫)

\*参照した版

ファクシミリ版 *Dictionnaire de musique* : Facsimilé de l'édition de 1768 augmenté des planches sur la lutherie tirées de l'encyclopédie de Diderot / Jean-Jacques Rousseau; édition préparée et présentée par Claude Dauphin. Arles, Actes sud, 2007.

校訂版 *Le dictionnaire de musique de Jean-Jacques Rousseau* : une édition critique / Claude Dauphin (éd.). Bern, Peter Lang, 2008.



「受賞、1786年」と書かれたグリー《恋人とその彼女が It is lover and his lass》

## 《グリー、キャッチ集》手写楽譜本

Glees, catches, etc. by various composers, original autograph compositions.  
256p. 25 × 31cm. (収蔵番号 N-3/14)

1873年3月9日のこと、ロンドンで1741年に設立された「マドリガル協会 The Madrigal Society」の主要な会員で、貴重な手写楽譜の収集や保存に尽力し、大英博物館（現在、図書館）が所蔵する楽譜の目録作成に大きな功績を残したトマス・オリファント（1799～1873年）<sup>(1)</sup>が惜しまれつつ世を去った。そして同年4月25日、手写楽譜を数多く含むその個人蔵書は、競売に付された<sup>(2)</sup>。《グリー、

キャッチ集》は、この競売に出品された手写楽譜本のひとつで<sup>(3)</sup>、それを購入したのは、後に南葵音楽文庫の中核となる多数の楽書や楽譜を所有していたウィリアム H. カミングス（1831～1915年）だった。カミングスは、イギリスの音楽史家として自国の音楽資料の収集に力を注いでおり、ロンドンの上級市民や貴族たちが愛唱したグリー、キャッチといった、特に17世紀から18世紀にかけての社交歌に強い関心

(1) "Oliphant, Thomas", *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 13 (2001), p. 388-389.

(2) この時の競売では、著名なトマス・タリスの40声部のモテット《私にはあなたの他に望みはありません *Spem in alium*》の手写譜（競売番号 589号）も売りに出され、当日最高価格の8ポンドで落札されている。Suzanne Cole, *Thomas Tallis and His Music in Victorian England* (Woodbridge, 2008), p.120. 競売カタログ Puttick and Simpson, *Sale Catalogue*, vol. 155 (London, 1873).

(3) 上記競売番号 556号。同手写楽譜表紙裏側には、この競売の際の説明書が添付されている。

をもっていた<sup>(4)</sup>。

この《グリー、キャッチ集》には、グリー 16 曲、キャッチ 14 曲をはじめ、カノン 16 曲、マドリガル 6 曲など、合計 58 曲がおおよそ曲種ごとにまとめた形で収められている。いずれも 3 声から 5 声の小規模な作品である。ほとんどの作品の作者は不明であるが、中には「クック氏 Mr. Cookes」というように、作者の名が記されたものもある。楽譜を書いた人物は、それぞれの作者と考えられる。それは、この手写楽譜本が、キャッチやグリーといった音楽を楽しみ、奨励するために 1761 年に創設された「キャッチ・クラブ」<sup>(5)</sup>の会員たちが、その事務局長エドモンド・トーマス・ウォーレン・ホーン (1736 頃～1796 年)<sup>(6)</sup>に宛てて提出した自作曲の楽譜をまとめたものだからである。キャッチ・クラブでは、創設当初から 1794 年までの間、毎年、優秀曲に賞を与えており、それぞれの作品は、賞の獲得を狙って提出されたものだった。例えば、冒頭に収められたグリー《恋人とその彼女が *It is lover and his lass*》(凶版)には、「メダル受賞、1786 年 This gains a prize medal. 1786」と添え書きされている。

グリー、キャッチ、マドリガルといった曲種は、互いに関連し、いずれも無伴奏で男声のみの重唱で歌われるなど、音楽的にも似通っていたためにあまり厳密には区別されなかった。一方、キャッチの歌詞が極めて通俗的であったのに対して、グリーでは真面目な内容が歌われる、といった違い

はあった。

カミングスは、ジョージ・グローヴ卿 (1820～1900 年) が提唱して 1879 年に出版され、英語による最初の本格的な音楽事典となった『音楽と音楽家事典 *A Dictionary of Music and Musicians*』の「キャッチ」の項目を執筆している<sup>(7)</sup>。「キャッチは、元々は (無伴奏の) 3 声以上の声部のためのラウンド [カノン] のことで、総譜ではなく、ある程度の長さの一続きの旋律として書かれた。キャッチでは、歌い継ぐ歌手それぞれが自身の声部を適切などころで歌い始める、あるいはキャッチする」と説明し、その特徴や名称の由来を明らかにした。歌詞についても、当初 (17 世紀初頭) は単純で罪のない内容だったが、時間の経過に伴って「キャッチに新しい要素が導入され、異なる声部間で言葉や語句が誤った発音になったり、混ざり合ったりして極めて滑稽で可笑しみのある効果を生み出すことができるような文言を選ぶようになった」と述べている。そして「キャッチの歌唱は芸術となり、それは身振り手振りを交えて歌われた。それらを歌う技法は伝統的なものであり、多くの古い作例を完全に歌うのは難しく、かなりの労力を費やして練習しなければならないほどである」と続けた。(佐々木勉)

(4) 南葵音楽文庫には、この他、出版楽譜であるが、《キャッチ・クラブ、あるいは陽気な仲間たち *The Catch Club or Merry Companions*》(London: J. Walsh, 1730) N-1/2 が含まれている。『Oxalis : 音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』2 号 (2009) , p. 30 参照。

(5) 正式名称は「貴族やジェントルマンのためのキャッチ・クラブ *The Noblemen and Gentlemen's Catch Club*」で、会員は男性に限られた。創設時の会員には、エリントン伯爵やサンドウィッチ伯爵といった名立たる貴族たちが名を連ね、1786 年には後のイギリス国王ジョージ 4 世 (当時皇太子) も入会している。1861 年には、百周年を記念して最も優れた 4 声のグリー《歌は息づき *Song shuold breathe*》を作曲した功績で、W. H. カミングスに銀のゴブレットが授与された。"Catch Club", Charles Mackeson, *A Dictionary of Music and Musicians* (London, 1879), vol. 1, p. 322.

(6) E. T. ウォーレン・ホーンは、《3 声、4 声、5 声のためのキャッチ、カノン、グリー集 *A Collection of Catches, Canons and Glee's for Three Four and Five Voices*》と題した約 650 曲を収録した全 32 巻からなる曲集を 1762 年から 93 年にかけて出版し、キャッチ・クラブに献呈している。

(7) "Catch", W. H. Cummings, 前掲書, vol.1, p. 322.

## サン＝サーンス《ミューズと詩人》

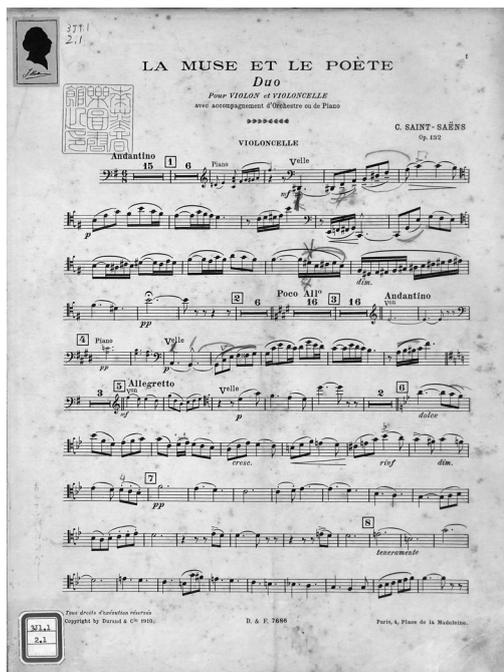
Saint-Saëns, Camille. *La muse et le poète*, Op. 132. Paris: A. Durand & Fils, 1910. 1 score (27p.) + 2 parts. 35cm. (収蔵番号 3J1.1/2.1)

### 1. ホルマン・コレクション

南葵音楽文庫にはホルマン文庫<sup>(1)</sup>なるものが存在する。これはオランダのチェロ奏者ヨーゼフ・ホルマン Joseph Hollman (1852～1926年)の楽譜コレクションで、総数、約1,030点(2,000冊)。19世紀末～20世紀初頭のチェロ音楽の宝庫であり、ホルマンに献呈された作品や、彼自身の作品も含まれている。

この文庫のなかで特に目を惹くのが、サン＝サーンス Camille Saint-Saëns (1835～1921年)の《ミューズと詩人 *La muse et le poète*》作品132の楽譜である。これはヴァイオリンとチェロと管弦楽のための作品であるが、原曲はピアノ・トリオであり、南葵音楽文庫には双方の楽譜が所蔵されている。ピアノ・トリオ版の表紙には、初演者ホルマンへの献辞が作曲者の直筆で書かれている。日付(1910年6月7日)からみて、同曲の初演の日にしたためられたらしい。

また、チェロ独奏パートの楽譜には、ホルマンによる書き込み(ボウイングやフレージング)が随所に見られ、演奏解釈上、貴重な資料となっている。



サン＝サーンス《ミューズと詩人》チェロ独奏パート、p.1

このチェロ独奏パートの楽譜自体は通常の出版譜であるが、これとともに保管されているヴァイオリン独奏パートの譜面は初刷りで、最初のページの左隅には「イザエとホルマンが演奏したときのパート(イザエ使用)」と鉛筆で書き込まれている。

「イザエ」とは、ホルマンとともにこの曲を初演したベルギー出身の大ヴァイオリニスト、イザイ Eugène Ysaÿe (1858～1931年)。初演で使用されたものである可能性が高い。これにも演奏者による書き込みがある。



サン＝サーンス《ミューズと詩人》ピアノ・トリオ版の表紙

(1) ホルマン文庫については、以下を参照。長屋見一「南葵音楽文庫のホルマン・コレクション」『Oxalis: 音楽資料デジタルアーカイヴィング研究』2号(2009), p. 25-28.



サン＝サーンス《ミューズと詩人》ヴァイオリン独奏パート、p.1

## 2. 作品について

《ミューズと詩人》はサン＝サーンス晩年の作品である。この曲は1909年、映画音楽《ギース公の暗殺》の直後に書かれた。当初はピアノ・トリオとして作曲され、のちにそのピアノパートが管弦楽化されて、今日知られているような形になった。ピアノ・トリオ版は1910年6月7日にロンドンで初演。先に触れたようにヴァイオリン独奏はイザイ、チェロ独奏はホルマン、そしてピアノは作曲者自身であった。同年10月20日には管弦楽版が、やはりイザイとホルマンを独奏者として行われている。

2人のソリストと管弦楽という編成は協奏曲を連想させるが、ヴァイオリニストとチェリストが互いの腕を競うのはサン＝サーンスの意図するところではない。この曲で2人のソリストが行うべきは、作曲者自身によれば「論争ではなく会話」である。このことは、先に述べたように、《ミューズと詩人》が協奏的な作品ではなく室内楽曲として構想されたことと無関係ではあるまい。ソロのパートには高い技巧が必要とされるが、それは両者の「会話」を魅力あ

るものとするためなのである。

《ミューズと詩人》というタイトルから、聞き手はヴァイオリン独奏を「詩人に靈感を与えるミューズ」、チェロを「ミューズに靈感の訪れを祈願する詩人」に見立てたくなるが、このタイトルは作曲者ではなく出版社のデュランの発案によるものである。過度に標題乐的な解釈は、作曲者の望むところではないであろう。

## 3. サン＝サーンスとホルマン

ホルマンは1875年に初めてパリでコンサートを開いたが、サン＝サーンスの知遇を得たのは1887年に再びパリを訪れたときのようなようである。ホルマンは1902年に、サン＝サーンスの《チェロ協奏曲第2番》作品119（ホルマンに献呈）を、1905年に《チェロ・ソナタ》第2番作品123を初演している。両者は室内楽で共演することもあったようで、1906年7月12日には、ロンドンでサン＝サーンスの《チェロ・ソナタ第1番》、同《第2番》を2人で演奏している。

なお、徳川頼貞は、1921年のパリ滞在中に、ホルマンの紹介でサン＝サーンスに会っている。その際サン＝サーンスは、頼貞のために自作の〈フランス軍隊行進曲〉（《アルジェリア組曲》第4曲）をピアノで弾いた<sup>(2)</sup>。その年の12月16日にはサン＝サーンスは亡くなっているため、この楽壇の大御所に頼貞が面会できたのは幸運であった。

## 4. ホルマンと徳川頼貞

1923年の春、ホルマンは頼貞の招きで来日し、南葵楽堂でコンサートを開催。頼貞のために自ら書いた作品も演奏されている。同年9月に関東大震災が発生することを思えば、きわどいタイミングであった。

ホルマンは1926年にパリで没した。あとに残された膨大な楽譜は、頼貞に寄贈され、いま、ホルマン文庫として南葵音楽文庫に保管されている。（近藤秀樹）

(2) 徳川頼貞『菅庭楽話』春陽堂、昭和18(1943)3, p. 217-219.

R. シュトラウス《アルプス交響曲》 — 「演奏権付き楽譜」をめぐって—  
Strauss, Richard. *Eine Alpensinfonie*, Op. 64. Leipzig: F. E. C. Leuckart, 1915.  
37x30cm. (収蔵番号 3K4.1/15)

南葵音楽文庫には、リヒャルト・シュトラウス (1864 ~ 1949 年) 《アルプス交響曲》の楽譜が、大型スコアだけでなくパート譜一式もひとまとめに袋に収められて残されている。1970 年発行の『蔵書目録(貴重資料)』に記載はなく、一般資料としての扱いであった。

この楽譜は、ライプツィヒ (ドイツ) の F. E. C. ロイカルト社が 1915 年に出版した初版で、スコアの冒頭ページに、「南葵楽堂蔵書」印とともに「南葵音楽図書館」印が押され、多くのパート譜に後者の印が認められる。スコアには書き込みはほとんどないが、パート譜は使用感がある。

この作品の世界初演は出版と同じ 1915 年の 10 月 28 日に、ベルリンで作曲者自身の指揮で行われた。アメリカ初演は翌 1916 年 4 月 28 日、フィラデルフィア管弦楽団。指揮は常任指揮者レオポルド・ストコフスキー (1882 ~ 1977 年) であった。

ただ、同時にシンシナティ交響楽団も同年 5 月 4 日アメリカ初演を目指し、戦時

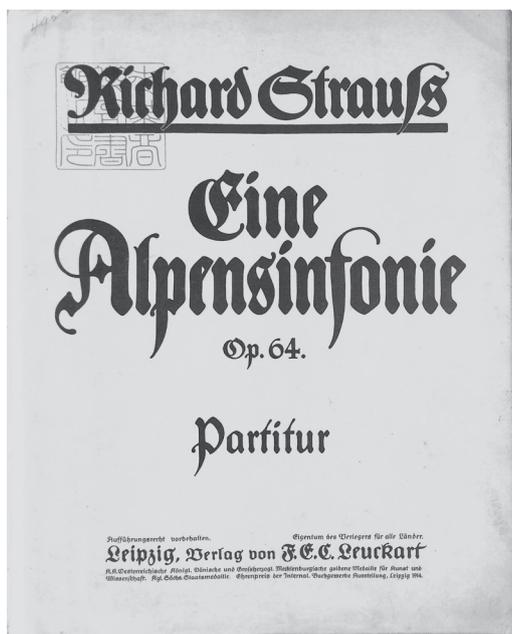
下のドイツから苦勞して演奏用の楽譜一式を取り寄せつつあった。フィラデルフィア管弦楽団の初演予告に驚いたシンシナティ側は、4 月 25 日に楽譜がとどくと直ちに練習を開始、27 日に地元紙に公告、同日演奏会を開催した。フィラデルフィアでストコフスキーが指揮台にあらわれる 24 時間前に、シンシナティでの演奏がはじまったという。したがって、急遽はやめられたシンシナティを、アメリカ初演としている記載例もある。

『薈庭樂話』(1943 年公刊) のなかで、徳川頼貞は、R. シュトラウス《アルプス交響曲》日本初演と著作権に言及している。頼貞は、東京音楽学校の管弦楽は指揮者プリングスハイム氏を迎えた当時、あらゆる飛躍を試みてとどろき新しい事をしたと高く評価し、《アルプス交響曲》を演奏するため長く書庫に眠っていた楽譜を喜んで貸与したと同書に記している。この作品の日本初演は 1934 年で、南葵音楽文庫はすでに慶應義塾図書館に寄託されていたため、プリングスハイムは寄託先の図書館を訪れ、借りだしていた。

初演後、頼貞は東京音楽学校の校長から電話をうけ、「プラーゲが何か言ってこなかったか」と尋ねられた。ドイツ人のウィルヘルム・プラーゲは、ヨーロッパの著作権団体の代理人として、日本の演奏家、演奏団体や放送局に対し、多額の著作権使用料を要求、日本の音楽界に、いわゆる「プラーゲ旋風」をおこした。

再び『薈庭樂話』によれば、日本初演の翌年、ライプツィヒのブライトコプフ社から、世界に 3 つしかない演奏権がついた楽譜のひとつを、どのような経緯で入手されたかと問い合わせる手紙がきたという。その手紙の行方は不明であるが、返事の内容は頼貞が詳しく自著に書き残している。

彼の返信は大略以下の内容である。彼が



初版スコア表紙

ライプツィヒ Leipzig の上にも演奏権保持の記載がある

1917年ニューヨーク滞在中にブライトコプフ社を訪問した際、店員から演奏権もついているからとの推薦があり購入した。当面日本には演奏できる楽団がないが、シュトラウスの音楽を日本に紹介するのは自分の念願であった。楽譜は先般の演奏会まで書庫に眠っていた。このような重要な楽譜を私に販売しながら、購入者名を記帳されていないのは不可解である。

頼貞は、その後出版社やプラーゲから何の連絡もなかったとも記している。

ただ、購入したのが1917年であったかは確認できていない。この年、頼貞は南葵楽堂建設等にむけ、用務が重なっていたと思料される。1920年、南葵文庫の一般閲覧室における楽譜、音楽書閲覧開始を前に刊行した *Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Scores), II* には、《アルプス交響曲》は記載されていない。この楽譜が、頼貞のもとに入った経緯や時期は、さらなる検証の必要があろう。

スコアのタイトルページ、スコアおよびパート譜の最初のページ左上には、“Aufführungsrecht vorbehalten”（演奏権保持）との記載が印刷されている。この記載は、20世紀初頭から実施されてきた演奏に関し著作権使用料をもとめる検討と法整備にかかわる表示である。ここで「保持」している者は作曲者であり、その代理者が作曲者にかわってその使用料を徴収する。今日では、著作権管理団体がおこない一般化している業務は、当時はまだ黎明期にあった。

その管理は、《アルプス交響曲》のように大編成作品の場合、演奏用のスコアとパート譜のセットをレンタルする料金と一体化していた。同族経営のロイカルト社に代わり、ライブツィヒだけでなく欧米に支店をもつブライトコプフ社がその業務を代行したのであろう。同社から頼貞への手紙には、演奏権を付した楽譜を3組用意、そのひと

つがニューヨークにあった筈だが行方がわからなくなったとある。実はそれを頼貞が入手していたのである。

しかし、何故ニューヨークのブライトコプフ社は、このような楽譜を売却してしまったのであろうか。南葵音楽文庫には、ブライトコプフ社が定期的に刊行していた自社刊行楽譜等の紹介を主とした雑誌 *Mitteilungen der Musikalienhandlung Breikopf & Härtel* が所蔵されている。記事内容は、1915年にかけて急速に戦時色が強くなる。そして同社の事業地は、ニューヨークをふくめ欧米4カ所からライブツィヒ1カ所に集約された。1917年4月、アメリカが参戦すると、合衆国内のドイツ企業の財産は没収された。同年、すなわち頼貞がこの楽譜を購入したとする年は、ニューヨーク支社の店じまいの年であった。

南葵音楽文庫の《アルプス交響曲》のパート譜は何度も使用された様子が見られる。ホルン1の最後には演奏者の名前とともに、「フィラデルフィア、1916年4月28日、46分」という書き込みがある。場所と日付は、アメリカ初演そのもの。バス・チューバ1の最後には、「1916年10月26、27日、ニューヨーク初演、ジョゼフ・ストランスキー指揮、45分」とある。ストランスキーはニューヨーク・フィルハーモニックでグスタフ・マーラーの後任であった。アメリカ初演、ニューヨー

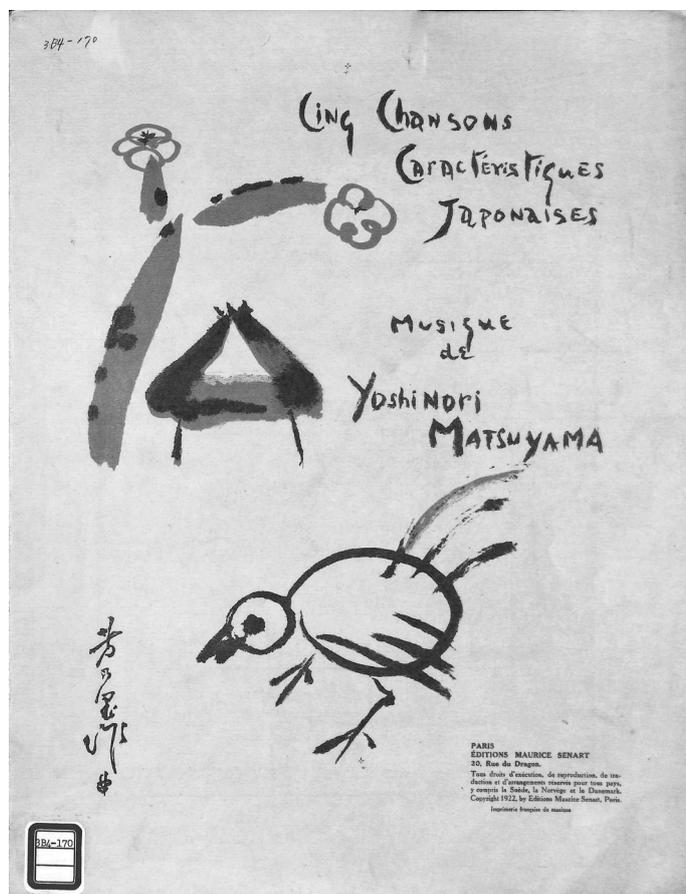
ク初演に用いられた楽譜は、海をわたり日本初演においてもまた用いられたのであった。演奏権付きの楽譜には、それとは別にもうひとつ、歴史をたぐりよせる糸が付いていたようである。(美山良夫)



パート譜ホルン1の最後の部分  
Philaはフィラデルフィアを略記したもの

## 松山芳野里 《5つの日本的な歌》

Matsuyama, Yoshinori. *Cinq chansons caractéristiques japonaises*. Paris: Editions Maurice Senart, 1922. 11p. 36cm. (収蔵番号 3B4/170)



松山芳野里《5つの日本的な歌》表紙

調査報告でも触れた、フランスの音楽出版社スナールの「室内楽シリーズ」には、ひとつだけ、日本人の作曲した音楽が入っている。それが Yoshinori Matsuyama: *Cinq chansons caractéristiques japonaises* である。ピアノ伴奏の歌曲で、出版されたのは 1922 年。「室内楽シリーズ」中の「歌とピアノ」のカテゴリーの一曲として刊行された<sup>(1)</sup>。この楽譜がひととき目をひくのは、そのいかにも日本的な表紙の図案によってである。この図案は、表紙のみでなく各曲のページにも及んでいるが、これも作曲者自身によるもの。このように凝ったデザインの楽譜はスナールの「室内楽シリーズ」ではこれが唯一である。

作曲者の Yoshinori Matsuyama は松山芳野里 (1891 ~ 1974 年)。大正から昭和にかけて活躍したテノール歌手である。松山は当初、東京音楽学校でヴァイオリンを学んでいたが、声楽への転科を希望。これが学校に認められなかったため、同音楽学校を中退、帝国劇場と歌手契約をした。大正 4 年から昭和 15 年にかけて、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、ドイツで活躍。《5つの日本的な歌》は、フランスにいたころに書かれたものであろう。

松山に関する情報は少ないが、『音楽年鑑 昭和 46 年度版』(音楽之友社)には、松山の師のひとりとして「レーナード・ハー

ン」なる名前が挙げられている。おそらくフランスの作曲家レイナルド・アーン Reynaldo Hahn (1874 ~ 1947 年) であろう。アーン自身も優れたテノール歌手であった。スナールに松山を紹介したのは、アーンだったかもしれない。

松山の《5つの日本的な歌》の内訳は、以下の通り。

1. Berceuse (子守唄)
2. Chanson de pêcheurs (漁師の唄)
3. Chanson d'amour (愛の唄)
4. Chanson de Yedo (江戸の唄)
5. Chanson de serises (桜の唄)

(1) リプリント版が、2009 年に Recital Publications から刊行されている。

松山の名は楽譜には作曲者として記されているが、いずれも日本の唄をベースにしたもので、たとえば第5曲は有名なくさくら、さくら〉がもとになっている。歌詞も日本語のそれをもとにしたものだが、第1曲と第3曲の歌詞はフランス語のみ。あとの3曲は、日本語（ローマ字表記）とフランス語の2種類がつけられている。第1曲の歌詞は Denise Donio 嬢、あとの4曲は Isabelle Mallet 嬢の仏訳、と楽譜に記されているが、これらの人物についての詳細は不明。

第1曲〈子守唄〉はピアニストのポール・ロヨネ Paul Loyonnet (1889～1988年)の、生まれたばかりの子供に献呈されている。ロヨネはサン＝サーンスやディエメルに学んだ大ピアニストで、ドビュッシーとも交友のあった人物。この人も、松山とスナール社の架け橋になることができたであろう。

第4曲〈江戸の唄〉を除く4曲は、1932年に高原書店から日本版の楽譜が出版された。スナール版と異なり、歌曲集ではなく、それぞれ単品の歌曲としての発売である。邦題は、スナール版の第1曲が〈子守歌〉、第2曲が〈花しぶき〉、第3曲が〈月〉、第5曲が〈さくら〉となっている。〈月〉の表紙の絵は松山自身によるものだが、スナールの楽譜に用いられた絵とは別である。ここでは詳述のいとまがないが、日本での出版にあたり改訂が行われたようで、歌詞にも曲にも異同が見られる。

なお、松山は、1924（大正12）年4月28日に、リヨンで行われた日仏交歓会 La journée franco-japonaise で《5つの日本的な歌》を歌った<sup>(2)</sup>。ピアノ伴奏は Marie-Jeanne Etchepare。この2人は、フランス在住のジャワ出身の舞踊家 Djemil Anik とともに、西洋と東洋の舞踊を組み合わせた舞台にも出演している（1933年?）<sup>(3)</sup>。松山の活動の幅の広さを示すエピソードである。（近藤秀樹）



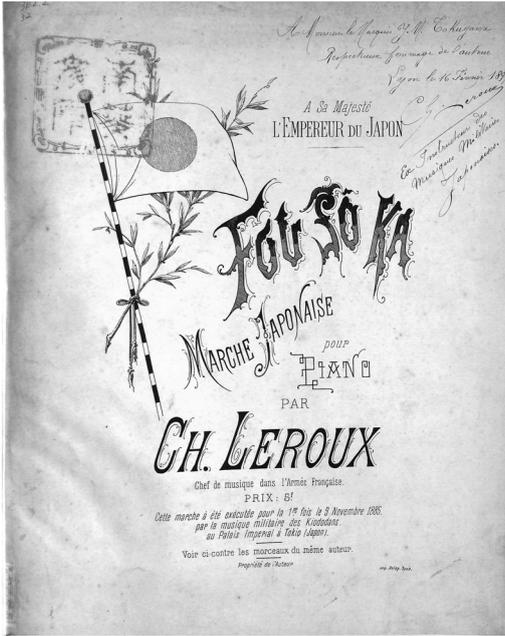
第1曲〈子守唄〉

《江戸の子守唄》（ねんねん ころりよ）をもとにしたもの

(2) 「3 里昂二於テ開催セル日仏交歓会 (La journée franco-japonaise) 二関スル報告 2」、アジア歴史資料センター。

(3) Anne Décoret-Ahiha, "Cross-Culturalism in dance, A historical and ideological analysis",

*Dance: Transcending borders*, edited by Urmimala Sarkar Munsri (New Delhi: Tulika Books, 2008), p. 265-266.



#### 扶桑歌

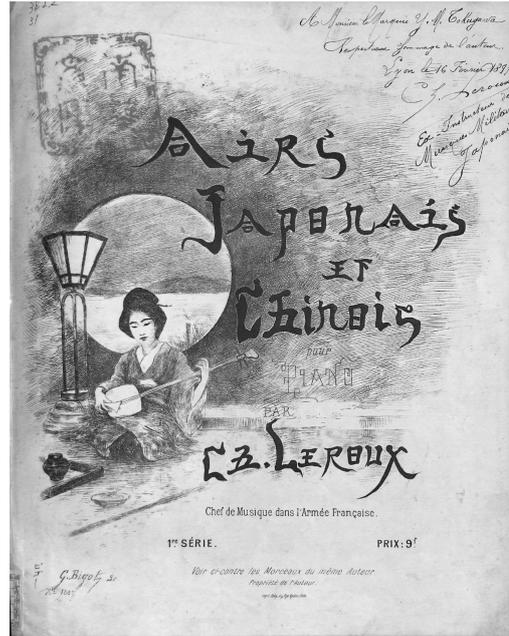
Fou sô ka: marche japonaise pour piano par Ch. Leroux. [Paris, l'auteur, 1886]

7 p., 35 cm. Cotage CH.L.7. Prix: 5f

"A Sa Majesté L'Empereur du Japon"

"Cette marche a été exécutée pour la 1re fois le 9 Novembre 1885, par la musique militaire des Kiododans au Palais Imperial à Tokio (Japon)"  
(収蔵番号 3E2.2/32)

\* 作曲者より徳川頼倫宛贈呈本 ("A Monsieur le Marquis Y. M. Tokugawa / Respectueux hommage de l'auteur" / Lyon le 16 Fevrier / Ch. Leroux / Ex-Instructeur de Musique Militaire Japonais")



#### 日本と中国の歌第1集

Airs japonais et chinois pour piano par Ch. Leroux.

1re Série. [Paris, l'auteur, 1888]

9 p., 35 cm. Cotage Ch.L (1) Prix: 9f

Illustration de couverture: Georges Bigot.

"Hommage respectueux à S. A. I. le Prince Maréchal Arisugawa"  
(収蔵番号 3E2.2/31)

\* 作曲者より徳川頼倫宛贈呈本 ("A Monsieur le Marquis Y. M. Tokugawa / Respectueux hommage de l'auteur" / Lyon le 16 Fevrier / Ch. Leroux / Ex-Instructeur de Musique Militaire Japonais")

## 日本吹奏楽の師・フランス陸軍軍楽隊長ルルーの2つの楽譜

南葵音楽図書館の蔵書にフランス陸軍軍楽隊長シャルル・ルルー Charles Edouard Gabriel Leroux (1851 ~ 1926年) の楽譜2冊がある。いずれもピアノ曲で《ピアノのための日本行進曲「扶桑歌」Fou sô ka: marche japonaise pour piano》と《日本と中国の歌 第1集 *Airs japonais et chinois, 1re sér.*》である。

作曲者ルルーはパリ音楽院出身。1884(明治17)年9月に第3次フランス軍事顧問団の一員として来日、陸軍省雇教師として軍楽隊の指導にあたり、音楽理論、ソルフェージュ、写譜、楽器実技などの課目

を基礎から指導、陸軍軍楽隊の演奏水準を飛躍的に向上させたといわれる。軍楽隊を指導する一方、作曲も手がけ、着任の翌年には『新体詩抄』収載の外山正一「抜刀隊」(我ハ官軍、我敵ハ)に付曲、鹿鳴館で陸軍軍楽隊員(当時「陸軍教導団楽隊」)により発表している。西南戦争を題材としたこの軍歌は民間でも広く愛唱され、西洋風流行歌第1号となった。1889(明治22)年、5年の契約を終えて帰国。帰国後はリヨン駐屯の陸軍軍楽隊長の任にあった。帝国陸軍軍楽隊を導いた功績に対し、1910(明治43)年日本政府から勲4等瑞宝章が贈られている。日本吹奏楽の礎を築いた人物

として記憶される。

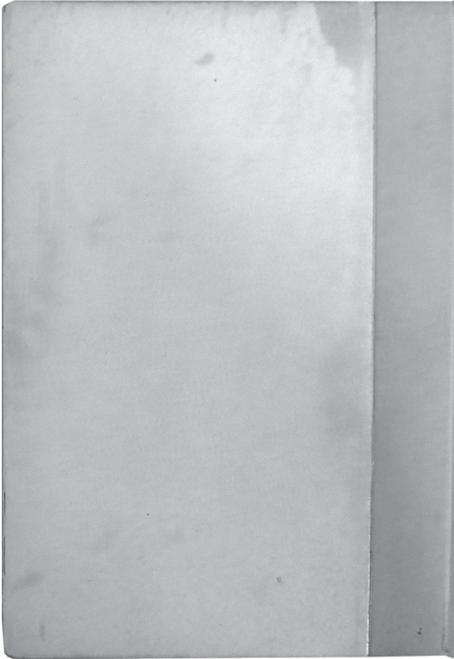
《ピアノのための日本行進曲「扶桑歌」*Fou sô ka: marche japonaise pour piano*》はもともと軍楽（吹奏楽）として作曲され、天皇に献上、1885（明治18）年9月9日に皇居で初演された。荘重な主題と軽やかなメロディーが対比をみせるこの作品は、上記《抜刀隊》をトリオに配して再編され、陸軍省制定《分列行進曲》として昭和の戦争期に至るまでしばしば演奏された。「扶桑」は日本国の意。ピアノ曲版は1886年パリのコンラール Conrard 社から出版されているが、まったく同じ体裁と内容で刊年の記載されていないものが別にある。作曲者保存用の私家版であったらうか。南葵音楽図書館所蔵本は後者。次の《日本と中国の歌》も同様である。

《日本と中国の歌第1集 *Airs japonais et chinois, 1re sér.*》は、ピアノ版《扶桑歌》と同じコンラール社から1888年に出版された。1887（明治20）年3月17日の「日本音楽会」第1回演奏会（鹿鳴館）で、おそらくは吹奏楽版が発表されている。ルルー在任当時の陸軍近衛都督有栖川宮熾仁に献上。ルルーは日本の俗謡や当時流行していた明清楽を多く編曲しており、この作品もそのひとつである。ここで用いられている楽曲は《春雨》《ひとつとや》、自作の《抜刀隊》、明清楽《茉莉歌》《漫波流水》である。日本の楽曲（《抜刀隊》を含む）から始まり、続いて明清楽の2曲のあと、再び日本の楽曲3曲を奏して終わるというポップリ風の楽曲。全3集のうちの最初の曲集である。表紙絵は風刺画家ビゴー Georges Ferdinand Bigot（1860～1927年）による。ビゴーは浮世絵に惹かれた画家の一人で、1882（明治15）年に22歳で来日、陸軍省雇教師として士官学校で写生画を教え、解傭されたのちも日本にとどまった。滞在は通算17年に及び、新聞や雑誌に日本の世相を風刺した漫画を多く寄稿するとともに、自ら漫画雑誌“トバエ Tôbaé”を創刊している。ルルー

とは日本で知り合い、親交を結んだようで、“トバエ”にもルルーらしき人物のイラストが登場する。

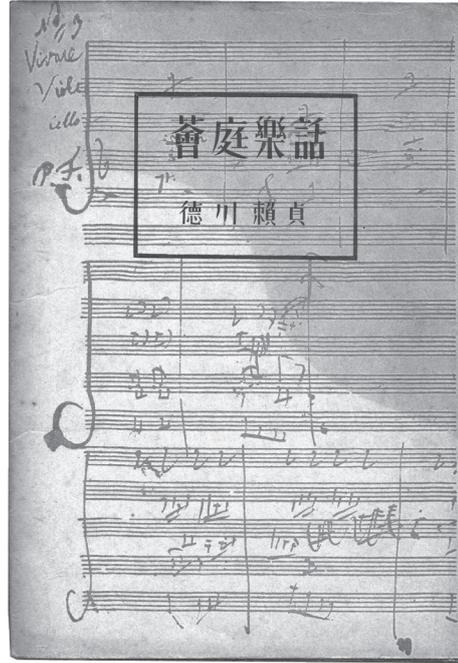
南葵音楽図書館旧蔵の楽譜はいずれも徳川頼倫に贈呈されたもので、それぞれにルルーの献辞とサインがある。几帳面な筆跡は厳格で知られた教師ルルーの性格を彷彿とさせるものだが、訳すと「徳川頼倫侯爵殿／作者より敬意をこめて／リヨンにて1897年2月16日／シャルル・ルルー（元日本陸軍軍楽隊教師）」である。頼倫が1年半にわたるヨーロッパ旅行に出発したのは1896（明治29）年3月のことであった。翌年2月ケンブリッジ修学後の視察旅行の際リヨンに立ち寄り、ルルーの歓待を受けたものとみえる。ルルーの滞日中頼倫乃至徳川家との間に親しい交遊があったかどうかは不明だが、旅に随行した斎藤勇見彦はルルーの通訳を務めたことがあるという（徳川頼貞『頼貞隨想』）。

リヨンから持ち帰られた楽譜は南葵文庫が公開された頃から蔵書に収められ、蔵書目録 *Catalogue of the Nanki Bunko*（1914年）中の“Art”の項に見出される。いずれも日本国内ではなかなか手にすることのできない稀少資料だが、とりわけ《扶桑歌》は珍しく、現在国内で所在が確認されているのはこの1冊のみである。南葵音楽図書館蔵書中もっとも早く受入れられた貴重な音楽資料として記念すべき楽譜2冊である。（林淑姫）



薈庭樂話 徳川頼貞著

東京 徳川頼貞 昭和 16(1941).11. 13, 12, 379p,  
肖像(著者), 図版(30), 19cm. 限定 50 部  
\*小松耕輔宛献本(皇紀 2602 年 2 月 11 日付. 限定  
第 12 部) 東京文化会館音楽資料室蔵



薈庭樂話 徳川頼貞著

東京 春陽堂書店 昭和 18(1943).3.20. 14, 11, 338p,  
肖像(著者), 図版(26), 19cm. カヴァー付(ペー  
ヴェン自筆「ロシア民謡の編曲 WoO158 No.15」写真複  
製) 発行部数 1500 部 定価 3 円 50 銭

## 音楽とともに —徳川頼貞著『薈庭樂話』『頼貞隨想』—

徳川頼貞(1892～1954年)の著書には生前に刊行された『<sup>わいてい</sup>薈庭樂話』(1941、43年)と遺稿集『頼貞隨想』(1956年)がある。侯爵紀州徳川家に生まれた頼貞は幼い頃から西洋音楽に親しみ、生涯を音楽とともに過した。少年の頃に懐いた音楽への強い関心と憧憬は恵まれた環境のもとで伸びやかに育まれてその翼を広げ、61歳の生涯を閉じるまで変わることはなかった。豊かな感性と見識に支えられて実現した音楽ホールや音楽図書館をはじめとする有形無形の貢献は、生家の莫大な資産を費消し尽くしたという。自身の音楽体験や事業を淡々と語る2冊の著書は、彼のみが知る秘話をも明かしつつ、西洋音楽受容期の日本の音楽的環境を活写してやまない。

『薈庭樂話』(1941、43年。薈庭は頼貞の雅号)は50歳を迎えた著者の音楽的半生記である。全18章からなり、幼少時の音楽体験からロンドン留学(1912～

15年)、帰国後の南葵楽堂の建設(1918年)、カミングス文庫の受入れ(1920年)、パイプオルガンの購入と設置(1920年)、自邸に来日演奏家を招いて催されたコンサート、妻とともに赴いた2度の外遊(1921、29～31年。南米を含む)および東南アジア訪問の旅(1926年)などの記録が収められている。時代範囲はピアニストA. ルビンシュタインが来日した1936(昭和11)年辺りまでである。但し、1925(大正14)年から32年まで運営されていた「南葵音楽図書館」については語られない。「樂話」という表題が示す通り、内容は専ら音楽に絞られ、徳川家の家政問題をはじめ、音楽に関係しない外遊などについて触れられることはない。

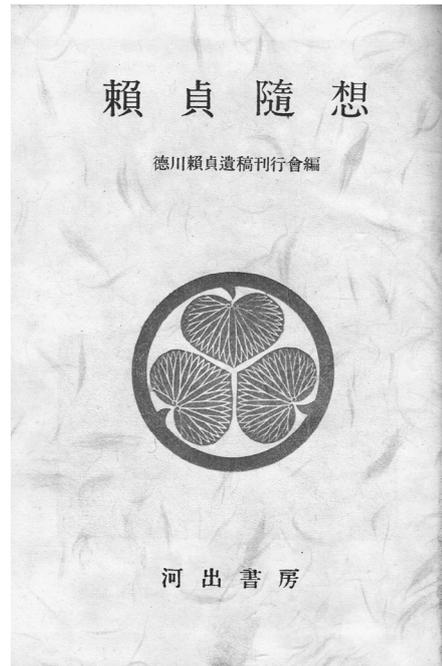
本書は1941(昭和16)年11月に私家版(限定50部)として刊行されたのち、1943(昭和18)年3月に春陽堂から再版が公刊された(1500部)。言うまでも

なく一般に流通しているのは春陽堂版だが、読み比べると両書の間にはかなりの異同があり、何らかの事情が介在したことを思わせる。

徳川頼貞が旧南葵音楽図書館掌書長喜多村進に宛てた昭和17(1942)年2月7日付書簡(和歌山県立博物館蔵)によると、前年11月に公刊予定であった『薺庭樂話』は、間に宮内省から「殿下方の事項が多い事は宮内當局に於て理由如何に拘らず発表を望まざる由」「小生の住居に Villa Elisa と Villa del Sol とかの名称は欧米崇拜の念を起させるとの意」が伝えられ、関係箇所を割愛せざるを得ないとある。このクレームは「宮内官吏の狭い意見」とする小泉信三はじめ周囲の反駁を引きおこし、結局、当初の形を「限定版」(私家版)として予定通り刊行、割愛後の版を「普通版」として公刊することにした。太平洋戦争開戦を目前にした時期である。貴族院議員として宮内省が指摘する「欧米崇拜」の懸念、また華族として皇族への配慮などは受入れざるを得なかったであろう。1年後の再版(普通版)刊行時には本文40頁、図版若干を割愛、為子夫人への献辞も除かれて出版された。

再版で削除された40頁分には、頼貞の音楽的感性がどのようにして培われたかを示す幼少時の音楽体験の幾つか——西洋風(著者によれば「西洋かぶれ」)の家庭環境、父頼倫のこと、自邸で催された園遊会に出演した軍楽隊の奏楽に印象づけられたこと、12歳頃にエラールのピアノでレッスンを始めたことなど——が含まれる。また自邸「ヴィラ・エリザ」(白金三光町)、「ヴィラ・デル・ソル」(上大崎)でのサロン・コンサート、それに招いた皇族やチェリストJ.ホルマンをはじめとする来日演奏家たちの興味深いエピソードも少なからず割愛された。

なお、初版は1982(昭和57)年11月、財団法人南葵育英会によって復刻されたが、こちらも限定200部(非売品)である。



頼貞隨想 徳川頼貞遺稿刊行會編

東京 河出書房 昭和31(1956).6.15. 18, 272p, 肖像(著者), 図版(3), 19cm. 非売品

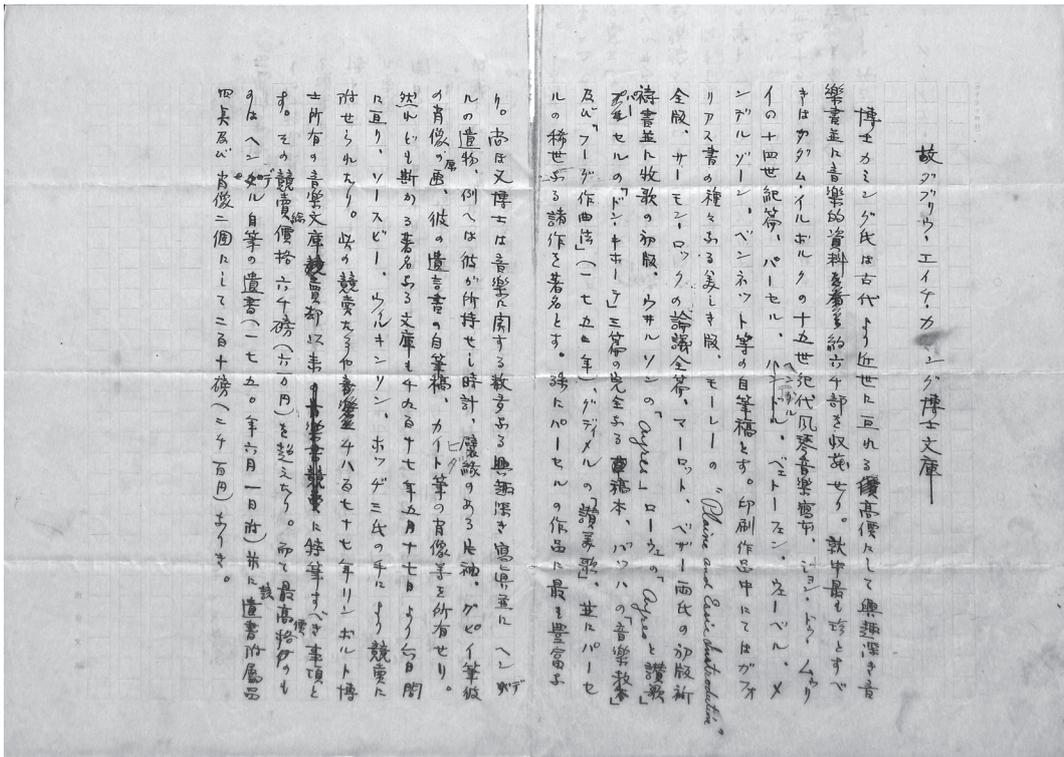
遺稿集『頼貞隨想』(1956年)は、1954(昭和29)年4月17日61歳で他界した徳川頼貞の三回忌に際して刊行された。戦後の著者は、1947年、53年の参議院議員選挙に和歌山県から出馬、いずれもトップ当選を果たしている。議員時代には誰もが認める洗練された豊かな国際的社交性によってユネスコ日本代表、外務委員会理事、また国立国会図書館の運営にかかわる図書館運営委員会委員などを務めた。『薺庭樂話』と重複することがあるが、紀州藩や祖父茂承について語られる「南葵旧聞」をはじめ、日本のユネスコ加盟の経緯、ローマ法皇との会見などその後の執筆を収める。巻末に徳川夢声との対談(『週刊朝日』1953年3月15日号「問答有用」)を収め、座談の名手といわれた著者の悠揚迫らぬ語り口を偲ばせている。

(林淑姫・篠田大基)





## 関連歴史資料



公益財団法人読売日本交響楽団蔵

故ダブリウ・エイチ・カミング博士文庫

故ダブリウ・エイチ・カミング博士文庫

博士カミング氏は古代より近世に亘れる高價にして興味深き音楽書並に音楽的資料約六千部を収蔵せり。就中最も珍とすベ

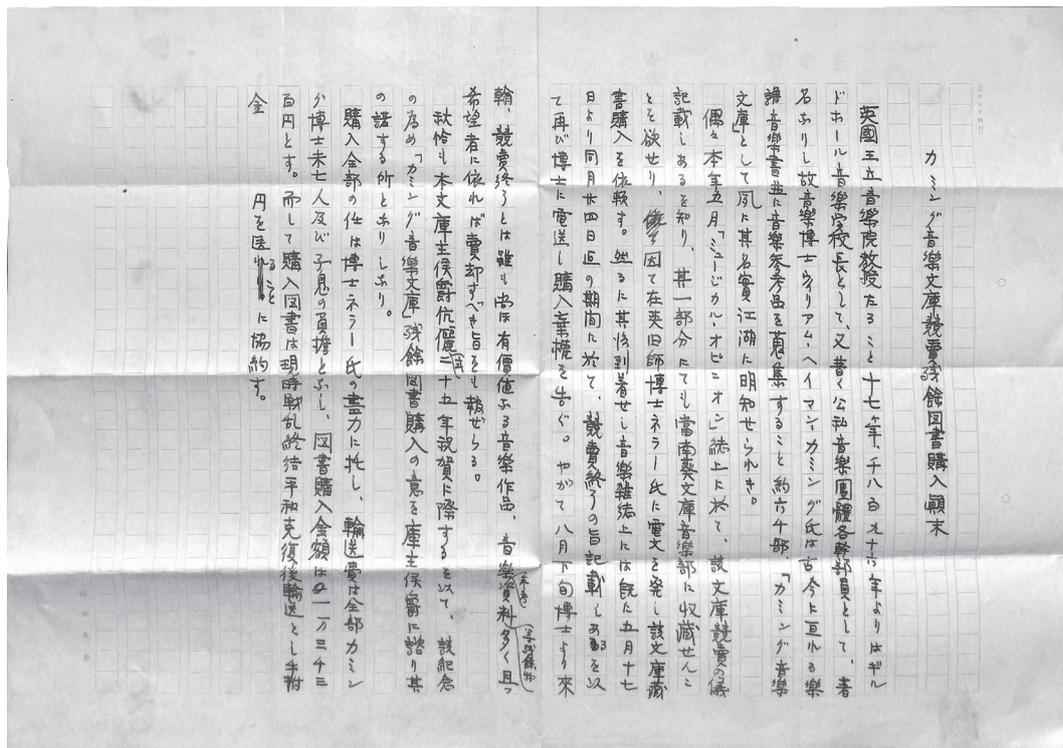
きはアダム・イルホルクの十五世紀代風琴音楽寫本、ジョン・ドウ・ムウリの十四世紀篇、パーセル、ヘンデル、ベエトーフエン、ウエーベル、メindelゾーン、ベンネット等の自筆稿とす。印刷作品中にはガフオリアス書の種々なる美しき版、モーレーの『Plaine and Esiele[sic] Inroduction[sic]』

全版、サーモン・ロツクの論議全篇、マローツト、ベザー両氏の初版祈禱書並に牧歌の初版、ウ井ルソンの『Ayres』ローウエの『Ayresと讃歌』パーセルの『ドン・キホーテ』三篇の完全なる稿本、バッハの『音楽教本』及び『フーグ作曲法』(一七五二年)、グディメルの『讚美歌』、並にパーセルの稀世なる諸作を著名とす。殊にパーセルの作品に最も豊富な

り。尚ほ又博士は音楽に關する数多なる興味深き寫眞並にヘンデルの遺物、例へば彼が所持せし時計、鑿縁のある片袖、グパイ筆彼の肖像の原画、彼の遺言書の自筆稿、カイト筆の肖像等を所有せり。然れども斯かる著名なる文庫も千九百十七年五月十七日より六日間

に亘り、ソースビー、ウイルクソン、ホツチ三氏の手により競賣に附せられたり。此の競賣たるや千八百七十七年リンボルト博士所有の音楽文庫賣却以來に特筆すべき事項とす。その競賣總價格六千磅(六万円)を超えたり。而て最高價格のものはヘンデル自筆の遺書(一七五〇年六月一日附)並に該遺書附屬品

四点及び肖像二個にして二百十磅(二千百円)なりき。



カミング音楽文庫競賣残餘図書購入願末

英國王立音楽院教授たること十七ヶ年、千八百九十六年よりはギルドホール音楽学校長として、又普く公私音楽團體各幹部員として、著名なりし故音楽博士ウィリアム・ヘイマン・カミング氏は古今に亘れる樂譜音楽書並に音楽参考品を蒐集すること約六千部、「カミング音楽文庫」として夙に其名實江湖に明かせられき。

偶々本年五月「ミュージカル・オピニオン」誌上に於て、該文庫競賣の儀記載しあるを知り、其一部分にても當南葵文庫音楽部に収蔵せんと欲せり、因て在英旧師博士ネラー氏に電文を發し該文庫前書購入を依頼す。然るに其後到着せし音楽雜誌上には既に五月十七日より同月廿四日迄の期間に於て、競賣終了の旨記載しあるを以て再び博士に電送し購入を棄權を告ぐ。やがて八月下旬博士より來

翰、競賣終了とは雖も尚ほ有價値なる音楽作品、音楽参考資料多く且つ希望者に依れば賣却すべき旨を報せらる。

秋恰も本文庫主侯爵伉儷二十五年度賀に際するを以て、該紀念の爲め「カミング音楽文庫」残餘図書購入の意を庫主侯爵に諮り其の諾する所となりしなり。

購入全部の任は博士ネラー氏の盡力に托し、輸送費は全部カミング博士未亡人及び子息の負擔となし、図書購入金額は一万三千三百円とす。而して購入図書は現時戦乱終結平和克復後輸送とし手附金□□□□□円を送ることに協約す。

公益財団法人読売日本交響楽団蔵

カミング音楽文庫競賣残餘図書購入願末

カミング音楽文庫競賣残餘図書購入願末

英國王立音楽院教授たること十七ヶ年、千八百九十六年よりはギルドホール音楽学校長として、又普く公私音楽團體各幹部員として、著名なりし故音楽博士ウィリアム・ヘイマン・カミング氏は古今に亘れる樂譜音楽書並に音楽参考品を蒐集すること約六千部、「カミング音楽文庫」として夙に其名實江湖に明かせられき。

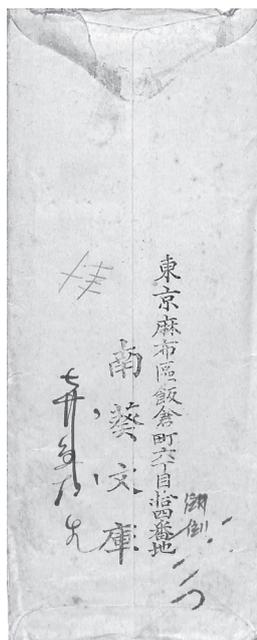
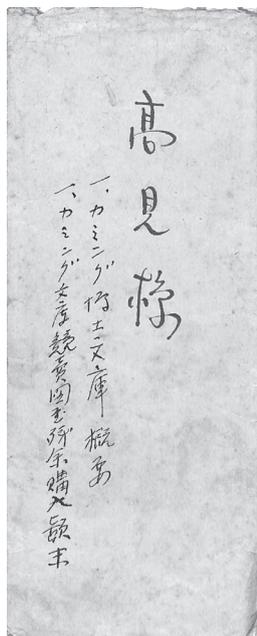
偶々本年五月「ミュージカル・オピニオン」誌上に於て、該文庫競賣の儀記載しあるを知り、其一部分にても當南葵文庫音楽部に収蔵せんと欲せり、因て在英旧師博士ネラー氏に電文を發し該文庫前書購入を依頼す。然るに其後到着せし音楽雜誌上には既に五月十七日より同月廿四日迄の期間に於て、競賣終了の旨記載しあるを以て再び博士に電送し購入を棄權を告ぐ。やがて八月下旬博士より來

翰、競賣終了とは雖も尚ほ有價値なる音楽作品、音楽参考資料等残餘物多く且つ希望者に依れば賣却すべき旨を報せらる。

秋恰も本文庫主侯爵伉儷二十五年度賀に際するを以て、該紀念の爲め「カミング音楽文庫」残餘図書購入の意を庫主侯爵に諮り其の諾する所となりしなり。

購入全部の任は博士ネラー氏の盡力に托し、輸送費は全部カミング博士未亡人及び子息の負擔となし、図書購入金額は一万三千三百円とす。而して購入図書は現時戦乱終結平和克復後輸送とし手附金□□□□□円を送ることに協約す。

## 資料解題



2点の原稿を収めた封筒（表裏）  
公益財団法人読売日本交響楽団蔵

それぞれ「故ダブリウ・エイチ・カミング博士文庫」「カミング音楽文庫競賣残餘図書購入顛末」と題された2点の原稿（以下それぞれ「カミング博士文庫」「残餘図書購入顛末」と略す）は、往時の南葵音楽図書館の活動を示す資料として、南葵音楽文庫に今日まで伝えられてきた。どちらも南葵文庫の名前が入った原稿用紙に書かれ、それぞれの原稿の題名（「カミング博士文庫」については封筒には「カミング博士文庫 概要」として記載）と「高見様」という宛名が表書きされた封筒に入った状態で保管されていた。「高見様」は南葵文庫音楽部の秘書であった高見廉吉を指すのであろう。封筒裏面に書かれた差出人の名前は、南葵文庫掌書を務めた喜多村進であり、内容から、徳川頼貞が口述か下書きをした文章を喜多村が清書したものと推察される。ただし、これらの文章が掲載された出版物は確認されていない。2点の原稿は、南葵音楽文庫の資料コレクションの中核をなすウィリアム・ヘイマン・カミングスの旧蔵書の競売に関して、その概要と徳川頼貞がその一部を入手した経緯を詳細に伝えている。

### 「故ダブリウ・エイチ・カミング博士文庫」

カミングスの旧蔵書の競売はロンドンにおいて1917年5月17日から24日にかけて行われた。「カミング博士文庫」の原稿からは、この競売の総価格、最高価格がついた物品とその値段を知ることができる。最高価格で落札されたヘンデル自筆の遺書および遺書附属品（遺言補足書）4点と肖像画2点は、競売番号135号として競売カタログに確認できる<sup>(1)</sup>。なお、この原稿の前半部分（「カイト筆の肖像等を所有せり。」まで）は、『グローヴ音楽事典』第2版（南葵音楽図書館は1916年フィラデルフィアで刊行された版を所蔵）の第2巻のLibraries and Collections of Musicの項目にあるDulwichの記事を和訳したものである<sup>(2)</sup>。

(1) *Catalogue of the Famous Musical Library of Books, Manuscripts, Autograph Letters, Musical Scores, etc. The Property of the Late W. H. Cummings, Mus. Doc. Of Sydcote, Dulwich, S. E. (Sold by Order of the Executors)* (London: Dryden Press, 1917), p. 16.

(2) *Grove's Dictionary of Music and Musicians*, 2nd ed., vol. 2 (London: Macmillan, 1906), p. 702. Dulwich (ダリッジ) はロンドンのカミングスの自宅があった地区の名前。

### 「カミング音楽文庫競賣残餘図書購入顛末」

頼貞は著書『薈庭樂話』のなかで、競売について知った時期を「大正六年の夏」「箱根宮ノ下に避暑していた時」と書いている<sup>(3)</sup>。したがって、「残餘図書購入顛末」にある「本年五月」とは、1917年5月を指し、この原稿が書かれたのもその年であったはずである。ただしこれは、競売のことを5月に雑誌を読んで知ったという意味ではなく、雑誌の5月号を読んで知ったという意味であろう。当時英国から日本への船便は約3か月半を要したというから<sup>(4)</sup>、雑誌の5月号（通例4月刊行）が日本に届くのは避暑の時期である。頼貞は競売に参加できず、その残余図書を遺族から譲り受けて、カミングス文庫を日本にもたらしたわけである。

このようなカミングス文庫購入の経緯は、南葵文庫の事業報告書『南葵文庫報告』においてさえ、所々異なって伝えられてきた。競売があった年の活動を報告した『南葵文庫報告』第10（1918（大正7）年）では、「我文庫に購入の分は此の競賣に付するに忍びず遺族の手に残留せる書籍の殆んど全部なり」とあり<sup>(5)</sup>、頼貞の購入分は競売にかけられていなかったことになる。しかし競売目録には後に南葵音楽文庫所蔵となる資料も掲載されているため、これは間違いと分かる。また同『報告』第12（1920（大正9）年）には、「競賣人に向つて競賣中止の請電を發せしが着電遅延の爲め既に競賣第一日の終りし所なりき従て本文庫は其の遺書全部を購入なし得ず」とある<sup>(6)</sup>。この記述では、競売2日目から頼貞が競売に参加したとも読めるが、そもそも頼貞がこの競売を知ったのは終了後であったはずだから、これも間違いである。

「残餘図書購入顛末」によると、カミングス文庫の購入は頼貞の父・頼倫夫妻の伉儷式（結婚式）25周年記念だったという。頼倫夫妻の結婚は1890年であった。

（篠田大基）

(3) 徳川頼貞『薈庭樂話』徳川頼貞刊, 昭和16.11, p. 143.

(4) エドワード・ネイラーは、南葵楽堂開堂を記念する作品の楽譜を日本に送るのに15週間（約3か月半）を要したと記している（N. [Edward Naylor], "A Concert-Hall at Tokyo", *The Musical Times*, no. 912 (1919), p. 82）。

(5) 『南葵文庫報告』第10 南葵文庫, 大正7.12, p. 10.

(6) 『南葵文庫報告』第12 南葵文庫, 大正9.10, p. 6.





## 収蔵貴重資料 目録と紹介

南葵音楽文庫の音楽書、楽譜等は、公益財団法人読売日本交響楽団と和歌山県が締結した寄託契約により、和歌山県に移管された。和歌山県は、県立図書館にほとんどの資料を収蔵したが、一部分は県立博物館の保管とした。博物館が保管するのは、大木コレクション・南葵音楽文庫編『蔵書目録（貴重資料）』（東京音楽文化センター、1970年）に掲載された資料のうち、I 音楽資料 A 写本 に分類された部分（p. 1-12）と、B 刊本 に掲載されている資料のうち2点である。

和歌山県立博物館は、保管資料のほとんどすべてと、博物館が所蔵する喜多村進関連資料のうち南葵音楽文庫ならびに徳川頼貞に関する資料をもって、企画展「南葵音楽文庫 音楽の殿様・頼貞の楽譜コレクション」を開催した。会期は2017年12月3日から2018年1月21日までであった。

本展のため、博物館が保管する南葵音楽文庫資料のすべてに、展示解説のためのキャプションを作成した。

南葵音楽文庫所蔵資料の展示は、1967年に開催されて以来半世紀ぶりであり、キャプション作成のためあらためて調査や点検をおこなった。その結果、上記目録とは異なる記載となった部分がある。そのなかには、作者名やタイトル表記も含まれる。

従来南葵音楽文庫には、日本語で内容を紹介した文献が乏しい。そのため、調査は進行中であるが、ここに企画展に際して作成したキャプションをあえて一部加筆しつつ再録し、当座の利便に資することにした。キャプションの字数は限られており、記載を断念した知見は少なくない。いずれより完全な目録、紹介につなげたい。

執筆は、イギリスの17、18世紀を佐々木勉が、J. フックおよび19世紀、イギリス以外を美山良夫が分担した。

## 凡例

**配列** 『蔵書目録（貴重資料）』（1970年）に拠っている。【】内のページは、この目録のページを示している。

**目録記載事項** 和歌山県立図書館のOPACで閲覧可能になる予定である。それまでは上記目録を参照。

**L,M,N** 記号番号は、収蔵番号として使用されてきたもので、上記目録にも記載されている。

**欧文** 利便を考え、キャプションでは使用しなかったが、一部に欧文表記を加筆した。

**画像の閲覧** 資料そのものは和歌山県立博物館が保管しているが、和歌山県立図書館の南葵音楽文庫閲覧室で、順次、慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センターによる高精細画像の閲覧が可能になる。なお、同センターの「デジタル南葵楽堂」のサイトでは、『蔵書目録（貴重資料）』に掲載されている資料（写本のぞく）の多くが閲覧可能である。

<http://note.dmc.keio.ac.jp/music-library/>

## 手紙・証文

[page 1]

### ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン： 自筆書簡（下書き） C. F. ペーターズ宛

L-1

1825年11月25日にライプツィヒの音楽出版社 C. F. ペーターズ宛てに、ベートーヴェン（1770～1827年）の甥のカールが清書し作曲家本人が署名して出した書簡（ポンのベートーヴェン・ハウス所蔵）の下書き。署名はない。『蔵書目録（貴重資料）』に記載された Opinion of Leo Liepmanns という文書は確認できていない。1927年にベルリンの音楽専門古書店で購入された。この下書きで、ベートーヴェンは前受け金に見合う作品として1曲の弦楽四重奏曲（作品130とされる）を提案しようと思案している。清書には見いだせないベートーヴェンの内心が、この下書きににじみ出ている。参照：本紀要 p. 58-61.

### ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン： 自筆書簡（下書き）の書き起こし

L-2

プロイセン国立図書館の便箋に書かれた自筆書簡（下書き）の書き起こしで、南葵音楽図書館の『ベートーヴェン百年忌記念会 圖書陳列目録』の記述から、ドイツの高名な音楽学者ヨハネス・ヴォルフ（1869～1947年）作成であったことがわかる。1927年に開催されたこの展示では、国内で初めてベートーヴェンの自筆書簡（下書き）が、この書き起こしとともに展示された。参照：本紀要 p.60.

### アルフレード・カゼッラ：自筆書簡 侯爵 [徳川頼貞] 宛 パリ、1917年9月30日

L-3

イタリアの作曲家でピアニスト、指揮

者としても活躍したカゼッラ（1883～1947年）の、面識がなかった徳川頼貞宛てのフランス語書簡で署名つき。自らが組織したイタリア現代音楽協会（SIMM）の東京支部の設置を希望している。この書簡に対して徳川頼貞が、あるいは南葵文庫がどのような返信を送ったのかは明らかではない。参照：本紀要 p. 62-65.

### トーマス・パーセル：書簡（直筆署名付き） ジョン・ゴスリング宛 1678年2月8日

L-4

イギリス・バロック期の重要な作曲家ヘンリー・パーセル（1659～95年）の父親の名を確認できる世界で唯一の資料。差出人のトーマス・パーセル（?～1682年）は、ヘンリー・パーセルを「私の息子 my sonne Henry」と記している（本文1～2行目）。受取人のゴスリングは、当時カントベリー大聖堂の聖歌隊員だった人物。

### ジョアキーノ・ロッシーニ：書簡（直筆署名つき） アーサー・セガン宛 パリ、 1827年10月28日

L-5

キングズ・シアター（ロンドン）の事務長アーサー・セガンに宛てた書簡。別人の手により清書された本文（フランス語）に、ロッシーニ（1792～1868年）の自筆署名が付されている。友人の訪英に際し便宜をはかって欲しいとしている。

### トーマス・パーセル：権利移譲証書

L-12

ヘンリー・パーセルの父トーマス・パーセルによる権利移譲証書（1681年5月15日付け）。書面によれば、財産権を与えられたのはヘンリーの弟マシュー。それはヘンリーの方が才能にあふれていたにもかかわらず、彼がトーマスの実子ではなかったためと推測される。

## 音楽書

ジョージ・フレデリク・ヘンデル (伝) :  
通奏低音の演奏を習得するための勘どころ  
Some Golden Rules for the attaining  
to play through bass (自筆?)

L-11

近年の研究では作者不詳とする意見もあるが、裏面に「ハーモニーの規則についての指導として(略) コールウィッチ・アビーのグランヴィル伯爵殿に進呈されたジョージ・フレデリク・ヘンデルの手稿」という書き込みがあることから、長くヘンデル(1685～1759年)によって書かれた通奏低音演奏の手引きと考えられてきた。参照：本紀要 p. 41-48.

カール・フリードリヒ・ツェルター :  
所蔵音楽資料目録 Verzeichnis für  
Musikalische Bibliothek (手稿)

M-1/55

ドイツの作曲家ツェルター(1758～1832年)は、長期間にわたりジング・アカデミー(ベルリン)の監督をつとめ、バッハの宗教音楽復活に大きな役割を果たした。アカデミーの蔵書にはオリジナルのバッハ資料が多く含まれていた。バッハ音楽の伝承の面でツェルター自身の所蔵資料も注目され、この分野の研究でしばしば言及されている。

## 楽譜

[page 2]

総譜によるアンセム集 Anthem in score  
(筆写楽譜)

N-7/1

イギリス・ルネサンス期の作曲家ウィリアム・バード(1543～1623年)によるアンセム《どうか主が、激しく怒られることなく》をはじめ、27曲のアンセムを含む。表紙裏には、バロック期の作曲家ジョン・ブロウ(1649～1708年)によるアンセム《全能の王にアレルヤ》の署名入り自筆楽譜が貼り付けられている。

アンセム、モテトゥス Anthems early  
manuscripts (筆写楽譜)

N-4/40

ウィリアム・バードやバロック期の作曲家ウィリアム・クロフト(1678～1727年)らによる9曲のアンセムやモテトゥス(宗教的合唱曲)をはじめ、イタリアのルカ・マレンツィオ(1553/54～99年)のイタリア語マドリガーレを改作した英語によるマドリガルなどを含む。

ダニエル・バルバ : 《すべての国よ、主を  
称えよ Laudate Dominum omnes  
gentes》(筆写楽譜)

N-5/2

北イタリアのヴェローナに生まれたバルバ(1715～1801年)は、生涯にわたり生地とその周辺で活動、宗教音楽や器楽曲、交響曲を残した。《すべての国よ、主をたたえよ》は、3つの声楽パート、2パートのヴァイオリンと通奏低音という編成の簡潔な作品で、「1740年、ヴェローナ」とタイトル・ページに記載がある。

**ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：  
諸国の民謡集 Lieder verschiedener  
Völker から ロシア民謡《可愛い娘さ  
んが森にゆき Unser lieben Mädchen  
gingen》の編曲 (自筆楽譜) WoO158-15  
L-6**

スコットランドの音楽家ジョージ・トムソン (1757 ~ 1851 年) は、母国をはじめ各国の民謡編曲をハイドンら一流の作曲界に依頼し、出版した。ベートーヴェンも、日本では《庭の千草》、《蛍の光》という題名で知られた民謡もふくめ 179 曲も編曲している。楽譜の最上段が民謡旋律で、ヴァイオリン、チェロ、ピアノという編成。この自筆楽譜は、編曲の冒頭部分を収めている。画像は読売日本交響楽団からボンのベートーヴェン・ハウスに送られ、ベートーヴェン新全集の楽譜刊行に寄与している。

【page 3】

**エクトル・ベルリオーズ：劇的交響曲  
《ロミオとジュリエット》より〈愛の情景  
Scène d'amour〉**

L-7

フランスの作曲家ベルリオーズ (1803 ~ 69 年) が 1839 年に作曲した劇的交響曲《ロミオとジュリエット》の第 3 部から、〈愛の情景〉(Adagio) 部分の主題を自ら抜き書きし、署名を添えたもの。創作のためのスケッチではなく、作品の完成後に友人へのプレゼント用として作成されたと考えられる。

**ジョン・ブラウ：《テ・デウム Te deum  
laudamus》ほか (筆写楽譜)**

N-7/9

イギリス・バロック期の作曲家ブラウ (1649 ~ 1708 年) による《テ・デウム》(我ら神をほめまつり) および《ユビラーテ》(全地よ、主に向かって喜べ) の 2 曲を収録。両作品共に、英国国教会の早祷式 (朝の祈り) で歌われる。1774 年にジョーゼ

フ・バートン (詳細不明) が筆写。

**エティエンヌ・メユール/ウジェーヌ・  
ブーリ：《若きアンリの狩り La chasse  
du Jeune Henri》(筆写楽譜)**

N-7/11

フランス北部のカンブレを中心に、音楽、美術、文学など幅広く啓発活動をおこない、フランドル地方を素材にした文筆活動をおこなったブーリ (1804 ~ 84 年) が、革命期を生きロマン主義の先駆ともされるフランスの作曲家メユール (1763 ~ 1817 年) のオペラ《若きアンリの狩り》の序曲に、歌詞を加えた版である。オペラは、後に『レオノレ』(ベートーヴェンのオペラ《フィデリオ》の原作台本) を書くことになるジャン・ニコラ・ブーウィイ (1763~1842 年) の脚本が平凡であったため、1797 年の初演 (パリ) は成功とはほど遠い結果に終わったが、狩猟ホルンを模した豪快な吹奏を聞かせる序曲は、初演時からアンコール演奏された。序曲には、たとえばゴッショークがピアノを加えた編曲をするなど、19 世紀を通じて人気があり、ブーリによる歌詞追加もこの人気をふまえて生まれたのであろう。この加筆がおこなわれた時期や目的については不明である。

**サーヴィス集 Church services  
(筆写楽譜)**

N-4/30

サーヴィスとは、英国国教会の礼拝式文に作曲した典礼用の作品のこと。この楽譜集には早祷式用の《テ・デウム》(我ら神をほめまつり) と《ユビラーテ》(全地よ、主に向かって喜べ)、晩祷式用の《マニフィカト》(私の魂は主をあがめ) などの作品 14 曲が含まれる。作曲者は 17 ~ 19 世紀にイギリス各地の大聖堂で活躍したロバート・クレイトン、ジョン・ビショップ、ロバート・クックといった教会音楽家たち。

**ドメニコ・チマローザ：行進曲《ラ・サンニテ La Sannite》ほか（筆写楽譜）**

N-2/14

イタリア中部、ローマの東に暮らしていたサンニテは、古代ローマに対して勇猛な戦いを何度も繰り返した。オペラや鍵盤音楽を多数残したチマローザ（1749～1801年）のこの作品は、3声の声乐パートを含む行進曲で、サンニテの戦いを表現している。この筆写楽譜集には、ほかにカストラート（去勢した男性）歌手ジュゼッペ・ミリコ（1737～1802年）らの作品が含まれている。

**サーヴィス集 Collection of English church services（筆写楽譜）**

N-7/51

英国国教会の典礼用作品集で、早祷式用の《テ・デウム》（我ら神をほめまつり）と《ユビラーテ》（全地よ、主に向かって喜べ）、晩祷式用の《マニフィカト》（私の魂は主をあがめ）などの作品 25 曲が含まれる。作曲者はイギリスのルネサンス期からバロック期に活躍したトーマス・タリスやヘンリー・パーセルら 9 人の音楽家たち。スコア（総譜）ではなく各作品の 1 つの声部のみを収録したパート譜。

**イギリスのパートソング集 Collection of English part songs**

N-4/39

18 世紀半ばに成立したとされる写本で、ヘンリー・パーセル、ジョン・ブrouなどイギリスの作品ばかりでなくジャコモ・カリッシミ、ジョヴァンニ・フェリーチェ・サンチェスといったイタリアの作品を加え、全体では 21 曲にのぼる。作曲者不明の楽譜断片が裏表紙に貼り付けられ、他方第 1 曲の前には、この写本が 1833 年に発見された際の「尋常でない」経緯が記載されている。

**イギリス鍵盤音楽集 Collection of English keyboard music（筆写楽譜）**

N-3/35

イギリスの後期ルネサンスに活躍したオーランド・ギボンズ（1583～1625年）をはじめ、ジョン・ブrouやヘンリー・パーセル、さらにジョージ・フレデリク・ヘンデルといった作曲家たちの鍵盤楽器のための舞曲や、室内楽や管弦楽曲を鍵盤楽器のために編曲した作品が含まれる。舞曲は曲種別に分類されており、鍵盤楽器学習者の備忘録だった可能性が高い。

**イタリアの声楽曲集 Collection of Italian vocal music（筆写楽譜）**

N-6/61

重唱曲を中心に 10 曲のイタリアの声楽曲を集めた写本。ジョヴァンニ・パイジェッロ、ジュゼッペ・ミリコなど 18 世紀に活躍した音楽家による技巧的な作品が集められ、伴奏が鍵盤用の譜表にまとめられている。カミングス旧蔵の資料で、彼の手書きと思われる曲目リストが掲載されている。

**4 巻からなるイタリアの声楽曲集  
Collection of Italian vocal music in 4 books（筆写楽譜）**

N-6/21

アゴスティーノ・ステッファーニ（1654～1728年）、アッティリオ・アリオスティ（1666～1729年）および作曲者不明のカンタータやアリアあわせて 4 巻を 1 冊にまとめた写本。ステッファーニの作品は彼が得意とした二重唱曲、アリオスティのカンタータと作者不明のアリアには、オーボエのパートが含まれている。

**教会音楽集 Collection of sacred song  
(筆写楽譜)**

**N-3/29**

英国国教会の早禱式で歌われる《テ・デウム》(我ら神をほめまつり)と《コビラーテ》(全地よ、主に向かって喜べ)、晩禱式用の《マニフィカト》(私の魂は主をあがめ)と《ヌンク・ディミティス》(主よ、今こそ、僕を安らかに)、《私の語ることを聞け、敬虔な子らよ》(歌詞は旧約聖書のシラ書など)をはじめとするアンセム4曲の合計8曲が収録されている。作曲者の名は記載されていないが、おそらく18世紀後半の作品である。

**サーヴィス、アンセム集 Collection of services, anthems (筆写楽譜)**

**N-3/36**

英国国教会の礼拝式文に作曲したサーヴィスが集められた17世紀の写本。早禱式用の《テ・デウム》(我ら神をほめまつり)、晩禱式用の《マニフィカト》(私の魂は主をあがめ)を含む。カミングス旧蔵資料で、競売カタログ(1917年)においてはJ. ハッチンソンが作曲者としてあげられ、おそらく自筆楽譜とも記されている。

**【page 5】**

**ジョン・バプティスト・クラマー：ピアノのための新しい実践練習  
New practical school or instrumental solfeggio for the pianoforte(自筆楽譜)**

**N-6/24**

クラマー(1771～1858年)は、ロンドンを中心にヨーロッパ各地で活躍したドイツ出身のピアニスト。ここには、運指法など、ピアノ演奏に不可欠な技術を習得するために工夫された、さまざまな音型による練習曲100曲が、次第に難易度が増すように収められている。最初のページには、練習法についての指示書きがある。

**ウィリアム・クロッチ：ピアノのためのラウンド集 Rounds for the pianoforte(自筆楽譜)**

**N-6/25**

クロッチ(1775～1847年)はイギリスの作曲家。早くから神童と賞賛され、生前からイギリス最高の音楽家と評された。ラウンド、すなわちカノンの技法を駆使した3声から8声のピアノのための小品30曲を含む。各曲は、1816年7月25日から9月17日に、作曲の練習を重ねるように書き加えられていった。

**アンセム集 (珍しく古い大聖堂パート譜 A curious old cathedral partbook) (筆写楽譜)**

**N-5/10**

南葵音楽文庫の収蔵資料中、特に貴重なもののひとつ。チャールズ1世(在位1660～85年)時代の王室礼拝堂所蔵のアンセム集から散逸したバス声部のパート譜と推測され、34曲含まれるアンセムのうち、ヘンリー・パーセルによる《全地の王国よ、主に向かって歌え》と《私たちは主のもの》は、自筆楽譜とされる。

**マイケル・コスタ：オペラ《マレク・アデル Malek Adel》(筆写楽譜)**

**N-7/49, N-7/50**

コスタ(1808～84年)は、イタリア生まれながら長くロンドンの主要劇場を主な舞台に指揮者、また作曲家として活躍、オーケストラの優れた統率で知られた。彼は、バレエ音楽の作曲で熟達した腕前を發揮、そのなかにはタリオーニのために書いた作品も含まれている。また生涯に6曲のオペラを作曲、そのなかで最も知られた作品のひとつがオペラ・セリア《マレク・アデル》であり、1837年にパリのイタリア座で初演され、ロンドンでも再演された。この2分冊のオーケストラ・スコアは、カミングス旧蔵であったが、彼の蔵書の

オークションには出品されていなかった。

紀要 p. 74-75.

**二重唱、三重唱、マドリガル、カンツォネット集 Duetts, trios, madrigals, canzonets etc. in score (筆写楽譜)**

**N-3/26**

16 世紀後半から 18 世紀にかけてイギリスで活躍したトーマス・モーリー、ヘンリー・パーセル、ジョージ・フレデリク・ヘンデルや、イタリア出身でありながらイギリスでも広く知られ、作品が愛唱されたルカ・マレンツィオ、アゴスティーノ・ステッファニーニといった作曲家たちの 2 声から 5 声の声楽曲 33 曲が含まれる。

**【page 6】**

**5 曲 [6 曲] のお気に入りイタリア歌劇の歌 Five [i.e.Six] Favourite Italian opera songs in score (筆写楽譜)**

**N-3/28**

表紙には標記タイトルが英語で書かれ、スコアであることと作曲者名が書き足されている。内容は、アントニオ・サッキーニ (1730 ~ 86 年) 3 曲のほか 3 人の、いずれも 18 世紀に活躍したイタリアのオペラ作曲家の作品からアリアを抜き出し、タイトルとは異なり 6 曲を収めている。複数の筆写者による楽譜を綴じあわせている。

**グリー、キャッチ集 Glees, catches, etc. by various composers (筆写楽譜)**

**N-3/14**

グリーとキャッチはどちらも 17 世紀以来流行した男声のための重唱による声楽曲。グリーは真面目な、キャッチは通俗的な歌詞を特徴とした。1761 年には貴族などの愛好者たちがキャッチ・クラブを結成し、優秀作には賞を与えた。この譜集には、1763 年から 94 年に賞の獲得を狙って提出された作品が収められている。参照：本

**ゲオルク・ゴルトマン：チェロ協奏曲第 1 番 イ短調 作品 14 (筆写楽譜)**

**N-7/19**

ゴルトマン (1824 ~ 98 年) は、ドイツのチェロ奏者で作曲家。生涯に 8 曲のチェロ協奏曲のほか多数の小品を残している。第 1 番の協奏曲は、カンティレーナと題されたアンダンテの中間部分だけ取り出して演奏されるなど、20 世紀前半には一定の人気を保っていた作品である。このスコアはホルマン文庫に含まれ、演奏に用いられたときの書き込みが見られる。

**モーリス・グリーン：アンセム《共に手を打ち鳴らせ O clap your hands》(自筆楽譜)**

**N-6/34**

グリーン (1696 ~ 1755 年) は、イギリスのバロック期を代表する作曲家、オルガン奏者で、宮廷楽長や宮廷礼拝堂のオルガン奏者に任命された。多数のアンセム (英国国教会の礼拝で任意で歌われる宗教的合唱曲) をはじめ、鍵盤楽曲などを残している。これは、5 声合唱とオルガンによる通奏低音という編成のフル・アンセムの形による作品。

**【page 7】**

**モーリス・グリーン：オード《ミューズの 9 人の女神たちよ、降り下り、歌え Descend ye Nine descend and sing》(筆写楽譜)**

**N-3/23**

グリーンが 1708 年にアレクサンダー・ポープ (1688 ~ 1744 年) の詩に付曲した音楽の守護聖人、聖セシリアの祝日 (11 月 22 日) のためのオード。管弦楽と独唱者 4 人のための華やかな作品。

モーリス・グリーン：オード《準備せよ、円陣を組め、国王陛下のご臨席が：新年のオード Prepare! The circle form! The Royal presence: Ode for New Year's Day》(筆写楽譜)

N-3/22

1740年の元日にセント・ジェイムズ宮殿で国王ジョージ2世の前で演奏された新年を祝うオード。管弦楽を伴奏に独唱者4人が新年の喜びを順番に歌う。

ピエトロ・グリエルミ：《デボラとシサラ Debora e Sisara》より カヴァティーナ、ほか (筆写楽譜)

N-2/5

イタリアのオペラ作曲家3人の作品を綴じ合わせた楽譜帳。グリエルミ(1728～1804年)の2部分からなるオラトリオ《デボラとシサラ》は、1788年2月13日にナポリで初演された。カヴァティーナは導入部で歌われる。この筆写楽譜は、併せ綴じられたミリコ、パイジエッロの作品とともに、ルイージ・マレスカルキ(1745～1812年、作曲家、楽譜出版者)のもとで作成されたと思われる。同じ意匠のもとで製作されており、ナポリにおける楽譜流通、筆写楽譜の需要と供給の様態を伝える点でも興味深い。

ジョージ・フレデリク・ヘンデル：オラトリオからのアリア選集 *Händel's songs from his oratorios* (筆写楽譜)

N-3/3

ヘンデルの《メサイア》(1741年作曲)を中心に、彼のいくつかのオラトリオからアリアのみ19曲が含まれる。この譜集を筆写、編纂したのは、ヘンデルの写譜者兼秘書のジョン・クリストファー・スミス(1683～1763年)。

ジョージ・フレデリク・ヘンデル：オラトリオ《アタリア Athalia》HWV52 (筆写楽譜)

N-7/52

ヘンデルが1733年に作曲、同年7月10日に初演した英語オラトリオのオーケストラ・スコア。スミスによる筆写。カミングス旧蔵。世界に残るこのオラトリオ主要手稿資料数点の中に含まれている。

ジョージ・フレデリク・ヘンデル：アンセム《主よ、王はあなたの力に喜び The king shall rejoice》HWV265 (筆写楽譜)

N-7/21

イギリスが、オーストリア継承戦争の最中、1743年6月27日にデッティンゲンの戦いでフランス軍に勝利したことを祝ってヘンデルが作曲したアンセム。国王ジョージ2世(在位1727～60年)が無事に戦いから帰還したことを感謝する礼拝(同年11月27日)で演奏された。筆写したのはスミス。

ジョージ・フレデリク・ヘンデル：オペラ《ムツィオ・シェヴォラ Muzio Scevola》第3幕 HWV13 (筆写楽譜)

N-3/18

《ムツィオ・シェヴォラ》は、王立音楽アカデミーにおいて対立していたヘンデルとジョヴァンニ・ボノンチーニの技量を判定するために、理事たちが1721年に第1幕をフィリッポ・アマデーニに、第2幕をボノンチーニに、第3幕をヘンデルに作曲するように命じた作品。主にヘンデルによる第3幕がスミスにより筆写されている。

**ジョージ・フレデリク・ヘンデル：オラトリオ《サムソン》HWV57 (筆写楽譜)**

**N-3/4, N-3/5**

オラトリオ《サムソン》は、ヘンデルが、1742年に作曲したオラトリオ。台本は旧約聖書士師記（第16章）による詩人ジョン・ミルトンの《闘士サムソン》に基づく。

**[page 8]**

**調べあふれる仲間たち、あるいは詩編愛唱者たちの宝箱 The Harmonious companion or the psalm singers magazine (筆写楽譜)**

**N-3/20**

ロンドンの出版業者ウィリアム・ピアソン（1699～1735年活躍）が、1732年に刊行した詩編歌集をリチャード・クラーク（1786～1856年）が筆写したもので、1814年8月26日の日付入り。トーマス・モーリーやトーマス・レイヴンスクロフトらによって4声に和声付けされた詩編歌が収録されている。

**ヨハン・アドルフ・ハッセ：5曲のアリア集 5 Arias (筆写楽譜)**

**N-1/17**

ハッセ（1699～1783年）は、ナポリで学び、ドレスデン等で活躍したドイツの音楽家で、オペラやオラトリオなど、ヘンデル同様イタリアの歌唱様式をドイツの音楽書法に結びつけた作品群を、長い活動期間に非常に多く残した。このアリア集は、大変明瞭な書法で写譜されているが、写譜者の名前を知る手がかりは、この筆写楽譜の中には見いだされない。

**ヨハン・アドルフ・ハッセ：《我らが主 [イエス・キリスト] の墓への巡礼たち | Pellegrini al sepolcro di N.S.》(筆写楽譜)**

**N-3/19**

ハッセは当代随一の人気を誇り、多数の作品を残している。この2部分からなるオラトリオは、1742年3月23日、復活祭に先立つ聖金曜日に、ドレスデンの宮廷礼拝堂で初演された。イタリアの作曲家カルロ・パラヴィッチーノの息子でドレスデン宮廷の詩人であったステファノー・ベネデット・パラヴィッチーノ（1672～1742年）の優れた台本によるこのオラトリオは、たちまち大変評判となり、各地で繰り返し演奏された。この筆写楽譜は、イギリスの音楽家・画家のウィリアム・クロッチ（1775～1847年）が自ら写譜したもので、最後の合唱部分のみ欠くとはいえ、この作品の伝播を示す資料である。

**ジョン・リプトロット・ハットン：《パストラル Pastoral》(自筆楽譜)**

**N-7/23**

ハットン（1808～86年）はイギリスの作曲家、ピアノ奏者。ウィーンやドイツ、アメリカでも活動した。ピアノの弾き語り非常に巧みで、数百曲にのぼる歌曲や重唱曲を残した。この《パストラル》は、牧歌劇『忠実な羊飼』に登場するアミンタ、アマリッリ、マルティッコが対話風に歌う作品。自筆楽譜の後に出版楽譜が添えられている。

**フランツ・アントン・ホフマイスター：交響曲 イ長調 (筆写楽譜)**

**N-4/11**

ホフマイスター（1754～1812年）はウィーンで作曲家として、またハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンらの作品の楽譜出版社経営者として活動した。彼の交響曲イ長調につづいて、同じ筆写者により、

モーツァルト（1756～91年）の交響曲第34番ハ長調K.338も手写されている。モーツァルトがウィーンに移る前、ザルツブルク時代最後の交響曲が、親しい間柄でもあったホフマイスター作品とともに書写された理由や状況は伝えられていない。モーツァルト没後間もない1800年頃の筆写とされる。

**ジェイムズ・フック: 歌曲集 Various songs with instruments (自筆楽譜)**

**N-1/20**

イギリスの作曲家でオルガニストであったフック（1746～1827年）は、ロンドンの劇場やプレジャー・ガーデン（遊園）にある舞台のために、多数の作品を提供し、演奏した。フックの自筆とされるこの楽譜集には、主に1811年から15年にかけて、彼が座付き作曲家兼オルガニストをつとめていたヴォクソール・ガーデンズのために書いたと思われる歌曲が26曲収められている。

**ジェイムズ・フック: スケッチ帳 Autograph sketch book (自筆楽譜)**

**N-5/19**

フックの自筆とされるこの掌中に収まるような小さな楽譜集には、彼が日頃携帯して楽想を書き込んでいたことを想起させる、簡潔なスケッチが多数含まれている。

**ジェイムズ・フック: キャッチ、グリーとカノン集 Catches, glees & canons (自筆楽譜)**

**N-4/38**

フックが様々な機会に書いたキャッチ、グリーやカノンを書き留めた楽譜。譜面帳に貼り付けてもいる。グリーとキャッチは男声のための重唱による声楽曲。グリーは真面目な内容であるのに対して、キャッチ

は通俗的な歌詞がつけられていた。この曲集の最初のキャッチには、キャッチ・クラブから優秀な作品に贈られることになっていたメダルが授与されたとの記載がある。

**ジェイムズ・フック: クラリネット協奏曲 変ホ長調 (自筆楽譜、未完)**

**N-1/21**

1812年8月4日という日付をもった自筆楽譜。協奏曲は古典的な3楽章形式で書かれている。イギリスのこのジャンルの協奏曲としては最初期に属し、この作品の最も重要な資料である。稀ではあるが、今日なお演奏やレコーディングがおこなわれている作品である。

**[page 9]**

**ジェイムズ・フック: チェンバロ協奏曲 ほか (自筆楽譜、断片)**

**L-8**

フックのチェンバロ協奏曲冒頭部分8ページ（アレグロ・モデラート）、序曲の断片、別のチェンバロないしオルガン協奏曲の冒頭（アレグロ・コン・スピリート）といった複数の器楽作品のスケッチや断片からなる資料。

**ジェイムズ・フック: オリジナル・ヴァリエティズ [1808] Original varieties 1808 (自筆楽譜)**

**N-1/13**

フックが、ロンドンのプレジャー・ガーデン（遊園）にある舞台のために書いたと思われるメヌエットやガヴォットなどの舞曲をはじめ、短い作品をピアノ譜表に書きとめた楽譜帳。資料名は旧蔵者であったカミングスの記載による。96曲のなかにはスケッチのまま残された曲や断片も含まれている。

**ジェイムズ・フック:ヴァラエティズ[1810]  
Varieties 1810 (自筆楽譜)**

**N-1/15**

フックが、短い作品をピアノ譜表に書きとめた楽譜帳。資料にタイトルはないが、所蔵していたカミングスが「ヴァラエティズ 1810 ジェイムズ・フック作曲 自筆」と記載している。83 曲を数える。

**ジェイムズ・フック:未出版のヴァラエティズ Varieties - unpublished (自筆楽譜)**

**N-2/11**

フックが、短い作品をピアノ譜表に書きとめた楽譜帳。資料にタイトルはないが、所蔵していたカミングスが「未出版のヴァラエティズ ジェイムズ・フック作曲 自筆」と記載している。また、やはり同様の楽譜が書かれた紙片が差し挟まれている。

**ジェイムズ・フック:ヴァラエティズ [1808  
年 9 月] Varieties 13. Sept. 1808 (自筆  
楽譜)**

**N-2/1**

カミングスが「ヴァラエティズ 1808 年 9 月ジェイムズ・フック作曲 自筆」と記載した楽譜集。ほかに、一部が出版済みであることを示す記載がある。

**オルランドゥス・ラッスス:3 声のもてつ  
ト集 (筆写楽譜)**

**N-1/14**

後期ルネサンスを代表する作曲家のひとりであるラッスス (1532 ~ 94 年) は、膨大な数の作品を残した。カミングス旧蔵のこの写本は、3 声部のもてつト集を集めている。カントゥス、テノール、バスの各パートが、それぞれ革の写本を利用して表装されている。

「1740 年頃に転写」という記載がある紙片が、カントゥスのパート表紙裏に貼り

付けられている。

**レオナルド・レーオ:《グローリア・パトリ  
Gloria Patri》(筆写楽譜)**

**N-6/54**

ナポリで主にオペラの作曲家として名声を博したレーオ (1694 ~ 1744 年) が、各 4 声部の二重合唱と管弦楽のために書いた作品。《グローリア・パトリ》は、典礼のなかで唱えられる小栄唱のテキスト「父と子と聖霊に栄光がありますように……」の最初の言葉である。専門的な筆写者の手になると思われる。

**フランツ・リスト:《テ・デウム Te Deum》  
ほか (スケッチ)**

**L-9**

リスト (1811 ~ 86 年) の楽想スケッチの紙片。バリトンあるはバス独唱の部分が記されている。裏面には、ピアノ曲のスケッチを、修正とともに見ることができるが、完成作品との関係は不明。徳川頼貞あるいは南葵音楽図書館がどこでこのスケッチを入手したのかは明らかでない。

**リュート曲集 (筆写タブラチェア譜)**

**N-4/42**

17 世紀中頃にイギリスで筆写されたとされるリュートのためのタブラチュア (演奏法を記譜した楽譜)。同時期に活躍した老ゴータイエの作品を含んでいる。リュート歌曲では、歌唱のパートは通常の上五線譜をそえた例が見られる。革の表装。カミングス旧蔵資料のひとつである。

**エドワード・ジェイムズ・ローダー: オペラ  
《夜の踊り子たち The night dancers》  
序曲 (自筆楽譜?)**

**N-7/29**

ローダー (1809 ~ 65 年) は、イギリ

スの作曲家で指揮者、劇場の監督としても活躍した。彼の作品のうち、生前に最も成功した作品。彼がロンドンのプリンセス劇場の音楽監督に就任して間もない1846年10月29日に初演され、翌年5月まで43回も上演が繰り返された。この作品は《妖精ヴィリス、あるいは夜の踊り子たち》、《ジゼル、あるいは夜の踊り子たち》という題名でも知られている。ヴィクトリア朝のイギリス・オペラを象徴する作品とされる。表紙には「ローダーの自筆楽譜」との記載が見られる。オペラ全体の自筆楽譜はワシントンの議会図書館が所蔵している。また、オーケストラのパート譜はリヴァプール図書館にある。

**アントニオ・ロッチェ：重唱、三重唱、およびそれ以上の声部のためのマドリガーレ集 (筆写楽譜)**

N-4/29

ロッチェ (1667頃～1740年) は、主にヴェネツィアで活躍し、多くのオペラや宗教音楽を残している。この筆写楽譜は、1705年にヴェネツィアで印刷出版された標記の作品集を、楽譜のページばかりでなく、表紙や序文をふくめ、そっくり筆写したものである。この曲集には、同時代の高名音楽家が絶賛したり、自分の作として世にだした作品が含まれている。

**作曲者不詳 [ハーベルマン?]：ミサ曲 八長調 (筆写楽譜)**

N-6/106

作曲者が明らかではない18世紀のミサ曲。4声部の合唱、ヴァイオリンのほかにトランペットを含む祝祭的な作品である。楽譜の最初のページには、Habermannと読める鉛筆の書き込みがある。ヘンデルが自作オラトリオやオルガン協奏曲に、多くの旋律を転用したチェコの作曲家フランツ・ヨーハン・ハーベルマン (1706～

83年) を指しての記載かは不詳。

[page 10]

**ジュゼッペ・ミリコ：ソプラノのための13のアリエッタ XIII Ariette a voce Sola de Soprano (筆写楽譜)**

N-5/21

グルックのオペラで名声を博したカストラート歌手ミリコは、高い音域を歌えたソプラノ・カストラートであった。イタリア各地とロンドンで活躍した後、1780年からはナポリで活動し、作曲も手がけた。この曲集がソプラノのための、としているのはミリコ自身をさしてもいる。当時のナポリで非常に流行したハーブのパートをもち、各曲とも1曲が見開きで収まるようにつくられている。

**フランツ・ヨーハン・ハーベルマン：殉教者聖ヴァーツラフのミサ曲 Missa Sancti Wenceslai, Martyris (筆写楽譜)**

N-6/58

これまでこの楽譜の作曲者は明らかでなく、資料を所蔵していたカミングスは、ハーベルマンの可能性を示唆していたが、特定されないままであった。2017年の調査の結果、カミングスの推定のように、ハーベルマンの作品であると確認された。彼が、1747年に出版した6曲のミサ曲集に含まれる、ボヘミアの守護聖人ヴァーツラフ (10世紀) のためのミサ曲である。ヘンデルは自作オラトリオ《イエフテ》に、このミサ曲の楽句を多数用いている。

**ゲオルク・ムッフアット：2つのヴァイオリン、2つのヴィオラと通奏低音のための5つのソナタ (筆写楽譜)**

N-7/30

『蔵書目録 (貴重資料)』(1970年) には「1682年の作品集」と略記されている

が、ザルツブルクで出版されたムッフアット (1653 ~ 1704 年) の《調和へのささげもの Armonico tributo》とほぼ同じ内容である。1864 年 3 月 21 日の日付をもつ説明文がこの筆写楽譜に附属している。ムッフアットは、フランスやイタリアの器楽曲をドイツ語圏にもたらしたとされる音楽家で、ここに収められた作品はローマのコレリ宅で演奏されたという。

**ジョン・クリストファー・ペープシュ：《8つのヴァイオリンとバス・ヴィオール、あるいはハープシコードのためのソロ曲集、あるいはソナタ集》(自筆楽譜)**

**N-6/63**

ペープシュ (1667 ~ 1752 年) は、ドイツ出身の作曲家。1704 年にはロンドンに定住し、オペラをはじめ、多数の作品を残した。この曲集は、詳細は不明だが、1713 年以前に「ジョン・ハミルトン氏」のために作曲された作品集であるという。ヴァイオリンと通奏低音という形でも、鍵盤楽器の独奏でも演奏が可能。

**ニコラ・ポルポラ：オペラ《ミトリダーテ》(1730 年、ローマ) のアリア集 Arie del'opera di Mitridate nel Carnevale. 1730 Roma (筆写楽譜)**

**N-2/2/1, N-2/2/2**

イタリアの作曲家であるとともに、ポルポラ (1686 ~ 1768 年) はファリネッリらのカストラート歌手をはじめとする弟子を持つ声楽の教師としても名声を博した。ロンドンでヘンデルと、イタリアとドレスデンではハッセと競い、ウィーンでは若いハイドンを教えたことでも記憶されている。彼は生涯に 2 度、1730 年と 36 年に《ミトリダーテ》と題したオペラを、最初はローマ、つぎはロンドンのために作曲した。この筆写楽譜はローマの謝肉祭で上演するために作曲した方のオペラからアリアを抜粋

している。筆写者は明らかでない。

**ヘンリー・パーセル：オペラ《ディドとエネアス Dido and Aeneas》Z.626 (筆写楽譜)**

**N-4/41**

南英音楽文庫の収蔵資料中、特に貴重なもののひとつ。パーセルのオペラ《ディドとエネアス》(1684 年頃初演) の総譜であるが、他の資料に見られない異稿が含まれる。

**ヘンリー・パーセル：セミ・オペラ《インドの女王 The Indian Queen》Z.630 (筆写楽譜)**

**N-6/65**

セミ・オペラは、歌や器楽に台詞を交えて上演される音楽劇。《インドの女王》は、パーセルが作曲途中で亡くなったために未完のまま残された。台本は、詩人ジョン・ドライデンとロバート・ハワード卿の合作。

**ヘンリー・パーセル：4 声のソナタ第 2 番 変ホ長調 Z. 803 (筆写楽譜)**

**N-6/68**

パーセルが、1679 年にロンドンで出版した 4 声のソナタ集の第 2 番の筆写楽譜であるが、欠落している部分があり、完全ではない。また、同ソナタ集第 1 番 Z.802 の低音声部が混入している。これは、第 1 ヴァイオリンのパート譜である。

**ヘンリー・パーセル：3 声のソナタ集 Z.790 ~ 801 (筆写楽譜)**

**N-6/70**

パーセルが、1683 年に出版したロンドンで出版した 2 つのヴァイオリンと通奏低音のための《3 声のソナタ集》全 12 曲の筆写楽譜であるが、第 2 ヴァイオリンのパート譜が失われている。

**ヘンリー・パーセル：セミ・オペラ《テンペスト、あるいは魔法の島 The Tempest or The Enchanted Island》Z.631 (筆写楽譜)**

**N-6/71**

シェイクスピアの《テンペスト》による桂冠詩人トーマス・シャドウェル(1642頃～92年)の翻案台本にパーセルが作曲した音楽劇。パーセルは、歌曲や合唱曲の他、舞曲を提供している。

**ヘンリー・パーセル：オード《誰がこの喜びの日から逃れられよう Who can from joy refrain?》Z.342 (筆写楽譜)**

**N-6/72**

パーセルが、グロスター候ウィリアム(1689年7月24日生まれ。母親は後のイギリス女王アン)の6歳の誕生日(1695年7月24日)のために作曲したオード。独唱と合唱、トランペットを含む管弦楽のための華やかな作品である。

**[page 11]**

**ジョン・レディング：オルガン曲集 (自筆楽譜)**

**N-4/31**

レディング(1685/86頃～1764年)は、1619年創設のダリッジ・カレッジをはじめ、リンカーン大聖堂やロンドン市内の多くの教会でオルガン奏者として活躍した。これは、レディング自身が、自作のヴォランタリー(礼拝の前後や合間に演奏)や韻律詩編のためのチューンに和声付けしたオルガン曲などをまとめた楽譜集。

**ロッシェニ：オペラ《エジプトのモーゼ Mosè in Egitto》の二重唱へのカデンツァ例**

**L-10**

1818年にナポリで初演された上記オペ

ラの二重唱を装飾的に歌うカデンツァの例を書きとめたもの。カミングス・コレクションのオークションに出品された8点のロッシェニ資料のひとつで、その際は自筆署名がある書簡(南葵音楽文庫蔵)とセットで出品されていた。カミングスの筆跡で青鉛筆による“Probably Autograph of Rossini”との記載があるが、ロッシェニの自筆とは言い難い。例を複数示してカデンツァの唱法の可能性を具体的に楽譜で残しており、資料が19世紀にさかのぼる点から、ロッシェニ作品の歌唱実践を探究するうえで興味深い資料である。

**ウィリアム・ラッセル：《イスラエルの贖い The Redemption of Israel》(自筆楽譜)**

**N-3/32**

ラッセル(1777～1813年)は、ロンドンの捨子養育院礼拝堂オルガン奏者をはじめ、劇場付き作曲家、ピアノ奏者として活躍した。これは、旧約聖書出エジプト記第5～6章によるオラトリオで、オルガン用に編曲された序曲とオルガンによる通奏低音伴奏が付された合唱曲のみが収録されている。1810年頃にラッセル自身によってまとめられた、おそらく合唱練習用の楽譜。

**プロスペル・サン＝ダロ：《英雄交響曲断章 Fragment de Symphonie héroïque》(筆写楽譜)**

**N-6/77**

フランスの作曲家で宗教音楽や歌曲を残した子爵サン＝ダロ(1814～86年?)は、パリのサン・シュルピス教会、マルセイユの音楽院長などを歴任したが、その型破りな活動、風変わりな生涯によっても知られている音楽家。彼の作品は宗教音楽が多いが、この楽譜は、マイアベーア、ベルリオーズの友人であった彼が残した交響的な作品

で、ベルリオーズ《幻想交響曲》同様オフィクレイドという低音金管楽器が用いられている。演奏や出版の記録は見いだせない。

**ヨハン・ペーター・ザロモン:オペラ《ウィンザー城 Windsor Castle》(自筆楽譜)**

**N-3/17**

ドイツのボン生まれのヴァイオリン奏者、作曲家またハイドンをロンドンに招聘して交響曲を委嘱するなど興行師としても活動したザロモン(1745～1815年)が、ロンドンで作曲した2曲のオペラのひとつ。楽譜の最初のページ上部に、「ウェールズ公、公妃殿下の御成婚を祝い1795年コヴェント・ガーデンで上演された」と後補した記載がある。華やかな余興場面を挿入した祝祭的な作品に仕上げられている。このときのウェールズ公(プリンス・オブ・ウェールズ)は、後のジョージ4世である。ハイドンはこのオペラが初演されたとき2度目のロンドン滞在中で、作品について「なかなか良い」との評を残した。またこのオペラのために序曲を提供しているが、それは1791年最初のロンドン滞在のために作曲し未上演であったハイドン最後のオペラ《哲学者の魂》の序曲を転用したものである。なお、本資料には独立した声楽曲が綴じ込まれているが、その詳細は『蔵書目録(貴重資料)』を参照されたい。

**バイジェッロ、チマローザらの作品からのシェーナ集(筆写楽譜)**

**N-2/4**

18世紀後半のオペラ作曲家、歌手がつくったカヴァティーナや重唱曲を9曲選び出して筆写した楽譜集。標記のタイトルは表紙の記載による。ミリコの作品では、ハープのパートが加えられている。これは当時のナポリでの流行を反映し、ミリコも好んで用いていた。

**ウィリアム・シャープ:《クリスマスの歌「メサイア」Messiah. A Christmas song》(自筆楽譜)**

**N-3/30,N-3/31**

シャープについて詳細は不明であるが、イギリス北東部の町ダラムの出身で18世紀後半にロンドンで活躍した外科医で、おそらく職業音楽家ではなかった。しかし作品は、相当の腕前だったことをうかがわせる。楽譜の左側には、「序曲としてクリスマスの夜のために作られたコレルリの合奏協奏曲第8番」(作品6)を演奏するように指示書きがある。

**ジョン・クリストファー・スミス:イタリア語カンタータ、アンセム選集(筆写楽譜、多くは自筆楽譜)**

**N-3/24**

スミス(1712～95年)はドイツ出身の作曲家で、ドイツ名はヨーハン・クリストフ・シュミット(父親はヘンデルの写譜者で同名を名乗った)。1720年にロンドンを訪れ、少年期にはヘンデルから指導を受けている。イタリア語による弦楽伴奏付きのカンタータ11曲と英語によるアンセム8曲が含まれ、多くは自筆楽譜である。

**[page 12]**

**ルイ・シュポーア:2つのヴァイオリンのためのコンツェルタンテ第2番 口短調作品88(筆写楽譜)**

**N-6/91**

ドイツの作曲家シュポーア(1784～1859年)は、当初はヴァイオリニストとして名声を博し、ついで多作な作曲家として活動した。特にヴァイオリンを用いた協奏的な作品が多く、独奏協奏曲のほか、2つのヴァイオリンのためのコンツェルタンテを2曲のこした。第2番は1833年に作曲されている。この筆写楽譜は、カミングスが所蔵していたものである。

**アゴスティーノ・ステッファニー：二重奏  
曲集 (筆写楽譜)**

**N-3/25**

イタリア生まれながら主に南ドイツのバイエルンで、作曲家としてばかりでなく外交官、聖職者としても重きをなしたステッファニー (1653～1728年) は、オペラのほか多数の声楽曲を残し、二重唱曲はよく取りあげられている。そのステッファニーを作曲者とするこの楽譜は、歌詞をもたず、最上声部、上声部と通奏低音という編成で楽器指定はない。この編成で15曲が収められている。

**クリストファー・タイ：《使徒言行録による  
聖歌集 The acts of the Apostles》(筆  
写楽譜)**

**N-1/16**

タイ (1505頃～72年?) は、イギリス・ルネサンス期を代表する音楽家の一人で、国王エドワード6世 (在位1547～53年) の音楽教師を務めた。《使徒言行録による聖歌集》は1553年に出版されたタイの代表作。現代風の記譜法によるこの筆写楽譜 (おそらく18世紀) では、もともと声部別に記譜された楽譜がスコアにまとめられ、さらにオルガンのための伴奏譜が加えられている。

**ヴァルトン氏：6つの器楽伴奏付き歌曲集  
Six songs set to music by Mr.Valton  
(筆写楽譜)**

**N-6/95**

「ヴァルトン氏」については不明。添え書きによると、この歌曲集が作られた1763年当時、デラウェア伯爵邸に寄宿する19歳の「若き天才」だったという。いくつかの作品は、ヴォクソール・ガーデンズなどのプレジャー・ガーデン (遊園) で演奏され、喝采を博したと記されている。歌曲の作詞者は、ヴァルトン自身と、同

遊園で歌われる歌曲の詩を専門に書いていた詩人のジョン・ロックマン (1698～1771年)。

**アンセム、歌曲、器楽曲集 Various songs  
and instrumental pieces (筆写楽譜)**

**N-3/27**

楽譜は前方と後方から書き込まれており、前方からは主にパーセルの二重唱歌曲や作曲者不明のキャッチなどが、後方からはオーランド・ギボンズの作品を含むアンセムが、そしてさらにそれぞれ声楽作品に続いてソナタやコンソートなどの器楽曲が書き込まれている。おそらく18世紀前半の音楽愛好家による楽譜集。

**レオナルド・ヴィンチ：1730年ローマの  
謝肉祭で上演されたオペラ《アルタセルセ  
Artaserse》のアリア集 (筆写楽譜)**

**N-2/3**

イタリアのオペラ作曲家ヴィンチ (1690頃～1730年) が、ポルポラのオペラ《ミトリダーテ》 (南葵音楽文庫に筆写楽譜の所蔵がある) とおなじローマの謝肉祭 (1730年) の演目として発表した作品の抜粋。

ヴィンチは、ナポリでオペラ・セリアに新しい歌唱表現を取り込み成功をおさめたが、その最後の作品が、メタスタジオの台本による《アルタセルセ》であった。彼はこの作品を、1730年2月4日にローマで初演、その3ヶ月後に他界したが、作品はその後ヨーロッパ諸国で上演が繰り返された。声楽のテクニクと表現が高度に融合したアリアがいくつも含まれる。資料には、この楽譜の来歴を記した一文が載せられている。

**カール・マリア・フォン・ヴェーバー：オペラ《オイリアンテ Euryanthe》序曲 J.277 (筆写楽譜)**

**N-6/99**

ヴェーバー (1786 ~ 1826 年) の《オイリアンテ》(1823 年初演) は、しばしば台本の欠点が指摘され、上演回数は少ない。しかし序曲はよく知られ演奏機会もある。この筆写楽譜については、筆写者、成立時期ともにわかっていない。カミングス旧蔵。

**カール・マリア・フォン・ヴェーバー：オペラ《魔弾の射手 Der Freischütz》J.277 (筆写楽譜)**

**N-3/38**

ヴェーバーによるこの著名なオペラは、初演 (ベルリン、1821 年) 後ただちに有名になり、1824 年にはロンドンの 4 つの劇場が、それぞれ別のプロダクションを競って上演した。このオーケストラ・スコアは、王立ドゥルーリー・レーン劇場の原語上演用に作成されたものである。528 ページにも及ぶ大部ながら精緻で丁寧な筆写である。

**[page 16]**

**フランチェスコ・ビアンキーニ：『楽器 De Tribus Generibus Instrumentorum Musicae Veterum Organicae』(写本)**

**M-7/9**

本資料は、表紙に貼られた紙片の表記をもとに、ながく著者をボシュエ Bossuet に帰し、『蔵書目録 (貴重資料)』においてもボシュエの著作と記載されていた。しかし 2017 年の調査で、ローマでオットボーニ枢機卿の司書などを務めたビアンキーニ (1662 ~ 1729 年) の遺稿のひとつと同一内容であると判明した。

枢機卿は教皇アレクサンデル 8 世となった後も、彼の学問への関心のたかさゆえに

ビアンキーニを重用している。1742 年にローマで出版された著作とこの資料は、天文学関係の著作が多かったビアンキーニの学識の幅広さをしめすもののひとつで、古代ギリシア、ローマの楽器について論じている。

**[page 25]**

**『使徒書簡および福音書の朗唱法 Modus legendi et accentuandi epistolas et evangelia』(インキュナブラ)**

**M-6/61**

ミサ等において司祭が使徒書簡と福音書を、抑揚をつけつつ朗唱する方法を楽譜付きで説明している。1500 年頃あるいは 1505 年頃印刷されたとされ、世界に 11 点しか残存していないうちのひとつ。南葵音楽文庫が現在所蔵しているインキュナブラは 2 点である。

なお、インキュナブラとは、グーテンベルクがはじめて『聖書』を活版印刷した 1455 年以降 15 世紀中の約半世紀に印刷された揺籃期活字印刷物をさす。

### 図案解題

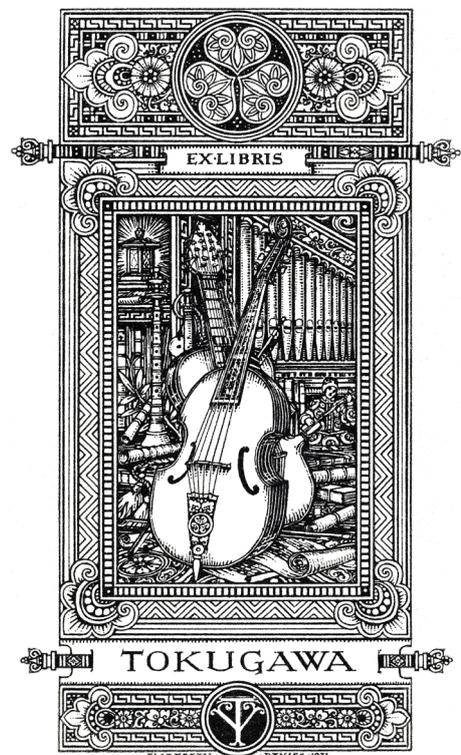
『南葵音楽文庫紀要』の裏表紙に用いた図案は、文庫の関連資料のなかに含まれ、今日に伝えられた徳川頼貞の蔵書票に拠っている。このページに示したのが、もともなった蔵書票で、楽器を囲むようにEX・LIBRIS（蔵書）とTOKUGAWA（徳川）を上下に配し、上部には葵の紋をあしらっている。中央には、6弦の弓奏弦楽器が描かれている。ヴィオラ・ダ・ガンバであろう。背後にはポジティブ・オルガンのほか、ギター、ショーム、床面にはツインクヤリコーダーとおぼしき楽器が見える。

あえて古楽器を組み合わせた復古主義、下部中央の円に見えるTとYの組文字（徳川頼貞のイニシャルであろう）の意匠、額縁にあたる部分のネオ・ゴシック様式の装飾など、この蔵書票は英国ヴィクトリア朝、とりわけジョン・ラスキンやケルムスコット・プレスなど19世紀末にむけての芸術思潮の影響を色濃く反映している。

最下部の小さな文字はELIZABETH DAVIES 1931と読める。作者であろうE. Daviesについては不詳。1931年に作画され、印刷もされた蔵書票であったが、南葵音楽図書館所蔵本に貼り付けられることはなかった。翌年には、図書館自体が閉鎖されてもいる。頼貞個人蔵書についての使用は不明。

この蔵書票は、残された資料から、同じデザインで大きさの異なる2種類が作成されたようである。大判が多い楽譜用と、音楽書用とを意識して作成したとも考えられよう。頼貞自身、あるいは南葵音楽文庫関係者が、この蔵書票に言及している記述は、いまのところ見あたらない。

突出した部分のぞき絵柄の外枠で計測すると、大きい蔵書票は幅66ミリ、高さ138ミリ、小さい方は幅48ミリ、高さ98ミリである。このページは、小さい方の蔵書票を、ほぼ原寸で再現している。（美山良夫）



徳川頼貞の蔵書票  
公益財団法人読売日本交響楽団蔵

## 南葵音楽文庫 紀要 第1号

---

平成30年3月19日発行

令和3年9月7日改訂

発行 和歌山県立図書館

〒641-0051 和歌山県和歌山市西高松一丁目7番38号

電話 073-436-9500

<http://www.lib.wakayama-c.ed.jp/>

編集協力 有限会社ティアンドティ・デザインラボ

〒531-0071 大阪市北区中津七丁目3番2号1階

<http://www.ttdesign.co.jp/>

印刷製本 有限会社隆文社印刷所

〒644-0002 和歌山県御坊市藪512-1

<http://www.ryubunsha.com/>